高知県香南市発掘調査報告書　第３集

母代寺土居屋敷遺跡

ほだいじどいやしき

――野市町立佐古小学校グラウンド拡張整備事業に伴う発掘調査報告書――

2010.3

香南市教育委員会

母代寺土居屋敷遺跡

ほだいじどいやしき

――野市町立佐古小学校グラウンド拡張整備事業に伴う発掘調査報告書――

2010.3

香南市教育委員会

SE1　遺物出土状況

SE1　出土土師器　小皿・椀・坏

SE1

SS1（SK7上面）

SE1

SK7

SE1　東 包含層

布目瓦（軒平瓦・軒丸瓦）

序

香南市は、平成18年3月に、赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村の5町村が手をつなぎ合併したまちです。青い空・碧い海・深い緑、そして実り豊かな大地と温暖な気候風土の恩恵を受け、早くから先人達が歴史を創ってきた地域です。

遺跡は大地に刻み込まれた歴史そのものであり、私たちの祖先の偽らざる営みを今日に伝えるかけがえのない遺産です。平成21年4月に開設しました香南市文化財センターでは、遺跡の発掘調査や整理作業を行うとともに、市内で発掘した数多くの土器等の遺物を展示し一般に公開しております。広く市内外の方々に香南市の歴史や文化に触れることにより感心を持っていただき、大切な遺産である埋蔵文化財を後世に伝えていく重要な施設であると考えております。

この母代寺土居屋敷遺跡のある野市町は、香南市で最も遺跡が集中した地域であり、県都である高知市のベッドタウンとして宅地開発が進み、合併以前から盛んに発掘調査が行われてきました。

本遺跡は、平安時代の終わりから鎌倉時代前半を中心とした屋敷跡であり、中でも鎌倉時代の井戸から出土した土師器や布目瓦などの一括遺物は、井戸廃絶に伴う祭祀に関する資料として注目されています。

本書は、香南市の歴史を広く知っていただくとともに、埋蔵文化財に対する一層のご理解をいただきますことを願って刊行するものです。文化財保護の資料として広く活用されれば幸いです。

最後になりましたが、高知県教育委員会、高知県埋蔵文化財センターをはじめ多数の方々のご協力をいただいたことに心からお礼申し上げます。

平成22年3月

高知県香南市教育委員会
教育長　島　崎　隆　弘

例　言

1．本書は、野市町（現香南市）教育委員会が平成12年度に実施した野市町立佐古小学校グラウンド拡張整備事業に伴う母代寺土居屋敷遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．母代寺土居屋敷遺跡は、高知県香南市野市町母代寺88番地他に所在する。

3．試掘調査は平成12年11月13日から12月27日にかけて実施し、本発掘調査は平成13年1月9日から4月9日にかけて実施した。

4．調査対象面積　5,700㎡
　試掘調査面積　520㎡
　本発掘調査面積　3,000㎡

5．試掘調査・本発掘調査時（平成12年度）の調査体制は以下のとおりである。

事務担当	吉永　次雄（野市町教育委員会	学校教育課	主事）
調査員	更谷　大介（　〃	生涯学習課	埋蔵文化財調査員）
調査員補助	西山　延幸（　〃	生涯学習課	臨時）
	岩河　邦明		

6．母代寺土居屋敷遺跡の整理作業及び報告書作成作業は平成20年度まで更谷大介（香南市教育委員会生涯学習課嘱託）および溝渕真紀（同）が担当、遺物の観察や点検作業については出原恵三・下村裕（高知県埋蔵文化財センター）、松田直則（高知県教育委員会文化財課埋蔵文化財チーフ）の協力を得た。平成21年度の報告書作成作業は、松村信博（香南市文化財センター主任調査員）と宮地啓介（香南市文化財センター嘱託）が20年度までの成果を引き継ぎ、分担して行った。

7．報告書刊行時（平成21年度）の香南市教育委員会生涯学習課文化振興保護係の体制は以下のとおりである。

課　長	吉田　豊	嘱託職員	宮地　啓介
係　長	山本　八也	臨時職員	小松　経子
主任調査員	松村　信博	〃	宮本　幸子
主　監	竹中　ちか	〃	水田　紀子
主　幹	伊野　広高	〃	福島　賀代子

8．本書の編集は松村が行った。執筆分担は以下の通りである。第Ⅰ～Ⅲ章・Ⅴ章（松村）、第Ⅲ章・Ⅳ章（宮地）。なお第Ⅱ章および第Ⅲ章遺物観察表については更谷大介の原稿を基本とし、松村・宮地が加筆修正を加えている。

9．発掘現場作業員は下記の方々である。精力的に作業に従事された方々に対し、記して敬意を表す。（敬称略）

　真岡重道・佐野宣重・櫃尾俊喜・河村みさ子・新宅広子・佐合祥子

9．重機による表土剥ぎ、排土運搬、埋め戻しについては清藤勝秀氏の便宜、助力を得た。

10. 遺物整理、報告書作成においては下記の方々の協力を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

小松経子・宮本幸子・水田紀子・福島賀代子・佐々木志穂・宮地佐枝

11. 下記の方々には現地での調査、報告書作成過程を通じて貴重なご助言・ご教示をいただいた。記して感謝する次第である。（敬称略・所属は2009年度）

出原恵三・吉成承三・池澤俊幸・下村裕（以上高知県埋蔵文化財センター）・松田直則（高知県教育委員会文化財課）・浜田恵子（高知市教育委員会）

また、出土木製品についての樹種鑑定及び保存処理を（株）吉田生物研究所に依頼した。

12. 出土遺物、写真その他図面類の関係資料は香南市文化財センター（香南市香我美町山北1553-1）で保管している。

本文目次

第Ⅰ章　調査の経緯及び方法
第１節　調査の経緯……1
第２節　試掘調査……2
第３節　調査の経過……5
第４節　調査の方法……6
第Ⅱ章　遺跡周辺の地理的歴史的環境
第１節　地理的環境……9
第２節　歴史的環境……12
第３節　母代寺土居屋敷遺跡と周辺の遺跡……14
第Ⅲ章　調査の成果
第１節　Ⅰ区……15
１．基本層序……16
２．遺構と遺物……18
(1) 集石遺構（SS）……19
(2) 井戸（SE）……22
(3) 土坑（SK）……32
(4) 溝（SD）……47
(5) 掘立柱建物（SB）・柵列（SA）・柱穴等（P）……53
(6) 下層の遺構・土取り跡……61
(7) 下層の遺構・自然流路（SR）……63
(8) 包含層出土遺物……66
第２節　Ⅱ区
１．基本層序……81
２．遺構と遺物……82
(1) 溝（SD）……82
(2) 包含層出土遺物……85
第Ⅳ章　考察
母代寺土居屋敷遺跡出土の貿易陶磁器（宮地）……107
第Ⅴ章　まとめ
母代寺土居屋敷遺跡の性格……117
第Ⅵ章　付編　自然科学分析
香南市野市町母代寺土居屋敷出土木製品の樹種調査結果－㈱吉田生物研究所－……127

挿図目次

第１図　香南市及び母代寺土居屋敷遺跡位置図 …… 1
第２図　試掘トレンチ位置図 …… 2
第３図　試掘トレンチセクション図及び平面図（S=1/80）…… 3
第４図　調査区位置図 …… 6
第５図　Ⅰ・Ⅱ区全体図と設定した4mグリッド（S=1/300）…… 7
第６図　母代寺土居屋敷遺跡周辺の地形と小字名（S=1/5,000）…… 8
第７図　母代寺土居屋敷遺跡と高知平野東半の遺跡（S=1/50,000）…… 11
第８図　母代寺土居屋敷遺跡と周辺の遺跡（S=1/10,000）…… 14
第９-１図　Ⅰ区上段北壁セクション図（S=1/40）…… 16
第９-２図　Ⅰ区下段東壁セクション図（S=1/80）…… 17
第10図　Ⅰ区全体図・遺構配置図（S=1/250）…… 18
第11図　集石遺構（SS1）遺物出土状況・平面・エレベーション図（S=1/50）…… 19
第12図　集石遺構（SS1）出土遺物実測図1（S=1/4）…… 20
第13図　集石遺構（SS1）出土遺物実測図2（S=1/4）…… 21
第14図　SE1　検出面及び1面目遺物出土状況（S=1/20）・出土遺物実測図（S=1/4）…… 23
第15図　SE1　2面目遺物出土状況（S=1/20）・出土遺物実測図1（S=1/4）・土師器、瓦器 …… 24
第16図　SE1　2面目出土遺物実測図2（S=1/4）・須恵器 …… 25
第17図　SE1　2面目出土遺物実測図3（S=1/4）・瓦類1 …… 26
第18図　SE1　2面目出土遺物実測図4（S=1/4）・瓦類2 …… 27
第19図　SE1　2面目出土遺物実測図5（S=1/4）・瓦類3 …… 28
第20図　SE1　礫出土状況・平面・エレベーション図
及び　井戸枠　平面・側面図（S=1/20）…… 29
第21図　SE1　完掘　平面・エレベーション図（S=1/20）…… 30
第22図　SE1　下層確認セクション図及び周辺遺構平面図（S=1/40）
掘形出土遺物実測図（S=1/4）…… 30
第23図　SE1　出土遺物（井戸枠－隅柱）実測図（S=1/6）…… 31
第24図　SE1　出土遺物（井戸枠－横桟及び杭）実測図（S=1/6）…… 32
第25図　SK1～6平面・エレベーション図（S=1/40）SK2・3出土遺物実測図（S=1/4）…… 35
第26図　SK7　遺物出土状況・平面・エレベーション図（S=1/20）出土遺物実測図1（S=1/4）…… 37

第27図　SK7 完掘状況・平面・エレベーション図（S=1/20）出土遺物実測図2（S=1/4）……38
第28図　SK7 出土遺物実測図3（S=1/4）……39
第29図　SK8・9　平面・エレベーション図（S=1/40）SK9出土遺物実測図（S=1/4）……40
第30図　SK10～13　平面・エレベーション図（S=1/40）SK12・13出土遺物実測図（S=1/4）…41
第31図　SK14・15　平面・エレベーション図（S=1/40）SK14出土遺物実測図（S=1/4）……42
第32図　SK16 1面目遺物出土状況　平面・エレベーション図（S=1/20）
出土遺物実測図1（S=1/4）……43
第33図　SK16 2面目遺物出土状況　平面・エレベーション図（S=1/20）
出土遺物実測図2（S=1/4）……44
第34図　SK16 完掘状況　平面・エレベーション図（S=1/20）出土遺物実測図3（S=1/4）……45
第35図　SK16 出土遺物実測図4（S=1/4）……46
第36図　SK17 平面・エレベーション図（S=1/40）……47
第37図　SD1～4 平面・エレベーション図（S=1/40）SD2・4出土遺物実測図（S=1/4）……49
第38図　SD5～9 平面・エレベーション図（S=1/40）SD5出土遺物実測図（S=1/4）……51
第39図　SD10～13 平面・エレベーション図（S=1/40）SD10・13出土遺物実測図（S=1/4）…52
第40図　SB1 平面・エレベーション図（S=1/100）……53
第41図　SB1 出土遺物実測図（S=1/4）……53
第42図　SB2～4　平面・エレベーション図（S=1/100）……54
第43図　SB5～7　平面・エレベーション図（S=1/100）……55
第44図　SB7 出土遺物実測図（S=1/4）……56
第45図　SB8・SA1　平面・エレベーション図（S=1/100）……56
第46図　Ⅰ区上段遺構と遺構（ピット）配置図（S=1/160）……57
第47図　Ⅰ区下段北半部遺構と遺構（ピット）配置図（S=1/160）……58
第48図　Ⅰ区下段南半部遺構と遺構（ピット）配置図（S=1/160）……59
第49図　ピット出土遺物実測図（S=1/4）……60
第50図　Ⅰ区下層遺構位置図（S=1/200）……61
第51図　土取り跡1～4　平面・エレベーション図（S=1/40）
土取り跡4　出土遺物実測図（S=1/4）……62
第52図　SR1　平面・エレベーション図（S=1/80）……63
第53図　SR2　平面・エレベーション図（S=1/80）出土遺物実測図（S=1/4）……64
第54図　SR3　平面・エレベーション図（S=1/80）出土遺物実測図（S=1/4）……65
第55図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図1（S=1/4）……67

第56図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図2（S=1/4）……71
第57図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図3（S=1/4）……73
第58図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図4（S=1/4）……75
第59図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図5（S=1/4）……77
第60図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図6（S=1/4）……78
第61図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図7（S=1/4）……79
第62図　Ⅰ区包含層出土遺物（521・軒丸瓦）出土状況（S=1/20）及び位置図（S=1/250）……80
第63図　Ⅱ区北壁・南壁セクション図（S=1/50）……81
第64図　Ⅱ区全体図及び溝状遺構　平面・エレベーション図（S=1/160）……83
第65図　Ⅱ区　SD15・17・21　出土遺物実測図（S=1/4）……84
第66図　Ⅱ区包含層出土遺物（S=1/4）……86

表目次

表１　母代寺土居屋敷と高知平野東半の遺跡 ……10
表２　Ⅰ区ピット計測表 ……57
表３　Ⅰ区出土遺物観察表（弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器）……87
表４　Ⅰ区出土遺物観察表（瓦類）……103
表５　Ⅰ区出土遺物観察表（木製品）……104
表６　Ⅰ区出土遺物観察表（石器・石製品・石鍋・土錘・鉄類・窯壁片　他）……105
表７　Ⅱ区出土遺物観察表（土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器）……106

写真図版目次

巻頭図版１　SE1遺物出土状況　SE1出土土師器　小皿・椀、坏
巻頭図版２　布目瓦（軒平瓦・軒丸瓦）

図版１　調査前の景観（南から・北から）
図版２　調査前の景観（北東から）　母代寺遺跡周辺の地形（南上空より）
図版３　Ⅰ区上段・下段セクション
図版４　Ⅰ区の遺構（南から）　Ⅰ区上段の遺構（北から）
図版５　Ⅰ区全景（完掘・北から）　Ⅰ区上段の遺構（完掘・南から）
図版６　遺物出土状況（P9・P12・瓦器椀・SK7）　Ⅰ区SK7よりSE1方向をのぞむ
図版７　包含層軒丸瓦（521）出土状況　SE1と包含層出土軒丸瓦（521）
図版８　SE1　1面目遺物出土状況
図版９　SE1　2面目遺物出土状況　SE1遺構底面に敷き詰められた礫
図版10　SE1遺構底面出土礫と下層確認　SE1完掘　井戸枠の状況
図版11　SE1完掘　掘形　SE1完掘　掘形半裁下層確認
図版12　SE1周辺の地形　SE1とSK7の位置関係
図版13　SK7上面（遺物集中1）軒平瓦出土状況　SK7遺物出土状況
図版14　SK7 遺物出土状況　SK7完掘状況
図版15　SK16　1面目遺物出土状況　SK16　2面目遺物出土状況
図版16　SK16　遺構完掘状況　SK12　遺物出土状況
図版17　Ⅰ区下段の土坑とセクション　Ⅰ区下段の土坑
図版18　Ⅰ区土坑（SK5・6・17）、土取跡1～3
図版19　土取跡3　土取跡4
図版20　Ⅰ区下層の遺構（自然流路）　自然流路（SR2）堆積状況
図版21　Ⅱ区全景（完掘）　Ⅱ区堆積状況　Ⅱ区南壁セクション　SD15遺構底面の礫
図版22　現地説明会風景　佐古小学校遺跡見学会　佐古小学校発掘体験
図版23　調査風景　調査に参加した人々
図版24　土師器・小皿（遺構出土）
図版25　土師器・小皿、坏、椀（包含層出土）
図版26　土師器・坏、椀

図版27　土師器（椀・坏）、須恵器（椀）、瓦器（小皿・椀）
図版28　弥生土器・須恵器
図版29　SE1出土須恵器　甕（亀山窯）
図版30　SE1出土遺物　布目瓦（丸瓦）
図版31　SE1出土遺物　布目瓦（軒平瓦・平瓦）
図版32　SE1出土遺物　布目瓦（平瓦・丸瓦）
図版33　SS1・包含層出土遺物　布目瓦（軒丸瓦・軒平瓦・平瓦）
図版34　SS1・SK7出土遺物　布目瓦（軒平瓦・平瓦）
図版35　石鍋・石鍋転用温石　　瓦質土器・瓦器
図版36　瓦質土器
図版37　貿易陶磁器1　遺構出土白磁・青磁　包含層出土染付・青磁
図版38　貿易陶磁器2　包含層出土　青磁1
図版39　貿易陶磁器3　包含層出土　青磁2
図版40　貿易陶磁器4　包含層出土　白磁1
図版41　貿易陶磁器5　包含層出土　白磁2
図版42　土取跡4出土須恵器　石鏃・硯　　包含層出土　土師器・須恵器・陶器
図版43　窯壁片・鋳型片　太型蛤刃石斧・鉄製品
図版44　木製品1　SE1井戸枠
図版45　木製品2
図版46　母代寺周辺の地形（航空写真）

第Ⅰ章 調査の経緯及び方法

第１節　調査の経緯

本調査は野市町（現香南市）立佐古小学校グラウンド拡張整備事業に伴う緊急発掘調査である。

平成12年10月19日、高知県香美郡野市町（現香南市）母代寺88番地他に所在する町立佐古小学校グラウンド拡張整備工事中に、土師器・須恵器・瓦等が出土した。これに伴い野市町教育委員会は、10月19日に工事の中断を決定し、平成12年11月13日より緊急に試掘調査を行った。試掘調査に先立ち、地名と字名をもとに遺跡名を「母代寺土居屋敷遺跡」と決定する。試掘調査では11ヶ所のトレンチを設定、約5,700㎡の対象面積の中、約520㎡について調査を実施した。

運動場予定地の西側には、かつて公民館と保育所があり、その東側は畑だった。東西で段差があったため、東側の一段低い土地を赤土で造成した上で佐古小学校の仮のグラウンドとして使用していた。試掘調査で遺物・遺構を確認した場所は、畑あるいは水田として利用されてきた部分であり、公民館・保育所のあった範囲には遺物・遺構の残存は認められなかった。本発掘調査の範囲は約3,000㎡となり、Ⅰ区・Ⅱ区の調査区を設定し、調査を開始する。

調査期間は、試掘調査が平成12年11月13日～12月12日、本発掘調査が平成12年12月13日～平成13年3月31日で、調査面積は、調査対象面積約5,700㎡、試掘調査面積約520㎡、本発掘調査面積約3,000㎡である。

第1図　香南市及び母代寺土居屋敷遺跡位置図

第２節　試掘調査

試掘調査区内に、第2図のとおり11ヶ所の試掘トレンチを設定、重機及び手掘りにより、遺構・遺物の有無を確認する。各試掘トレンチの概要は以下のとおりであり、TR1・2・3・5・7・8については土層堆積状況について第3図に示す。

TR1・2・3・4

運動場の調整池となる部分であるが、試掘の結果、遺物は出土しなかった。TR1からピットが4基確認できたが、遺物を伴っておらず不明である。TR2～4にも、遺構や土器はなかった。

TR5

調査対象地北側に位置する。ここでは、流れ込みだと思われる土器片が出土しており、その下には、溝と思われる遺構が検出された。溝の中には手のひら大の石が詰め込まれており、暗渠としての機能を持つと考えられる。

TR6

調査対象地北側に位置する。表土から20cmくらいの深さで土器が出土しており、本調査時に確認調査を行う。

TR7

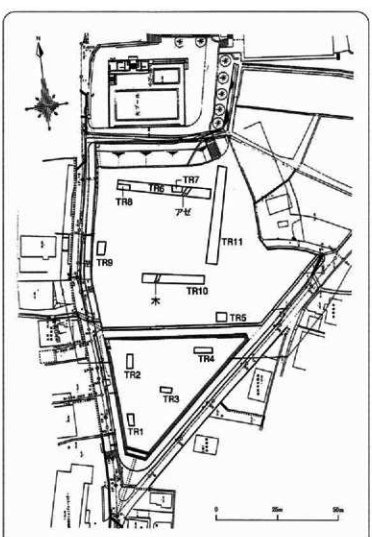
TR6の西側に位置する。このTR7の西側に畦のようなものが、北東方向から南西方向に向かって延びている。その畦を境に土の堆積状況も異なっており、畦より東側は土器片を含む層が確認できたが、西側にこの層はなく、黒褐色の粘質土が堆積しており、沼地（池）のような様相を呈する。

TR8

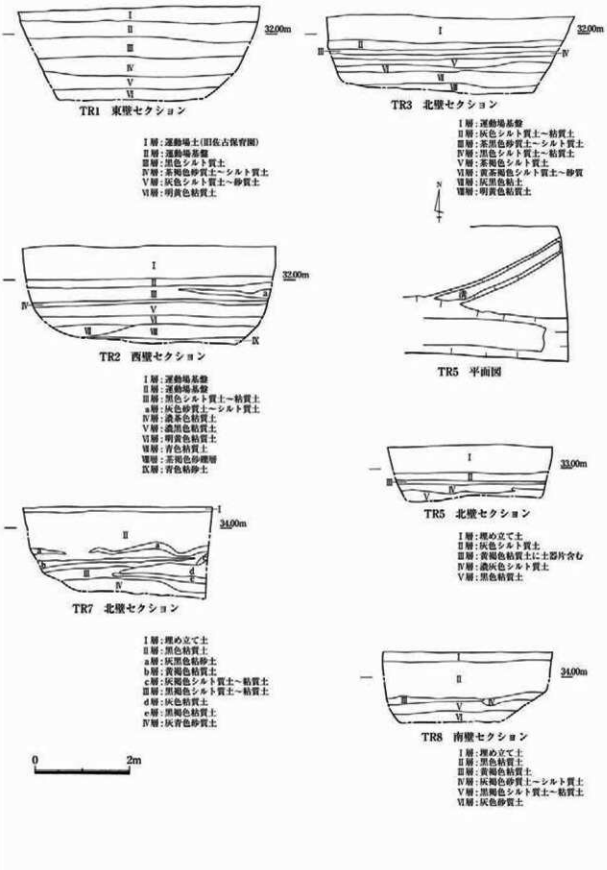
調査対象地北側の一番西側に位置する。TR7と同様、黒色の粘質土が堆積している。遺構・遺物は検出されなかった。

TR9

調査対象地西側に位置する。TR7・8と同様、黒色の粘質土が堆積している。遺構・遺物は検出されなかった。



第2図　試掘トレンチ　位置図



第3図　試掘トレンチ　セクション図及び平面図（S=1/80）

TR10

調査対象地ほぼ中央付近に位置する。上層は赤土で造成されているが、その下の層からは土器が多量に出土した。土器を含む層の下を確認するため、2本のサブトレンチを設定し、柱穴と思われるピットを検出した。このピットは2m間隔で並んでいる。全体の確認は本調査に委ねる。

TR11

調査対象地西側に位置する。南北に細長いトレンチである。北側部分では遺構・遺物の検出面までの深さが浅いが、南に行くとTR10同様、赤土で造成されている。この赤土についても本発掘調査時に除去し、下層の確認を行う。

試掘調査まとめ

運動場となる部分の西側は、昔公民館があり、東側は畑だった。そのため段差があり、佐古小学校の仮のグラウンドとして使用する際に、東側の一段低い土地を赤土で造成している。今回土器や遺構が出土した場所は、主に昔から畑（水田）であった部分であり、公民館や、保育所が建てられていた部分については手が加えられており遺構・遺物は残っていない。

TR 5

TR 11

TR7の東側のアゼ、TR10の西側に出土した木（土地の境界を表す木か？）より東側に遺構・遺物が残存しているため、このアゼと木より東側を本発掘調査の対象地とする。本発掘調査の範囲は約3,000㎡となり、造成されている赤土を除去してから調査を開始する。試掘調査を行った調整池となる部分については、これ以上の成果はないものと見られるので工事を再開する。

今回の試掘調査で出土した土器は、平安時代後期～南北朝時代の遺物で占められており、特に鎌倉時代の遺物が中心である。中でも在地産の土師器が多く出土し、土師器か瓦質の脚付鍋の口縁部や脚部も出土している。他にも中国の華南産白磁Ⅳ類に分類される白磁の碗や、龍泉窯系の青磁碗、鎬蓮弁文青磁碗が出土しており、佐古亀山産の可能性も考えられる布目瓦や須恵器甕の胴部も出土している。

遺物からみても鎌倉時代が中心になっていると思われ、「土居屋敷」という字名が残っているが、その時代（中世末～近世）の遺構・遺物は見られない。今回の試掘調査では遺構検出面で止めてあるため、遺構に伴う土器は含まれていない。本発掘調査での成果を待ちたい。

（『平成12年度　母代寺土居屋敷遺跡試掘調査概報』野市町教育委員会　2000年より　一部改変）

第３節　調査の経過

平成12年（2000年）

11月13日　試掘調査開始

11月17日　野市中学校1年生　職場体験学習

12月13日　発掘調査開始

平成13年（2001年）

1月11日　Ⅰ区北側でピット群検出

1月22日　佐古小学校6年生　体験学習

Ⅱ区の調査終了

1月23日　佐古小学校5年生　体験学習

1月31日　Ⅰ区で軒丸瓦・軒平瓦出土

2月13日　Ⅰ区で井戸1を検出

2月15日　Ⅰ区で井戸1の2面目を検出

2月19日　Ⅰ区西側でピット群検出

野市町文化財保護審議委員現場を視察

2月26日　Ⅰ区で井戸2を検出

3月11日　現地説明会

3月31日　発掘調査現場作業終了

佐古小学校　体験学習

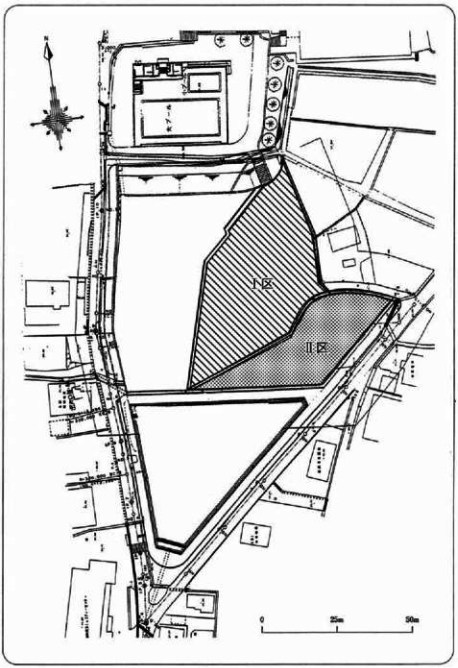
現地説明会

佐古小学校　体験学習

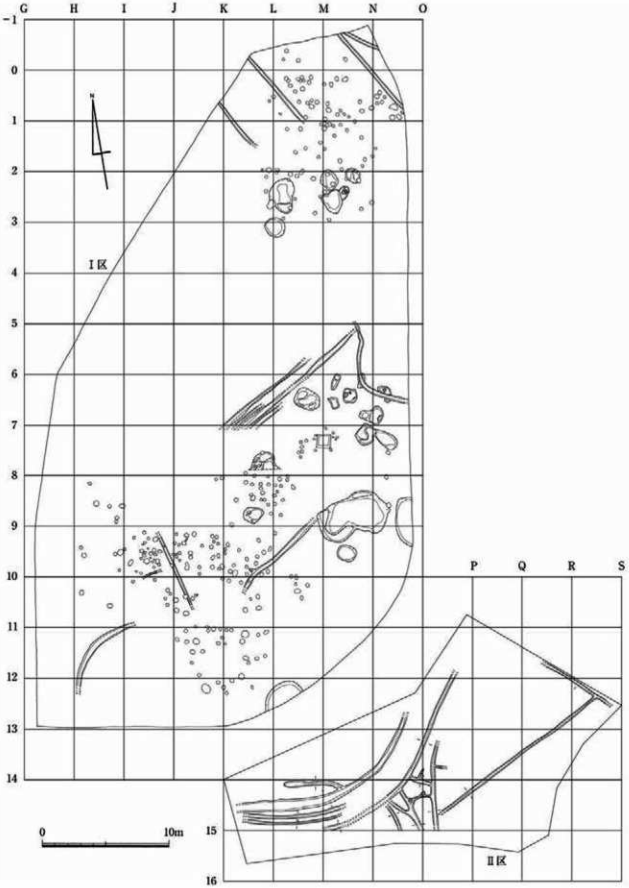
第４節　調査の方法

調査対象約3,000㎡についてⅠ区・Ⅱ区の2つの調査区を設定し、造成されている赤土を除去してから調査を開始した。調査の手順としては、耕作土、旧耕作土を重機を用いて除去した後、包含層掘削、遺構検出、遺構埋土掘削を手作業で進める。試掘調査時には、それぞれのトレンチで包含層を確認した後、遺構検出作業までを行う。遺構の調査はすべて本発掘調査で行ったものである。

遺構の実測については、任意に設定した座標軸に基づいて4m方眼をかけ、グリッドNoを付して地点の記録及び実測を行った。平面実測及び土層断面図については、縮尺20分の1を基本に、状況に応じて10分の1等他の縮尺を用いた。



第4図　調査区位置図



第5図　Ⅰ・Ⅱ区全体図と設定した4mグリッド（S=1/300）

第6図　母代寺土居屋敷遺跡周辺の地形と小字名（S=1/5,000）

第Ⅱ章　遺跡周辺の地理的歴史的環境

第１節　地理的環境

母代寺土居屋敷遺跡のある香南市野市町は、県中央部に広がる高知平野の東端に位置し、県下三大河川のひとつ物部川の下流域に発達した扇状地上にある。平成18年3月に旧香美郡の香南五ヶ町村（赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村）が合併、面積126.49㎢、人口約3万4,000人の香南市が誕生した。

旧野市町は物部川の左岸に沿って南北約6㎞、東西約4㎞の範囲に広がっている。西は物部川を境として南国市、東は香南市香我美町と隣接し、北は烏ヶ森山系により香美市土佐山田町と分けられる。南は香南市赤岡町、吉川町と境を接し南端部より約0.8㎞南で土佐湾にのぞむ。南部には、県都高知市と県東部を結ぶ国道55号線が東西に走っており、高知市より車で約30分と交通の便もよく、県都のベッドタウンとして人口も年々増加しており近年発展し続けている。

主要産業としては、江戸時代、野中兼山により灌漑施設が整備され、かつては豊富な水を生かした米作の穀倉地帯であったが、現在は近郊型の園芸農業が盛んとなっている。

自然地理学的には、北東部に開楽山系の山岳地と物部川左岸側に分布する古期扇状地を呈する野市台地よりなっている。この開楽山系は、秋葉山系と烏ヶ森山系の2つからなり野市町の約3分の1強の面積をしめる。

母代寺土居屋敷遺跡周辺の地形（航空写真）

秋葉山系は町の北東、香我美町の境にある開楽山（標高368.2m）より南西方向に高度を減じ、町のほぼ中心の三宝山（別名金剛山、標高213.9m）の南西方向で野市台地の下に沈む。その秋葉山系の北方に平行して烏ヶ森山系があり、同じく南西に向かって高度を減じて、物部川にその山脚を浸食されている。

その山地の下に広がる野市台地は古期扇状地であり、現在の市街地をのせ、海抜高度約40～10mと北から南へ高さを減じている。これらの台地は、秋葉山系の西端部の三宝山の山麓部でさえぎられた物部川の堆積物が南東側へ向かって放出されたためできた扇状地性堆積物によって形成されたものである。また、台地の西端部分は5mほどの段丘崖となり、その下は新期扇状地となっている。

物部川が現在の流路を形成したのは、中近世以降のことであり、それ以前はいくつもの流路からなっていたが、中世になるとそれまで多数存在していた小流路の幾つかが堆積作用により埋積、自然堤防が形成された。近世になって両岸に堤防が築堤され、現在の流路になったと考えられる。

表1　母代寺土居屋敷遺跡と高知平野東半の遺跡

番号	遺跡名	主な時代	番号	遺跡名	主な時代	番号	遺跡名	主な時代
1	母代寺土居屋敷遺跡	弥生・古代・中世	22	東野土居遺跡	古墳～近世	43	町田環東遺跡	縄文～中世
2	父養寺古墳	古墳	23	香宗城跡	中世	44	山田環	近世～
3	日吉山古墳群	古墳	24	宝鏡寺跡	中世	45	新改西谷遺跡	旧石器・古代・中世
4	亀山窯跡	古代	25	曽我遺跡	弥生～中世	46	ひびのき遺跡	弥生・古墳
5	深渕北遺跡	弥生・古代・中世	26	下分遠崎遺跡	弥生	47	ひびのきサウジ遺跡	弥生～近世
6	深渕遺跡	縄文～中世	27	岡ノ芝遺跡	古墳～中世	48	伏原大塚古墳	古墳～中世
7	西野遺跡群	弥生～古代	28	十万遺跡	縄文～中世	49	白猪田遺跡	古墳・古代
8	下ノ坪遺跡	弥生～古代	29	花宴遺跡	弥生～古墳	50	土佐国府跡	弥生～中世
9	北地遺跡	弥生～古代	30	徳王子大崎遺跡	弥生・古墳・中世	51	三畠遺跡	弥生～古代
10	上岡北遺跡	弥生・近世	31	徳王子広本遺跡	弥生～中世	52	東崎遺跡	弥生～中世
11	上岡遺跡	弥生・古代	32	徳王子前島遺跡	弥生～中世	53	大領遺跡	古墳～中世
12	高田遺跡	平安	33	クノ丸遺跡	弥生～近世	54	岩村遺跡群	弥生～中世
13	小山谷古墳	古墳	34	江見遺跡	古墳	55	寺ノ前遺跡	弥生～中世
14	鬼ヶ岩屋洞穴遺跡	弥生	35	大東遺跡	古墳～近現代	56	修理田遺跡	弥生～古代
15	アゴデン白岩窯跡	古代・中世	36	須留田城跡	中世	57	大篠小学校校庭遺跡	弥生
16	竹ノ内山古墳	古墳	37	住吉砂丘遺跡	弥生	58	里改田遺跡	弥生～中世
17	大谷城跡	中世	38	南中曽遺跡	弥生・古墳	59	田村城跡	中世
18	大谷古墳	古墳	39	野口遺跡	弥生～中世	60	田村遺跡群	縄文～近現代
19	大崎山古墳	古墳	40	林田シタノヂ遺跡	縄文～中世	61	前ノ山城跡	中世
20	本村遺跡	弥生	41	林田遺跡	弥生～中世	62	烏ヶ森城跡	中世
21	兎田柳ヶ本遺跡	弥生・古墳	42	加茂遺跡	古墳～中世	63	土島田遺跡	縄文～近世

第7図　母代寺土居屋敷と高知平野東半の遺跡（S=1/50,000）

第２節　歴史的環境

母代寺土居屋敷遺跡のある香南市野市町は、北部に山塊を背負い南部に平野部が開けている。西は一級河川物部川に隔てられ東は香宗川がほぼ町境と重なっている。

物部川は野市町をはじめ、高知平野東部の平野を潤しているが、近世以前においては現在よりも西部を流れており下流に大小の自然堤防を形成し、多くの縄文時代後期以降の遺跡が立地している。その中でも、母代寺土居屋敷遺跡から約5km南西の地点に位置する田村遺跡[1]は弥生時代における南四国最大の拠点集落として知られている。

物部川中流右岸の香美市土佐山田町にはひびのき遺跡[2]（弥生時代～古墳前期）、その対岸には林田遺跡[3]（弥生～中世）がある。東部を流れる香宗川流域にも、弥生時代前期の土器が発見されるとともに多量の木器が出土した香我美町の下分遠崎遺跡[4]や十万遺跡[5]など高知平野東半の主な河川流域に遺跡が分布している。

香南市内には163の包蔵地が確認されている（平成21年9月現在）。縄文時代の遺跡は少なく、夜須町の手結遺跡（草創期）、香我美町の拝原遺跡[6]（後期）、十万遺跡（晩期）、深渕遺跡[7]（晩期末）の例があるのみだが、弥生時代になると遺跡数が飛躍的に増大し市内全域に分布する。特に物部川左岸の段丘上の遺跡密度は高い。母代寺土居屋敷遺跡に最も近いものとしては南西に深渕北遺跡[8]があり、その南には深渕遺跡、西野遺跡群[9]、北地遺跡[10]、下ノ坪遺跡[11]、上岡遺跡[12]と物部川の段丘崖に沿って連続して分布している。また香宗川流域には下分遠崎遺跡の西側に官衙関連の遺跡である曽我遺跡[13]が、その北側開楽山地の麓にはガラス製の勾玉も出土した弥生中期の高地性集落の性格をもつ本村遺跡[14]がある。開楽山地には中期末の笹ヶ峰遺跡や、土器、貝殻、獣骨、魚骨などが出土した後期末の鬼ヶ岩屋洞窟遺跡もある。

古墳時代の遺跡も物部川、香宗川両流域に広がり集落が営まれていたことがうかがえる。古墳も開楽山地に数多くみられ、特に竹ノ内山（溝渕山）古墳は、当時の原形に最も近い状態で残存している横穴式石室の円墳で青銅環、直刀等が出土している。その他にも2次にわたる埋葬面が確認され金環、馬具等多量の貴重な副葬品が出土した大谷古墳[15]をはじめ、小山谷古墳、大崎山古墳がある。また、母代寺土居屋敷遺跡のある佐古地区にも日吉山古墳群や父養寺古墳等、そして今は消滅しているが上分古墳の存在により、地方豪族のいたことが推察される。

古代の遺跡としては、母代寺土居屋敷遺跡から南へ約3kmに下ノ坪遺跡がある。下ノ坪遺跡は弥生時代後期前半と奈良時代に盛行する遺跡で、古代の出土遺物は硯や丸鞆、全国的にも例の少ない四仙騎獣八稜鏡等が出土しており、古代の遺構では、掘立柱建物跡も発掘調査当時は南四国最大級の規模を呈しており、地方官衙的な性格を持つ遺跡であったと思われる。また、母代寺土居屋敷遺跡の南西約1.5kmに深渕遺跡がある。深渕遺跡も先にも述べたように縄文時代からの複合遺跡であるが、古代の出土物は二彩陶器、緑釉陶器、墨書土器、硯、蛇尾等が出土している。また深渕遺跡は瓦窯跡の指摘もあり、円面硯や風字硯も発見され、官衙的性格を持つ遺跡であったと考えられる。また、母代寺土居屋敷遺跡北側の亀山にも窯跡があり、そこで作られた瓦は平安京大極殿、藤原氏の氏寺である法勝寺に使用されていたことがわかっており[16]、もっぱら中央向けの官窯であったと思われる。このことは、当時の野市町が中央と深いつながりを持つ重要な地であったことを示している。

中世になると、中原秋家、秋道が地頭となり、香宗我部氏と名乗り勢力をふるった。しかし、関ヶ原合戦後山内氏入国によりその所領を失い、その後の一国一城制でその居城である香宗城は取り壊された。現在は八幡社と土塁の一部を残すのみである。その南東には香宗我部氏菩提寺の宝鏡寺跡と歴代の墓と観音堂がたっている。また、戦国時代の城では母代寺土居屋敷遺跡の北側に前ノ山城、また土佐山田町との境に烏ヶ森城がある。

近世前期、野市町域は物部川山田堰からの分水により開墾が進み、原野の広がる野市台地は豊かな穀倉地帯へと生まれ変わった。上岡北遺跡からは、物部川治水を手がけた野中兼山による築堤と推測される石積みの堤防（17世紀）が確認されている[10]。野市町は、この旧堤防の持つ歴史的意義を認識し、工事計画を変更した。発掘された近世の堤防は埋め戻され、現地で保存されている。

参考文献

『野市町史　上巻』野市町史編纂委員会　1992年

引用文献

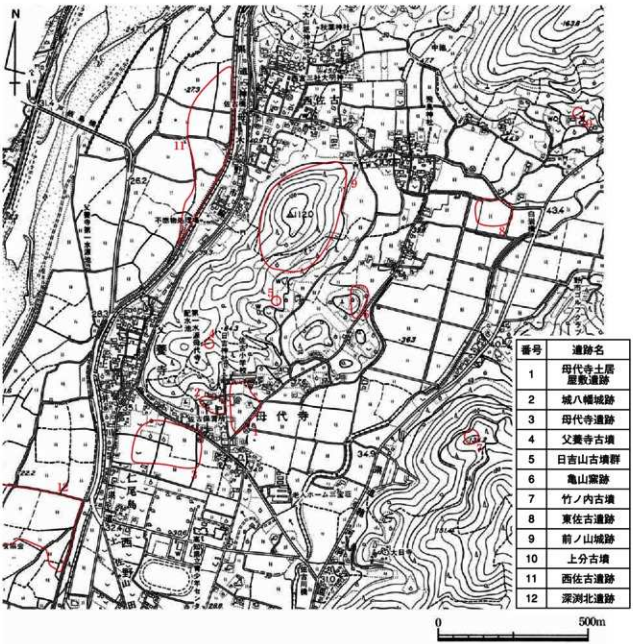
⑴ 出原恵三『南国土佐から問う弥生時代像　田村遺跡』　新泉社　2009年
⑵ 岡本健児・廣田典夫『高知県ひびのき遺跡』　土佐山田町教育委員会　1977年
⑶ 宅間一之・山本哲也・森田尚宏『林田遺跡』　土佐山田町教育委員会　1983年
⑷ 高橋啓明・出原恵三『下分遠崎遺跡発掘調査概報』　香我美町教育委員会　1987年
　高橋啓明・出原恵三『下分遠崎遺跡Ⅰ』　香我美町教育委員会　1989年
⑸ 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』　香我美町教育委員会　1988年
⑹ 出原恵三『拝原遺跡』　香我美町教育委員会　1993年
⑺ 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『深渕遺跡発掘調査報告書』　野市町教育委員会　1989年
⑻ 佐竹寛・吉成承三『深渕北遺跡』　野市町教育委員会　1996年
⑼ 『西野遺跡群ルノ丸地区南　第二次発掘調査概要報告書』　香南市教育委員会　2007年
⑽ 『野市町　北地遺跡　記者発表・現地説明会資料』　野市町教育委員会　2004年
⑾ 出原恵三・池澤俊幸・小松大洋・行藤たけし『下ノ坪遺跡Ⅰ』　野市町教育委員会　1997年
　出原恵三・池澤俊幸・小松大洋『下ノ坪遺跡Ⅱ』　野市町教育委員会　1998年
　更谷大介『下ノ坪遺跡Ⅲ』　野市町教育委員会　2000年
⑿ 更谷大介『上岡遺跡』　野市町教育委員会　2005年
⒀ 高橋啓明・吉原達生『曽我遺跡発掘調査報告書』　野市町教育委員会　1989年
⒁ 坂本憲昭『本村遺跡発掘調査報告書』　野市町教育委員会　1993年
⒂ 山本哲也『大谷古墳』㈶高知県文化財団　1991年
⒃ 大石良材・朧谷寿・谷口俊治・鈴木忠司『平安宮推定大殿跡調査報告書』　1983年
⒄ 更谷大介・溝渕真紀『上岡北遺跡』香南市教育委員会　2008年

第３節　母代寺土居屋敷遺跡と周辺の遺跡

母代寺土居屋敷遺跡は、日吉山南側の裾野部、佐古小学校南側にある。かつて佐古公民館・佐古保育所があった場所一帯、字名「土居屋敷」付近に位置する。

日吉山中央、東部山麓には2基、北側にも古墳群が確認されている。その東には通称亀山があり、古代の亀山窯跡がある。北側の前ノ山城跡には大規模な土塁が残っている。

母代寺という地名は、播磨、讃岐、肥後の国司を歴任した紀夏井が土佐に配流されてきた時、母の追善供養のために建立したと伝えられる母代寺からきている。だが、伝承以外、寺の存在は不明のままである。



番号	遺跡名
1	母代寺土居屋敷遺跡
2	城八幡城跡
3	母代寺遺跡
4	父養寺古墳
5	日吉山古墳群
6	亀山窯跡
7	竹ノ内古墳
8	東佐古遺跡
9	前ノ山城跡
10	上分古墳
11	西佐古遺跡
12	深渕北遺跡

第8図　母代寺土居屋敷遺跡と周辺の遺跡（S=1/10,000）

第Ⅲ章　調査の成果

調査の成果について、調査区ごとにまとめて報告する。Ⅰ区・Ⅱ区は隣接しているが、Ⅱ区が一段低くなっており、形成された遺構の時期も、Ⅰ区が古代末から中世前期にかけての遺構であるのに対し、Ⅱ区は近世以降と異なっている。

Ⅰ区は上段の遺構群（検出面の標高34m前後）が調査区北東端にまとまっており、下段の遺構群（検出面の標高33m前後）が調査区南半で確認されている。Ⅱ区遺構検出面標高は32.5m前後と南側が低くなっている。

第１節　Ⅰ区

Ⅰ区からは弥生時代から近代にかけての遺物が確認されている。遺構出土遺物は大半が古代末から中世前期にかけてのものであり、遺構面が形成されたのは古代末から中世前期にかけてだと考えられる。

上段においては、この遺構面よりも上面から溝が確認されている。SD1～4が上面遺構であり、異なる検出面だが遺構全体図（第10図）には他遺構と一緒に記載し報告する。

また、下段では古代末遺構面より下面から遺構が検出されている。古代の粘土採取に伴う遺構だと推定される土取り跡及び自然流路であり、これらについては下層の遺構としてまとめて報告する。Ⅰ区全体での下層遺構の位置は、土取り跡については全体図で一緒に示すが、下層の流路（SR1～3）については、別図（第50図）に記載する。

SE1　出土遺物（土師器・供膳具）

1．基本層序

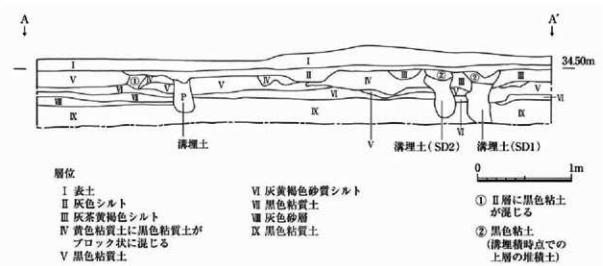
調査区の北端部・上段北壁（A-A'間）と中央部東側・下段東壁（B-B'間）で基本層序を観察した。第9-1図に上段北壁セクションを、第9-2図に下段東壁セクションを示す。セクションポイントの位置は第10図に示したとおりである。

上段　北壁　セクション

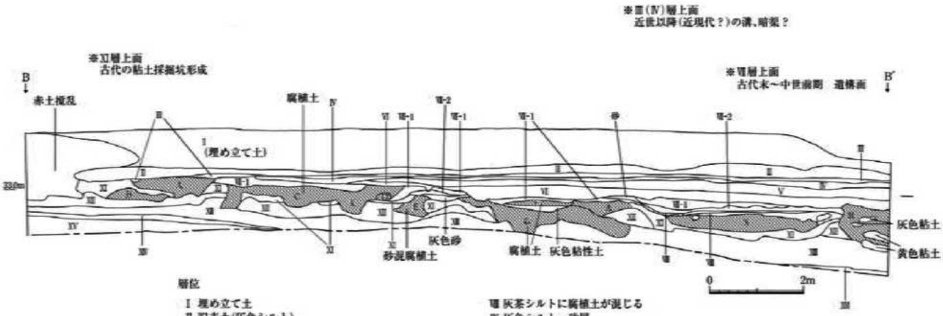
Ⅰ層　埋め立て土（表土）
Ⅱ層　灰色シルト（旧表土）
Ⅲ層　灰茶黄褐色シルト（東壁Ⅳ層に対応）
Ⅳ層　灰茶褐色シルト（東壁Ⅴ層に対応）
Ⅴ層　黒色粘質土（東壁Ⅵ層に対応）
Ⅵ層　灰黄褐色砂質シルト
Ⅶ層　灰黒色粘質土
Ⅷ層　灰色砂層
Ⅸ層　黒色粘質土（東壁Ⅻ層に対応）

下段　東壁　セクション

Ⅰ層　埋め立て土（表土）
Ⅱ層　灰色シルト（旧表土）
Ⅲ層　黄茶褐色シルト
Ⅳ層　灰黄色シルト（土器含む）
Ⅴ層　灰茶褐色シルト（土器含む）
Ⅵ層　濃茶褐色シルト（土器含む）
Ⅶ-1層　灰色シルトに茶褐色シルト混
Ⅶ-2層　灰色粘性土
Ⅷ層　灰茶色シルトに腐植土が混じる
Ⅸ層　灰色シルト～砂層
Ⅹ層　濃灰茶色シルトに黒色シルトが混じる
Ⅺ層　黄灰褐色粘質～砂質土
Ⅻ層　灰黒色粘質土
XIII層　黒色粘質土　　XV層　黒色粘質土
XIV層　黄褐色砂質土　　XVI層　灰褐色砂層



第9-1図　Ⅰ区上段北壁　セクション図（S=1/40）



層位

Ⅰ 埋め立て土
Ⅱ 旧表土(灰色シルト)
Ⅲ 黄茶褐色シルト
Ⅳ 灰黄色シルト(土器含む)
Ⅴ 灰茶褐色シルト(　〃　)
Ⅵ 濃茶褐色シルト(　〃　)
Ⅶ-1 灰色シルトに茶褐色シルトが混じる
Ⅶ-2 灰色粘性土

A～Hには
腐植土が混じる

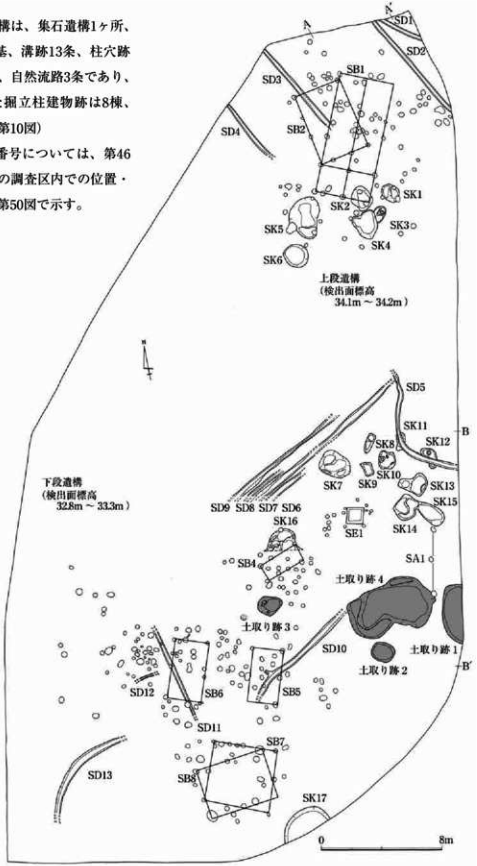
Ⅷ 灰茶シルトに腐植土が混じる
Ⅸ 灰色シルト～砂層
Ⅹ 濃灰茶シルトに黒色シルトが混じる
ⅩⅠ 黄灰褐色粘質～砂質土
ⅩⅡ 灰黒色粘質土
ⅩⅢ 黒色粘質土
ⅩⅣ 黄褐色砂質土
ⅩⅤ 黒色粘質土
ⅩⅥ 灰褐色砂層

第9-2図　Ⅰ区下段東壁セクション図（S=1/80）

2．遺構と遺物

Ⅰ区で検出した遺構は、集石遺構1ヶ所、井戸跡1基、土坑17基、溝跡13条、柱穴跡293基、土取り跡4基、自然流路3条であり、現時点で復元し得た掘立柱建物跡は8棟、構列跡1列である。（第10図）

柱穴跡（P）の遺構番号については、第46～48図で、自然流路の調査区内での位置・遺構番号については第50図で示す。



A–A'，B–B'は
セクションポイント
（第9–1図、9–2図参照）

※上面遺構
SD1～4
（近世以降）

※下面遺構
土取り跡1～4
（古代）

それ以外の遺構は、大半が、古代末～中世前期に属する。なお、下面遺構の中で、自然流路（SR1～3）は別図（第50図）に位置を示す。

第10図　Ⅰ区全体図・遺構配置図（S=1/250）

検出した遺構は大半が古代末から中世前期に属し、検出面標高も上段が34.1～34.2m前後、下段が32.8～33.3mとそれぞれの段でほぼ同じ高さとなっている。この検出面以外に上層と下層からも遺構が検出されている。

上層で検出した遺構は、調査区北側の上段で検出されたSD1～4である。北壁のⅢ層（下段東壁ではⅣ層）上面が遺構面となっており、旧表土直下に形成された遺構である。細かい時期は特定できないものの、近現代に機能していたと考えられる。検出面標高は34.4～34.5mである。

下層からは自然流路と4基の土坑が確認されている。下段東側に確認された4基の土坑は、Ⅺ層（黄灰褐色粘土層）を掘り込んで粘土を採取した「土取り跡」と推定されている。（第9-2図参照）検出面標高は32.5～32.8mである。

図中に記したA-A'及びB-B'は調査区上段北側（東西方向）と下段東側（南北方向）で土層堆積状況を確認した際のセクションポイントである。

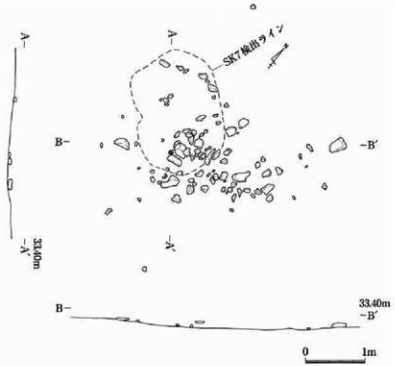
出土遺物は、遺構ごとに提示し、包含層出土遺物は最後にまとめて提示する。

(1) 集石遺構（SS）

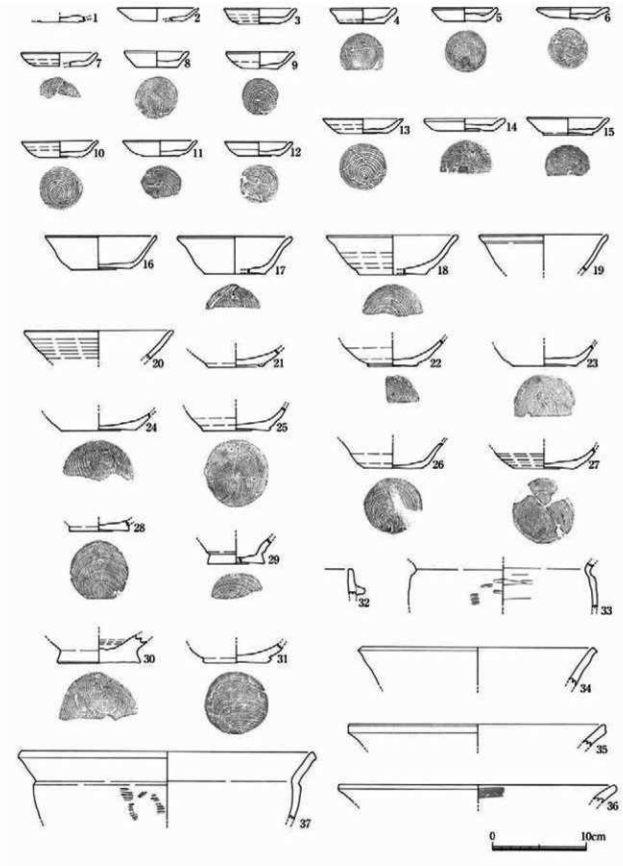
調査区（Ⅰ区下段）の中央東寄り（L6／M6グリッド）に位置する。検出高は33.27mを測る。多数の遺物と15～20㎝大の礫を多く検出している。遺構の範囲は約20㎝下面から検出されるSK7とほぼ重複している。

遺物は口縁・底部（回転糸切り）を含む土師器片、須恵器片、瓦質土器片、瓦片（布目痕）、白磁・青磁片等コンテナ1箱分ほどを出土している。

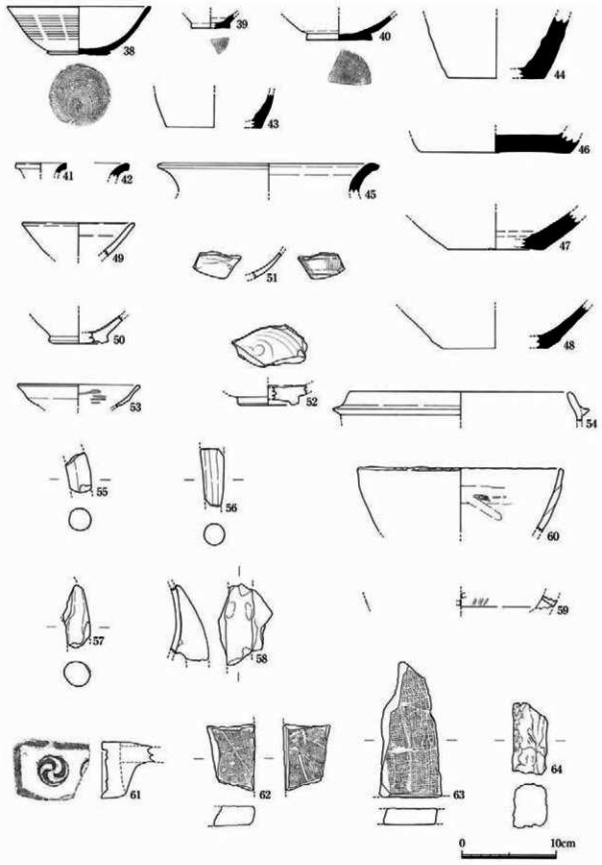
図示したものは土師器の小皿（1～15）、坏（16～20・22～27・29・30）、椀（21・28・31）、羽釜（32）、甕（33～37）、須恵器の椀（38～40）、壺（41～44）、甕（45～47）、鉢（48）、瓦器の椀（53）、瓦質土器の羽釜（54）、同脚部（55～58）、白磁の碗（49・50）、青磁の碗（51・52）、瓦（61～63）、石鍋（59）、窯壁片（64）である。他に流れ込みの可能性が考えられる弥生後期の鉢（60）が出土している。



第11図　集石遺構（SS1）　遺物出土状況・平面エレベーション図（S=1/50）



第12図　集石遺構（SS1）　出土遺物実測図1（S=1/4）



第13図　集石遺構（SS1）　出土遺物実測図2（S=1/4）

(2) 井戸（SE）

SE1（第14図～24図）

調査区（Ⅰ区下段）の中央東寄り（L7／M7グリッド）に位置する。検出高は32.79mを測る。平面形態は方形状を呈し、長径1.12m、短径1.07m、深さ45cmを測る。断面形態は箱形状を呈し、四隅の隅柱とそれに伴う木枠を検出しており、井桁を構成している。また後述するSB3とした建物及び周辺のピット群は当遺構に伴う施設のものである可能性が考えられる。

井戸枠の型式は組み立て式方形縦板組型のB類（薄板横桟留型）に分類されるもので、さらに隅柱の存在からB1類とすることができる。厚さ8mm前後の薄い縦板を隅柱のホゾ穴に差し込んだ各面1本ずつの横桟により支える構造である。この型式は奈良においては、8世紀中頃に登場し、平安遷都まで盛行、その後少なくなる傾向があるという。註1)

床面からは一面に礫を検出している。礫は砂岩・砂礫岩・チャートなど周辺で入手可能なもので、最大でも20cm大で3kgほどであり、10～15cm大で1kg前後の重量のものが最も多い。河川にある円礫はなく、大半が角礫である。埋土はⅡ層で、Ⅰ層目は灰色粘土で砂質土を含んでおり、Ⅱ層目は黒色粘土で、Ⅰ層目に対し部分的にブロック状の堆積が認められる。

遺物は口縁・底部（回転糸切り）を含む土師器片104点と、焼成不良を含む須恵器片20点、瓦器片1点を出土している。土師器片の多くは摩耗しており、輪高台1点を含んでいる。他に瓦片（布目有り・表面炭素吸着）8点を出土している。図示したものは土師器の小皿（66・67・83～92）、坏（65・68・70～73・96）、椀（74～80・93～95・97・98）、須恵器の甕（101～105）、鉢（81）、瓦器の椀（69・99）、土錘（100）、布目瓦（82・106～119）、井戸隅柱（120～123）、横桟（124～127）、杭（128）である。

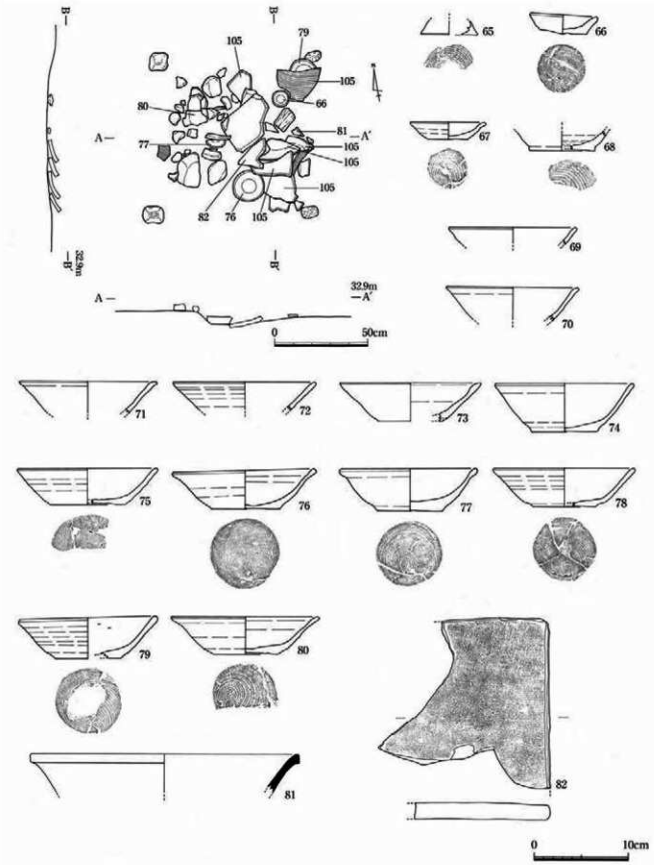
遺構の掘形からは口縁・底部（回転糸切り）を含む土師器片6点と、須恵器片1点を出土しており、土師器片は摩耗している。図示したものは土師器の坏（129）、瓦器の椀（130）である。遺物から12世紀末に廃絶した遺構と考えられる。

土師器や布目瓦など遺物は意図的に並べられており、110・112・113・116・117などのように2次的に被熱赤変した瓦も認められる。平瓦・丸瓦が大半だが、1点だけ剣頭文が確認される軒平瓦（109）も出土している。105の大きく変形した須恵器・甕は従来知られる亀山窯跡採集資料との胎土比較により、亀山窯跡で生産されたものだと考えられる。また、79の土師器椀には底部に穿孔が認められる。これらの遺物出土状況からSE1は井戸の廃絶儀礼等が行われた可能性が考えられる遺構である。

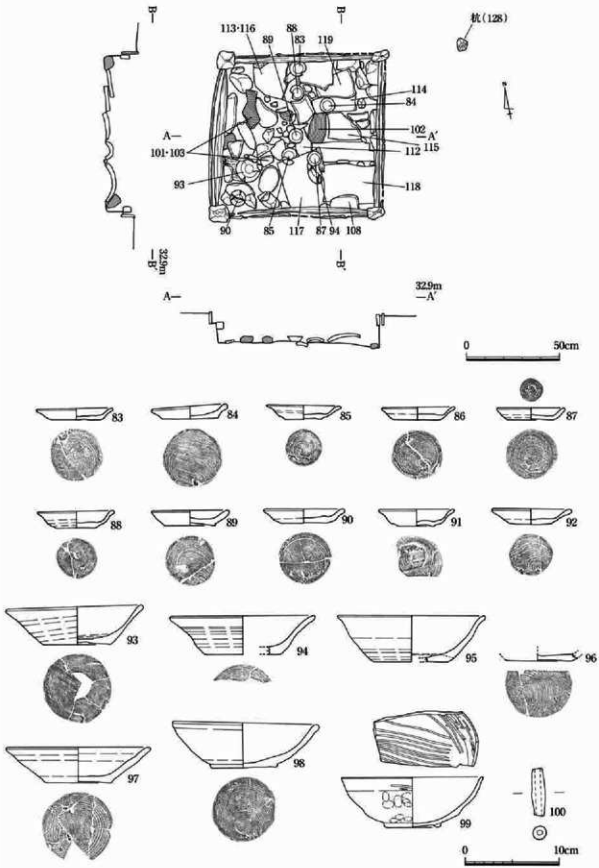
註1）鐘方正樹　2003『井戸の考古学』同成社

組み立て式方形縦板組型の井戸自体は中世まで広く認められるが、都市部においては近世以降姿を消す。これに対し近畿地方の農村部では近世以降も田畑の野井戸に使われており、都市部と農村部の井戸形態に顕著な違いが生じるとのことである。

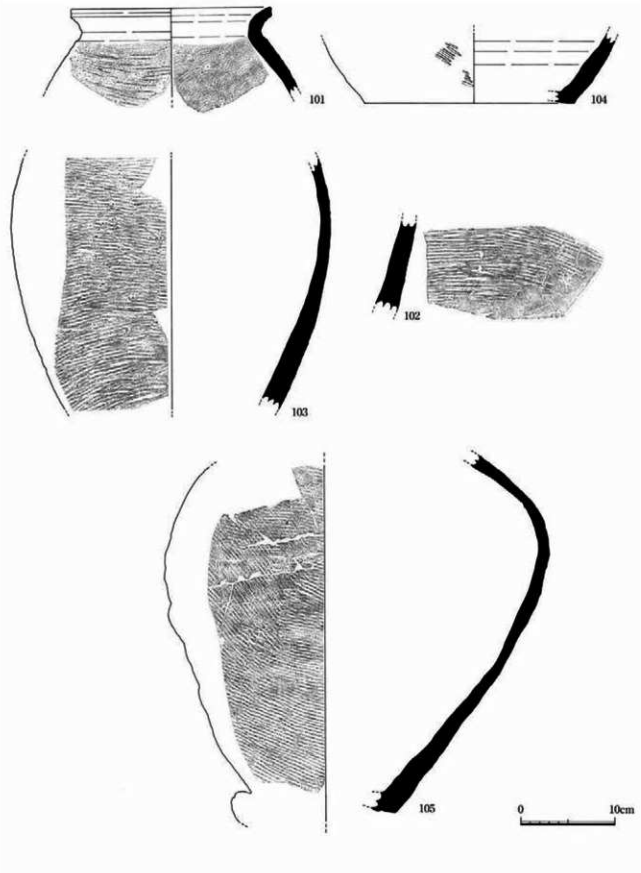
井戸の「ほりかた」については「掘形」という漢字に統一して報告する。（『井戸の考古学』参照）



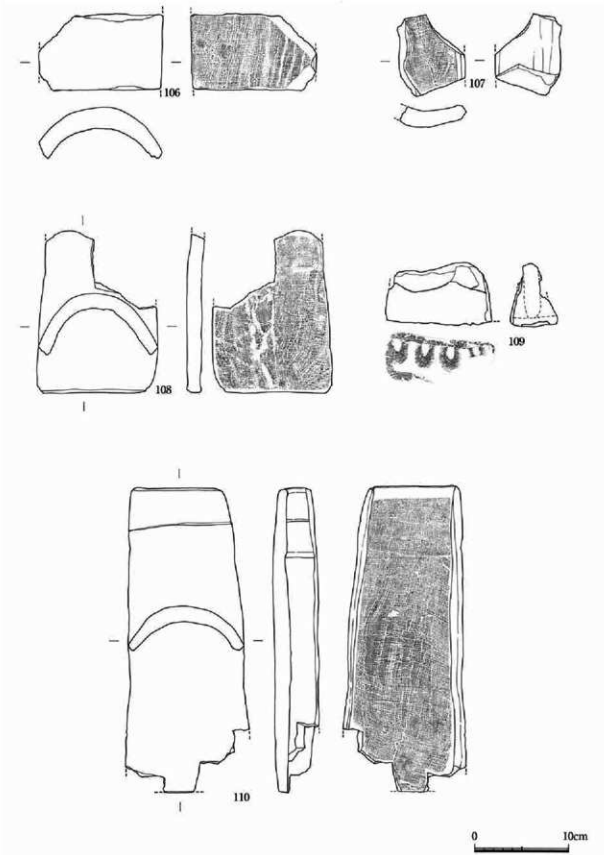
第14図　SE1　検出面及び1面目遺物出土状況（S=1/20）・出土遺物実測図（S=1/4）



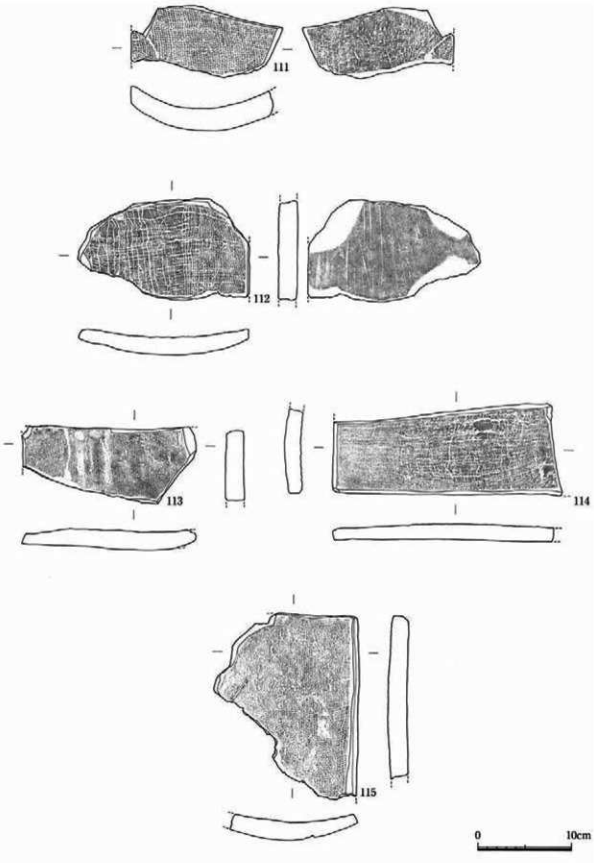
第15図　SE1　2面目遺物出土状況（S=1/20）・出土遺物実測図1（S=1/4）・土師器、瓦器



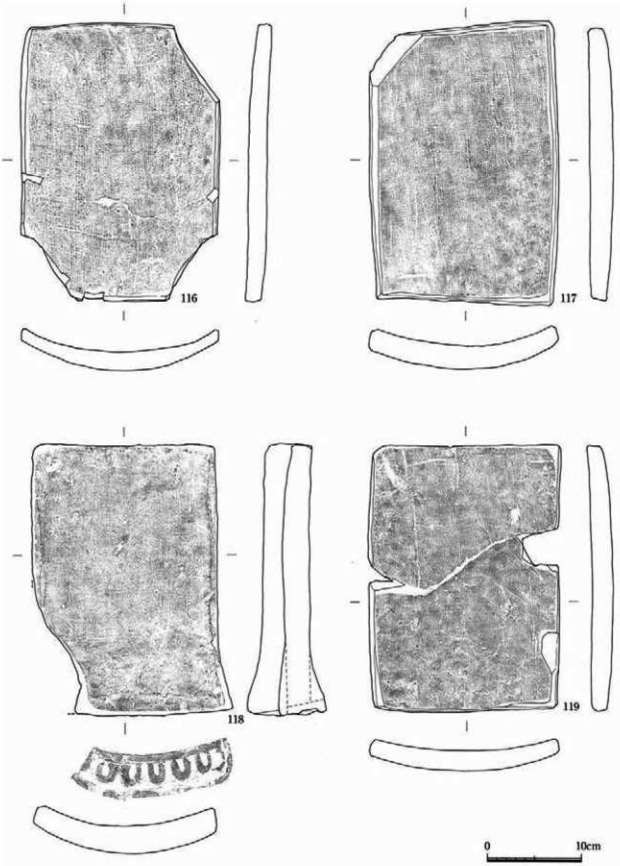
第16図　SE1　2面目出土遺物実測図2（S=1/4）・須恵器



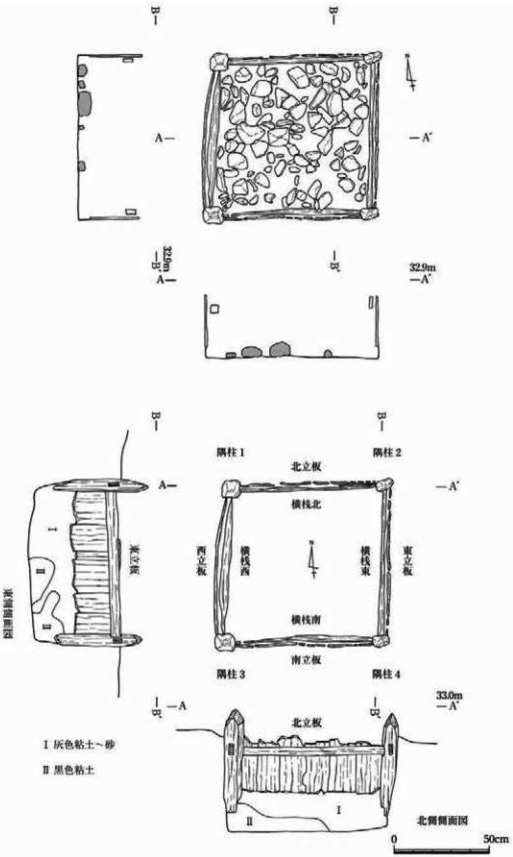
第17図　SE1　2面目出土遺物実測図3（S=1/4）・瓦類1



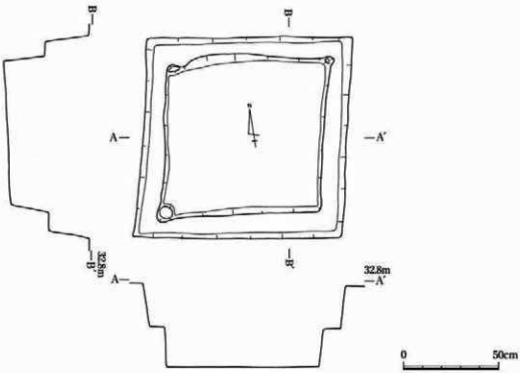
第18図　SE1　2面目出土遺物実測図4（S=1/4）・瓦類2



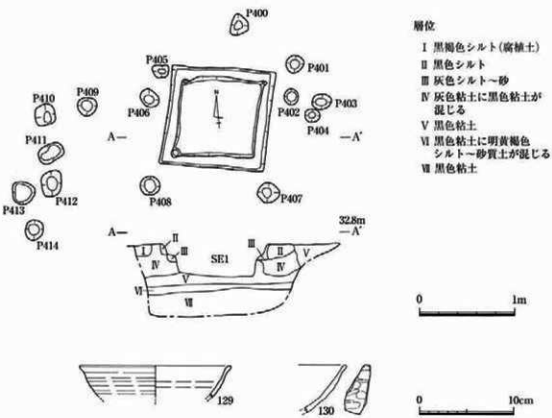
第19図　SE1　2面目出土遺物実測図5（S=1/4）・瓦類3



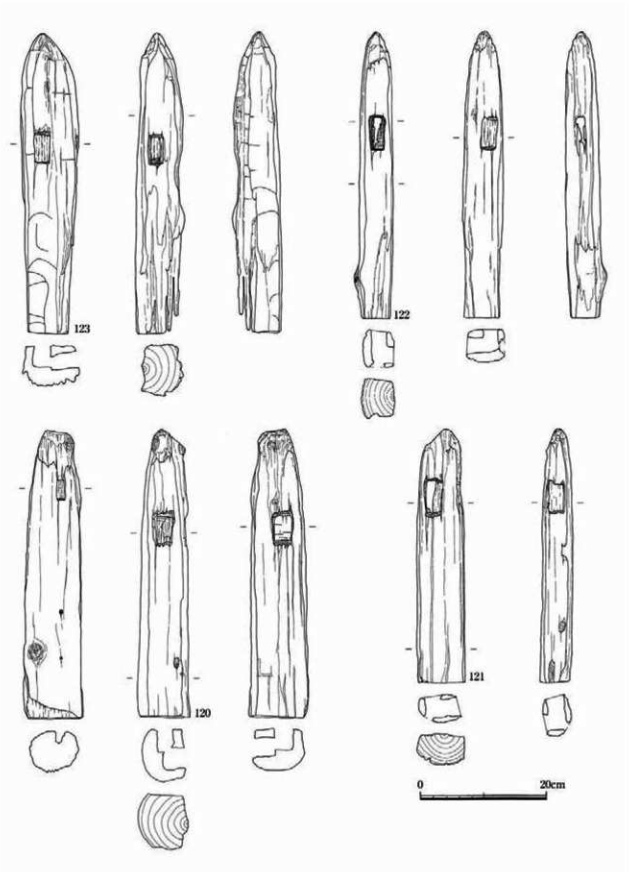
第20図　SE1　礫出土状況・平面・エレベーション図及び井戸枠平面・側面図（S=1/20）



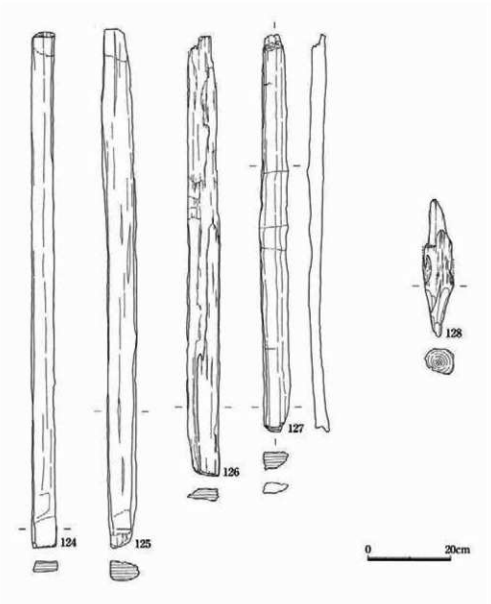
第21図　SE1　完掘　平面・エレベーション図（S=1/20）



第22図　SE1　下層確認セクション図及び周辺遺構平面図（S=1/40）　掘形出土遺物実測図（S=1/4）



第23図　SE1　出土遺物（井戸枠一隅柱）実測図（S=1/6）



第24図　SE1　出土遺物（井戸枠ー横桟及び杭）実測図（S=1/6）

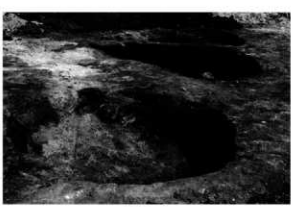
(3) 土坑（SK）

SK1（第25図）

調査区（Ⅰ区上段）の南側（M1・2グリッド）に位置する。検出高は34.16mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径1.28m、短径1.03m、深さ12～36cmを測る。断面形態は船底状を呈し、西側に段部を有する。埋土は基本的に3層で、Ⅰ層目は黒褐色シルトに黄色粘土がブロック状に混じり、Ⅱ層目は灰色砂質（シルト）、Ⅲ層目は灰色粘土であり、Ⅰ層とⅡ・Ⅲ層間に堆積の差が看取できる。

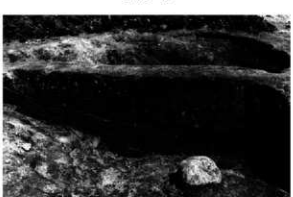
遺物は出土していない。

東からみた上段土坑（右からSK1・2・3・4、後方はSK5・6）



SK5・6

SK6



SK5セクション

SK17

Ⅰ区の土坑

SK2（第25図）

調査区（Ⅰ区上段）の南側（M1・2グリッド）に位置する。検出高は34.15mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.57m、短径1.24m、深さ29cmを測る。断面形態は船底状を呈し、壁面は斜めに立ち上がる。埋土の状態は基本的にSK1と同様である。

遺物は摩耗した土師器片1点と土師器の椀（131）を出土している。

SK3（第25図）

調査区（Ⅰ区上段）の南側（M2グリッド）に位置する。検出高は34.10mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.20m、短径0.76m、深さ14～24cmを測る。SK4に切られるが、床面の形状からSK4以外の切り合い関係の可能性も考えられる。床面から長径32cm、短径17cm、深さ12cmを測る楕円形状の落ち込みを検出しているが、遺構との関連性は不明である。

遺物は口縁・底部（回転糸切り）を含む土師器片18点を出土しており、多くは摩耗している。図示したのは土師器の坏（132・133）である。

SK4（第25図）

調査区（Ⅰ区上段）の南側（M2グリッド）に位置する。検出高は34.13mを測る。平面形態は不整楕円形状を呈し、長径1.94m、短径1.62m、深さ24～36cmを測る。SK3を切るが、床面及び平面形態からSK3以外の切り合い関係の可能性も考えられる。埋土の状態は基本的にSK1と同様である。

遺物は口縁部を含む土師器片2点を出土している。

SK5（第25図）

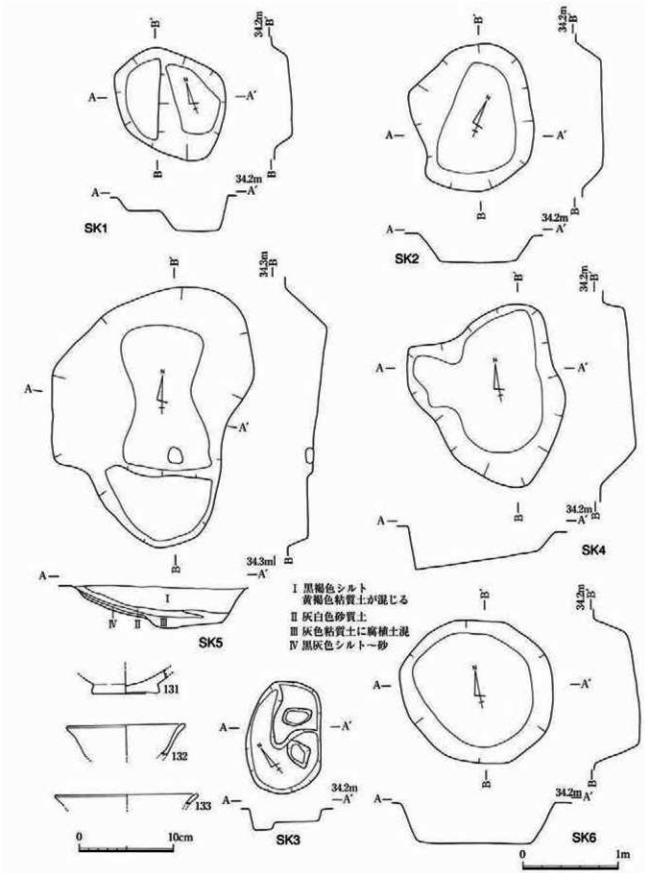
調査区（Ⅰ区上段）の南側（L2グリッド）に位置する。検出高は34.16mを測る。平面形態は不整楕円形状を呈し、長径2.78m、短径1.85m、深さ21～44cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、西側は緩やかに立ち上がる。南側に段部を有し、形状から切り合いの可能性も考えられる。埋土は4層であり、Ⅰ層とⅡ～Ⅳ層間に堆積の差が看取できる。

遺物は出土していない。

SK6（第25図）

調査区（Ⅰ区上段）の南側（K2・3／L2・3グリッド）に位置する。検出高は34.17mを測る。平面形態は円形状を呈し、長径1.60m、短径1.52m、深さ24～46cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、床面は南側に向かって傾斜している。埋土の状態は基本的にSK1と同様と考えられる。

遺物は口縁・底部（回転糸切り）を含む土師器片21点と、焼成不良を含む須恵器片4点、瓦質土器片1点を出土しており、土師器片の多くは摩耗している。



第25図　SK1～6平面・エレベーション図（S=1/40）　SK2・3出土遺物実測図（S=1/4）

131（SK2）　132、133（SK3）

SK7（第26～28図）

調査区（Ⅰ区下段）の中央東寄り（L6グリッド）に位置する。検出高は33.08mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径2.07m、短径1.54m、深さ30～57cmを測る。西側に段部を有し、遺物の出土状態や形状から切り合いの可能性も考えられる。また段部床面から径約20cm、深さ17cmを測るピットを検出しているが、遺構との関連性は不明である。

遺物は口縁・底部（回転糸切り）を含む土師器片約300点と、焼成不良を含む須恵器片約40点、瓦片（布目痕）約20点、白磁片（Ⅳ類）1点を出土している。他に混入と見られる弥生土器片3点と、近世陶磁器片2点を出土している。図示したものは土師器の小皿（134）、坏（135～140・142・145～151）、椀（141・143・144）、甕（154～157）、羽釜（152）、須恵器の壺（158）、甕（153・160・161）、捏ね鉢（159）、瓦器の椀（162）、瓦質土器の羽釜（163）、同脚部（164～166）、白磁の皿（167）、碗（168・169）、瓦（172～180）、鉄製品（171）である。遺物から12～13世紀頃の遺構と考えられる。

遺構からは板材と15～20cm大の礫を多く検出しており、当初水留め遺構の可能性も考えられた。また遺構の上面からは遺物を多く含む集石遺構（SS1）を検出しており、当遺構との関連性も含めた検討が必要になると思われる。

SK8（第29図）

調査区（Ⅰ区下段）の中央東側（M6グリッド）に位置する。検出高は33.09mを測る。平面形態は隅丸長方形状を呈し、長径1.30m、短径0.48m、深さ10～15cmを測る。断面形態は皿状を呈し、南側が浅く落ち込んでいる。

遺物は出土していない。

SK9（第29図）

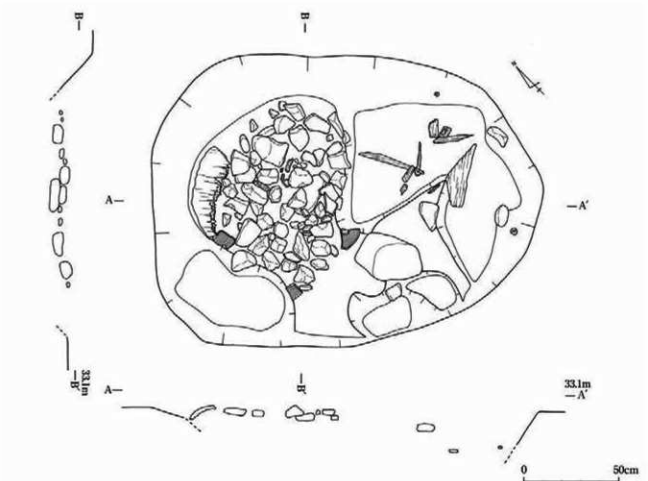
調査区（Ⅰ区下段）の中央東側（M6グリッド）に位置する。検出高は33.06mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径0.92m、短径0.49m、深さ25cmを測る。断面形態は箱形状を呈し、床面の形状はほぼ水平である。

遺物は口縁・底部（回転糸切り）を含む土師器片約30点と、須恵器片3点、瓦片（布目痕）2点、黒色土器の可能性が考えられる細片2点を出土しており、土師器片の多くは摩耗している。図示したものは土師器の坏（181・182・184・185）、椀（183）、甕（186）である。遺物から12～13世紀頃の遺構と考えられる。

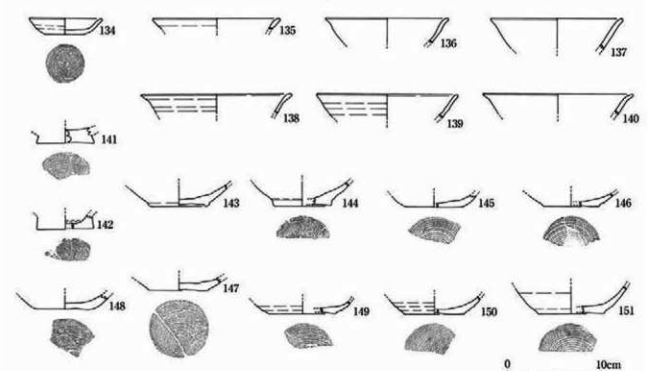
SK10（第30図）

調査区（Ⅰ区下段）の中央東側（M6グリッド）に位置する。検出高は33.05mを測る。平面形態は歪な方形状を呈し、長径1.18m、短径1.06m、深さ14cmを測る。床面から長径27～40cm、短径10～34cm、深さ6～9cmを測るピット状の落ち込みを検出しているが、遺構との関連性は不明である。

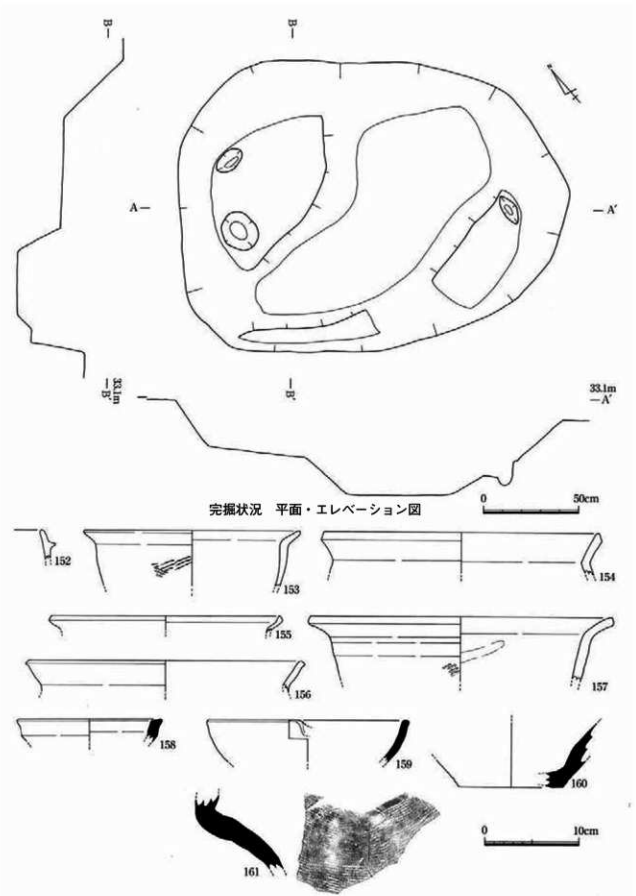
遺物は出土していない。



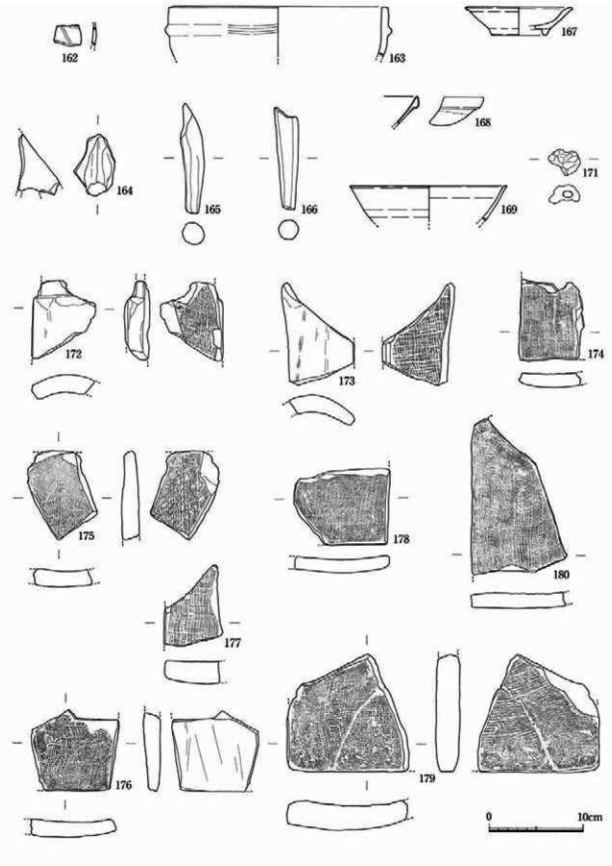
遺物出土状況　平面・エレベーション図



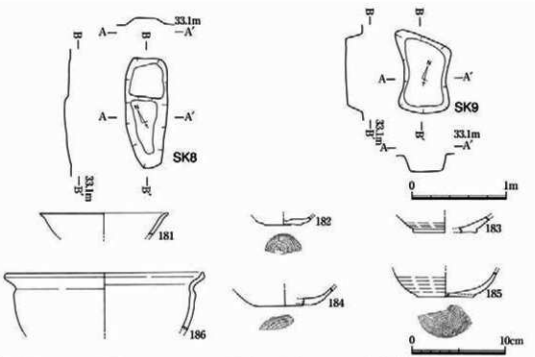
第26図　SK7　遺物出土状況　平面・エレベーション図（S=1/20）　出土遺物実測図1（S=1/4）



第27図　SK7　完掘状況・平面・エレベーション図（S=1/20）　出土遺物実測図2（S=1/4）



第28図　SK7　出土遺物実測図3（S=1/4）



第29図　SK8・9平面・エレベーション図（S=1/40）　SK9　出土遺物実測図（S=1/4）

SK11（第30図）

調査区（Ⅰ区下段）の中央東側（M6グリッド）に位置する。検出高は33.07mを測る。平面形態は隅丸方形状を呈し、長径1.21m、短径0.50m、深さ10cmを測る。SD5に切られている。断面形態は皿状を呈している。北側に径53～55cm、深さ27cmを測る方形状の掘り込みを有しているが、形状から切り合いの可能性も考えられる。

遺物は出土していない。

SK12（第30図）

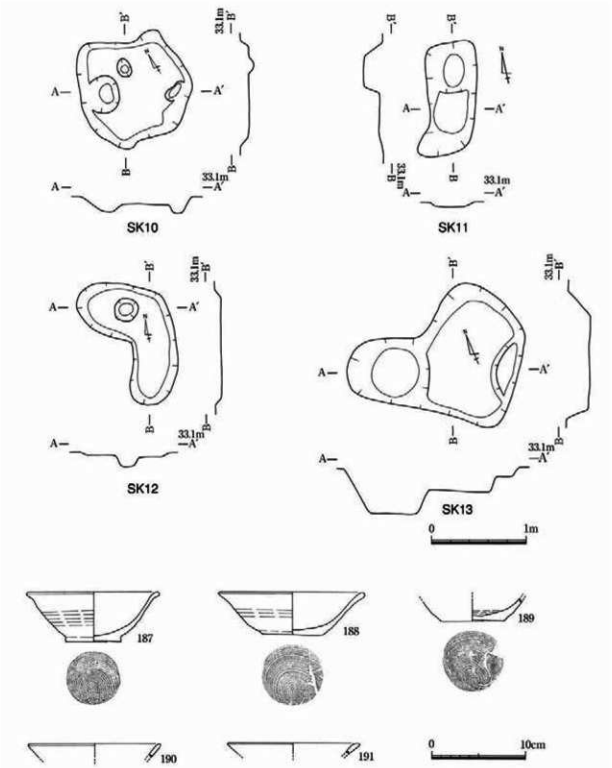
調査区（Ⅰ区下段）の中央東側（M6グリッド）に位置する。検出高は33.02mを測る。平面形態は不整楕円形状（逆L字状）を呈し、長径1.45m、短径0.58m、深さ6cmを測る。断面形態は皿状を呈している。床面から径25cm、深さ13cmを測るピット状の落ち込みを検出し、ほぼ完形の土師器の坏（187）を出土している。

遺物は口縁部を含む土師器片2点を出土している。

SK13（第30図）

調査区（Ⅰ区下段）の中央東側（M6・N6グリッド）に位置する。検出高は33.04mを測る。平面形態は不整楕円形状を呈し、長径1.76m、短径1.40m、深さ27cmを測る。断面形態は逆台形状を呈している。西側に長径0.88m、短径0.69m、深さ51cmを測る楕円形状の掘り込みを有しているが、形状から切り合いの可能性も考えられる。

遺物は底部（回転糸切り）を含む土師器片6点を出土しており、多くは摩耗している。図示したのは土師器の坏（188～191）である。



第30図　SK10～13平面・エレベーション図（S=1/40）　SK12・13出土遺物実測図（S=1/4）

187（SK12）　188～191（SK13）

SK14（第31図）

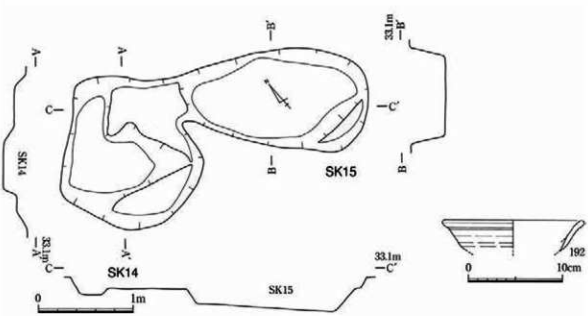
調査区（Ⅰ区下段）の中央東側（M7／N7グリッド）に位置する。検出高は33.04mを測る。平面形態は歪な方形状を呈し、長径1.63m、短径1.48m、深さ14～27cmを測る。西側と南側に段部を有し、東側はSK15に切られている。

遺物は土師器片の口縁部を2点出土している。図示したのは土師器の坏（192）である。

SK15（第31図）

調査区（Ⅰ区下段）の中央東側（N7グリッド）に位置する。検出高は33.02mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.96m、短径1.02m、深さ38cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、床面は東側に向かって緩やかに傾斜している。西側はSK14を切っている。

遺物は出土していない。



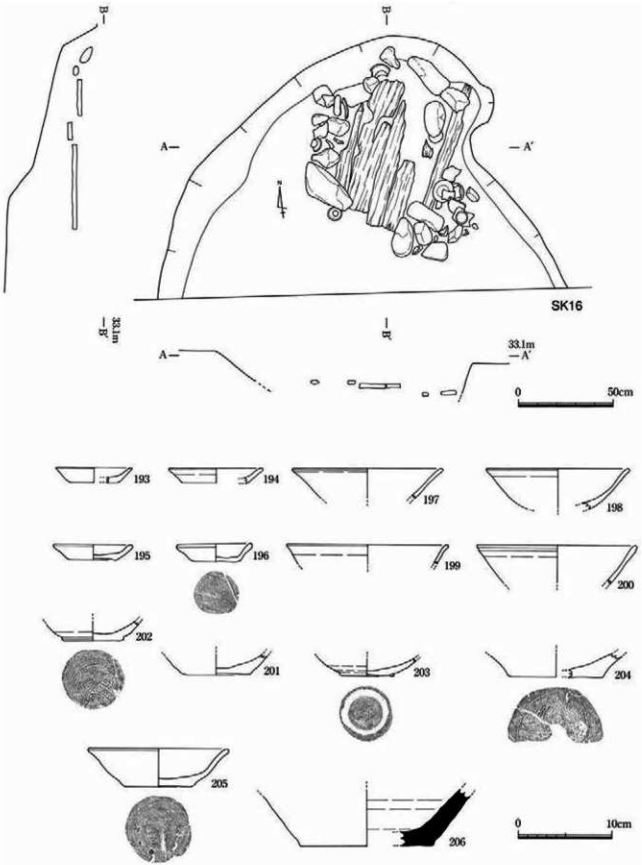
第31図　SK14・15平面・エレベーション図（S=1/40）　SK14出土遺物実測図（S=1/4）

SK16（第32～35図）

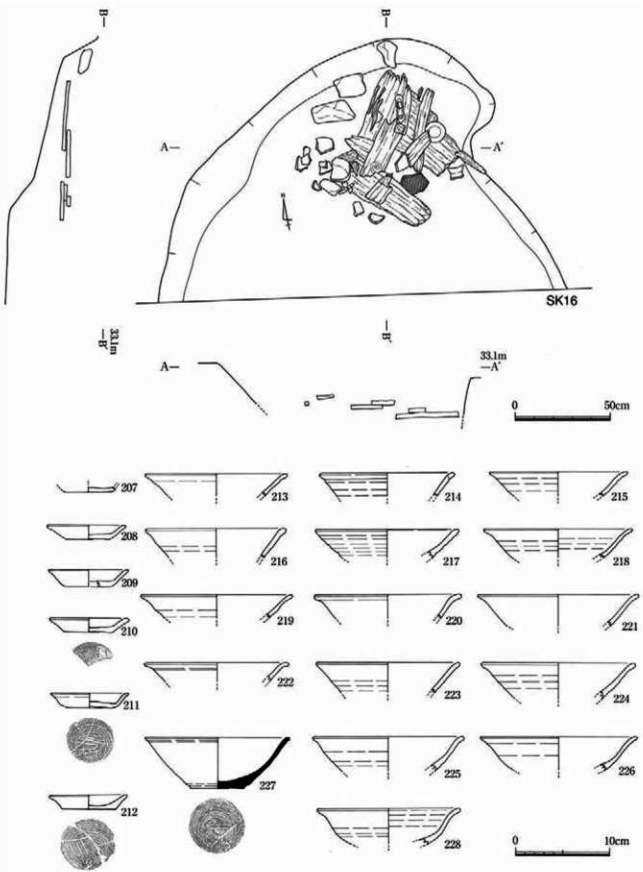
調査区（Ⅰ区下段）の中央南寄り（K7／L7グリッド）に位置する。南側はTRにより未検出である。検出高は33.10mを測る。平面形態は不整楕円形状を呈し、深さ27～51cmを測る。床面は段部を有しており、遺物の出土状態などから切り合いの可能性も考えられる。

遺物は口縁・底部（回転糸切り）を含む土師器片約450点と、須恵器片約80点、窯壁片9点、瓦片（布目痕）1点、瓦器片1点、白磁片（Ⅳ類）1点を出土している。他に混入と考えられる弥生土器片7点を出土している。図示したものは土師器の小皿（193～196・207～212）、坏（201・205・213～226・230～233）、椀（197～200・202・203・227～229・234～236）、甕（237・238）、鉢（204）、須恵器の壺（239・240・246）、甕（241～245）、鉢（206）、瓦器の椀（247・248）、白磁の碗（249・250）、瓦（251）である。遺物から12～13世紀頃の遺構と考えられる。

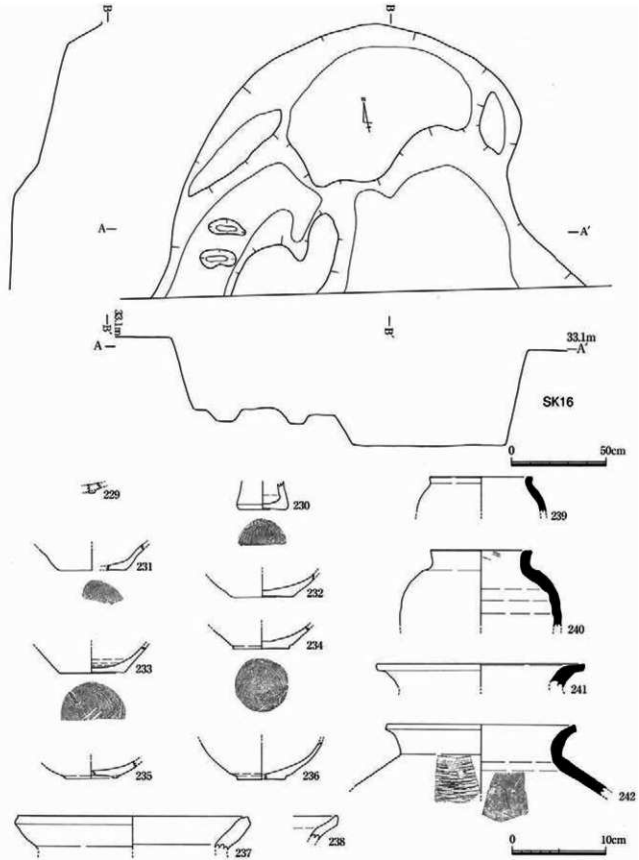
遺構からは板材と15～30cm大の礫を多く検出しており、水留め遺構の可能性も考えられる。



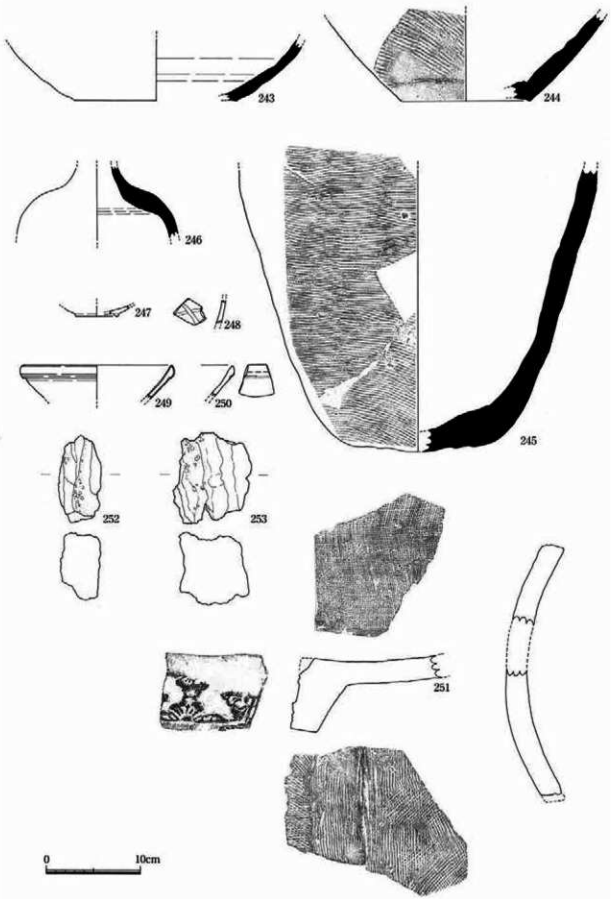
第32図　SK16　1面目遺物出土状況　平面・エレベーション図（S=1/20）　出土遺物実測図1（S=1/4）



第33図　SK16　2面目遺物出土状況　平面・エレベーション図（S=1/20）出土遺物実測図2（S=1/4）



第34図　SK16　完掘状況　平面・エレベーション図（S=1/20）　出土遺物実測図3（S=1/4）

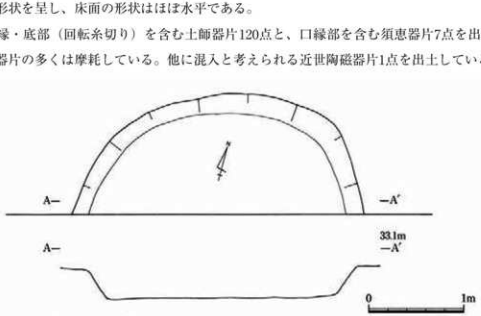


第35図　SK16　出土遺物実測図4（S=1/4）

SK17（第36図）

調査区（Ⅰ区下段）の南端（K12／L12グリッド）に位置する。南側は調査区外の為、未検出である。検出高は32.94mを測る。平面形態は現状で楕円形状を呈し、径3.45m、深さ1.40mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、床面の形状はほぼ水平である。

遺物は口縁・底部（回転糸切り）を含む土師器片120点と、口縁部を含む須恵器片7点を出土しており、土師器片の多くは摩耗している。他に混入と考えられる近世陶磁器片1点を出土している。



第36図　SK17　平面・エレベーション図（S=1/40）

(4) 溝（SD）

SD1（第37図）

調査区（Ⅰ区上段）の北端（M1／N1グリッド）に位置する。両端は調査区外へ続いている。検出高は北端で34.18m、東端で34.15mを測る。主軸方向はN-54°-Wで、僅かに東端を振っている。検出規模は2.90×0.30m、床面高は北端で33.95m、東端で33.89mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、最深部で27cmを測る。遺構は旧表土直下より掘り込まれ、底面に礫が確認された。

遺物は瓦片（近代以降）1点を出土している。口縁部を含む土師器片11点と、瓦質土器片1点、瓦片（布目痕）1点も出土しているが、土師器片の多くは摩耗しており、溝が機能した時期以外の遺物だと考えられる。近世以降の暗渠の可能性が考えられる遺構である。

SD2（第37図）

調査区（Ⅰ区上段）の北端（M1／N0・1グリッド）に位置する。両端は調査区外へ続いている。検出高は北・東端ともに34.15m を測る。主軸方向はN-30°-Wで、ほぼ直線状に検出している。検出規模は7.70×0.26m、床面高は北端で34.11m、東端で34.08mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、最深部で11cmを測る。

遺物は近世陶磁器片1点を出土している。図示したものは瓦（254・255）、窯壁片（256）であるが、周辺から検出された掘建柱建物跡等の軸方向が一致せず、近世以降の暗渠の可能性が考えられる遺構である。

SD3（第37図）

調査区（Ⅰ区上段）の北端（K0・1／L0グリッド）に位置する。北端は調査区外へ続いている。

検出高は北端で34.15m、南端で34.12mを測る。主軸方向はN-30°-Wで、ほぼ直線状に検出している。検出規模は6.56×0.30m、床面高は北端で33.70m、南端で33.76mを測る。断面形態は箱形状を呈し、最深部で52cmを測る。

遺物は摩耗した土師器片（底部）1点と、須恵器片1点、染付を含む近世陶磁器片15点、備前焼片（擂り鉢）2点、瓦片（近代）10点を出土している。主な出土遺物や周辺から検出された掘建柱建物跡等の軸方向が一致しないなど、近世以降の暗渠の可能性が考えられる遺構である。

SD4（第37図）

調査区（Ⅰ区上段）の北端（J0／K0・1グリッド）に位置する。北端は調査区外へ続いている。検出高は北・南端ともに34.33mを測る。主軸方向はN-30°-Wで、ほぼ直線状に検出している。検出規模は4.35×0.30m、床面高は北端で34.23m、南端で34.29mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、最深部で15cmを測る。

遺物は口縁・底部（回転糸切り）を含む土師器片76点と、瓦片（布目痕）1点、近世陶磁器片1点を出土しており、土師器片の多くは摩耗している。図示したものは土師器の小皿（257）、坏（258）、羽釜（259）、瓦質土器の羽釜（260）、瓦（261）であるが、付近に位置するSD2・3（近世以降の暗渠の可能性あり）と軸方向が同一であり、出土遺物との関係を含めて、時期・性格等については検討を要する。

SD5（第38図）

調査区（Ⅰ区下段）の東側（M5・6／N6グリッド）に位置する。北端は未検出であり、東端は調査区外へ続いている。検出高は北端で33.13m、東端で33.04mを測る。北端からN-10°-Eで約4.0m検出し、N-65°-Wで弧を描き東端に至る。SK11・12を切っている。検出規模は8.63×0.43m、床面高は北端で33.08m、東端で32.84mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、最深部で21cmを測る。

遺物は口縁・底部（回転糸切り）を含む土師器片4点を出土しており、多くは摩耗している。底部の1点は輪高台状を呈している。図示したものは土師器の坏（262～264）、須恵器の蓋（265）である。遺物から12～13世紀頃の遺構と考えられ、切り合い関係にある土坑とは僅かな時期差があると考えられる。

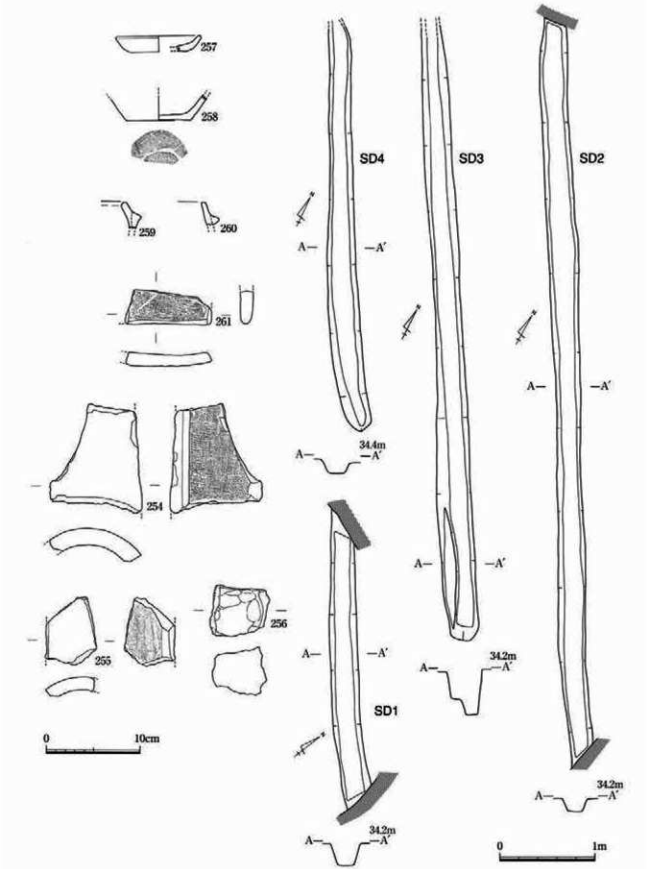
SD6（第38図）

調査区（Ⅰ区下段）の中央（K6／L6グリッド）に位置する。東端は未検出であり、西端はTRにより切られている。検出高は東端で33.24m、西端で33.22mを測る。主軸方向はN-63°-Eで、ほぼ直線状に検出している。検出規模は2.37×0.38m、床面高は東端で33.19m、西端で33.17mを測る。断面形態は皿状を呈し、最深部で9cmを測る。

遺物は出土していない。隣接するSD7～9と軸方向がほぼ同一であり、畝状遺構の可能性も考えられる。

SD7（第38図）

調査区（Ⅰ区下段）の中央（K6／L5・6／M5グリッド）に位置する。東端は未検出であり、西端はTRにより切られている。検出高は東端で33.12m 、西端で33.24mを測る。主軸方向はN-60°-Eでほぼ直線状に検出している。検出規模は11.80×0.36m、床面高は東端で33.07m、西端で33.13mを測る。断面形態は皿状を呈し、最深部で11cmを測る。



第37図　SD1～4平面・エレベーション図（S=1/40）　SD2・4出土遺物実測図（S=1/4）

254～256（SD2）257～261（SD4）

遺物は口縁・底部（回転糸切り）を含む土師器片10点を出土しており、多くは摩耗している。隣接するSD6～9と軸方向がほぼ同一であり、畝状遺構の可能性も考えられる。

SD8（第38図）

調査区（Ⅰ区下段）の中央（K6グリッド）に位置する。東端は未検出であり、西端はTRにより切られている。検出高は東端で33.24m、西端で33.27mを測る。主軸方向はN-61°-Eで、ほぼ直線状に検出している。検出規模は2.50×0.25m、床面高は東端で33.20m、西端で33.23mを測る。断面形態は皿状を呈し、最深部で4cmを測る。

遺物は出土していない。隣接するSD6～9と軸方向がほぼ同一であり、畝状遺構の可能性も考えられる。

SD9（第38図）

調査区（Ⅰ区下段）の中央（K6／L5・6グリッド）に位置する。東端は未検出であり、西端はTRにより切られている。検出高は東端で33.23m、西端で33.27mを測る。主軸方向はN-62°-Eで、ほぼ直線状に検出している。検出規模は8.08×0.27m、床面高は東端で33.21m、西端で33.24mを測る。断面形態は皿状を呈し、最深部で5cmを測る。遺物は底部を含む土師器片5点と、須恵器片1点、瓦質土器片1点を出土しており、土師器片と瓦質土器片は摩耗している。隣接するSD6～8と軸方向がほぼ同一であり、畝状遺構の可能性も考えられる。

SD10（第39図）

調査区（Ⅰ区下段）の南側（K9・10／L9グリッド）に位置する。東端はTRに切られている。検出高は東端で33.11m、北端で33.14mを測る。主軸方向はN-57°-Eで、北側で僅かに弧を描き検出を終える。SR3を切っているが、SB5との前後関係は不明である。検出規模は7.60×0.38m、床面高は東・北端ともに32.99m を測る。断面形態は逆台形状を呈し、最深部は17cmを測る。埋土は灰色シルトである。

遺物は口縁・底部（回転糸切り）を含む土師器片32点と、須恵器片3点を出土しており、土師器片の多くは摩耗している。図示したのは土師器の小皿（266・267）、鉢（268）である。

SD11（第39図）

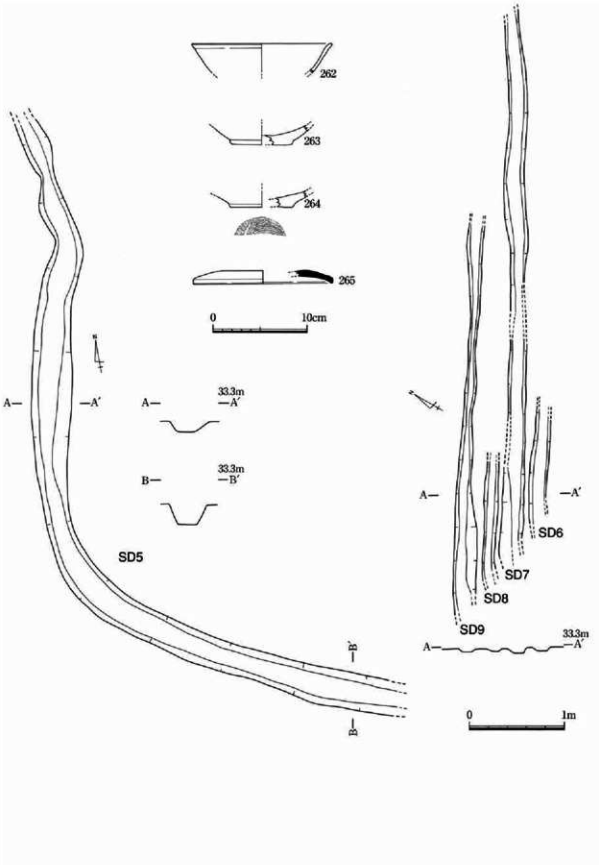
調査区（Ⅰ区下段）の南側（I9／J9・10グリッド）に位置する。北端は未検出である。検出高は北端で33.25m、南端で33.19mを測る。主軸方向はN-14°-Wで、ほぼ直線状に検出している。掘建柱建物跡（SB6）を含むピット3個に切られている。検出規模は7.00×0.32m、床面高は北・南端ともに33.17mを測る。断面形態は皿状を呈し、最深部は8cmを測る。

遺物は出土していない。

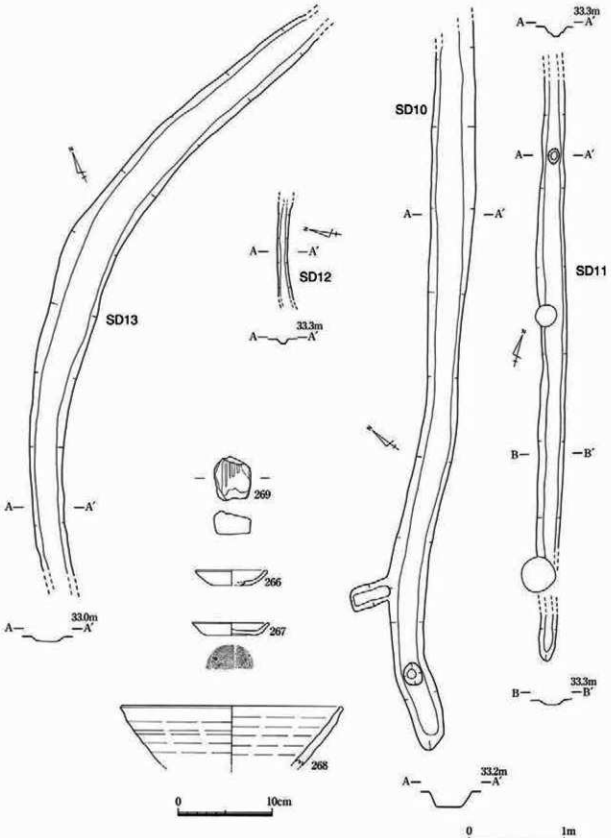
SD12（第39図）

調査区（Ⅰ区下段）の南側（I9・10グリッド）に位置する。両端は未検出である。検出高は東端で33.28m、西端で33.27m を測る。主軸方向はN-78°-Eで、ほぼ直線状に検出している。検出規模は1.09×0.15m、床面高は東端で33.21m、西端で33.20mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、最深部で5cmを測る。

遺物は煉瓦片（近代）1点を出土している。



第38図　SD5～9平面・エレベーション図（S=1/40）　SD5出土遺物実測図（S=1/4）



第39図　SD10～13平面・エレベーション図（S=1/40）　SD10・13出土遺物実測図（S=1/4）

266～268（SD10）　269（SD13）

SD13（第39図）

調査区（Ⅰ区下段）の南側（H11・12／I11グリッド）に位置する。両端は未検出である。検出高は東端で32.99m、南端で32.91mを測る。主軸方向は東端からN-78°-Eで約2.5m検出し、N-27°-Eで弧を描き東端に至る。検出規模は6.65×0.40m、床面高は東端で32.92m、南端で32.88mを測る。断面形態は皿状を呈し、最深部で10cmを測る。埋土は灰色シルトである。

遺物は口縁・底部（回転糸切り）を含む土師器片13点と、須恵器片1点を出土しており、土師器片の多くは摩耗している。図示したものは窯壁片（269）である。

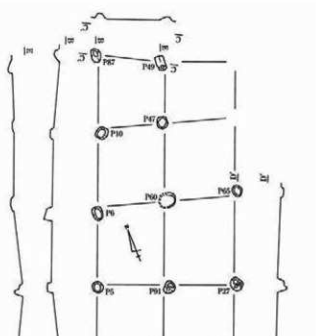
(5) 掘立柱建物（SB）・柵列（SA）・柱穴等（P）

SB1（第40・41図）

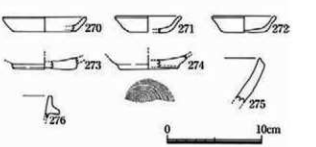
調査区（Ⅰ区上段）の北側（L0・1・2／M0・1・2グリッド）に位置する。SK2・SB2との切り合い関係は不明である。検出高は34.12～34.33mを測る。棟方向はN-22°-Eである。検出規模は梁間1×桁行4、梁間3.6m×桁行8.0mを測る。柱間寸法は梁間1.8m、桁行1.5～2.3mを測る。柱穴数は13で、北東隅の柱穴は未検出と考えられる。柱穴の規模は径28～39cm、深さ8～39cmを測る。

遺物はP4から口縁・底部を含む土師器片29点、P5から土師器片1点、P6から土師器片7点、P10から土師器片1点、P26から底部を含む土師器片8点、P27から土師器片3点、P87から土師器片8点、P94から土師器片2点をそれぞれ出土している。底部は回転糸切りで、土師器片の多くは摩耗している。図示したものはP4出土の土師器の椀（273）、P5出土の土師器の小皿（270）、P6出土の瓦質土器の羽釜（276）、P26出土の土師器の小皿（271・272）、椀（274）、P94出土の瓦質土器の鉢（275）である。遺物から13世紀頃の遺構と考えられる。

尚、P5は当遺構と重複して検出しているSB2を構成する柱穴と検出場所が一致しており、建て替え等が行われた可能性を含んでいる。



第40図　SB1　平面・エレベーション図（S=1/100）



第41図　SB1　出土遺物実測図（S=1/4）

SB2（第42図）

調査区（Ⅰ区上段）の北側（L0・1／M0・1グリッド）に位置する。SB1との切り合い関係は不明である。検出高は34.12～34.19mを測る。棟方向はN-13°-Wである。検出規模は梁間2×桁行3、梁間3.2m×桁行4.8mを測る。柱間寸法は梁間1.2～2.2m、桁行1.3～2.0mを測る。柱穴数は10である。柱穴の規模は径22～34cm、深さ6～25cmを測る。

遺物はP5から土師器片1点、P12から土師器片3点、P38から竈壁片1点をそれぞれ出土している。

尚、P5は当遺構と重複して検出しているSB1を構成する柱穴と検出場所が一致しており、建て替え等が行われた可能性を含んでいる。

SB3（第42図）

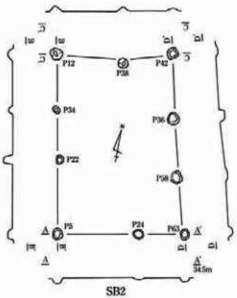
調査区（Ⅰ区下段）の中央東寄り（L7／M7グリッド）に位置する。検出高は32.76～32.81mを測る。棟方向はN-10°-Eである。検出規模は梁間1×桁行1、梁間1.3m×桁行1.3mを測る。柱間寸法は梁間1.3m、桁行1.3mを測る。柱穴数は4である。柱穴の規模は径18～24cm、深さ9～19cmを測る。

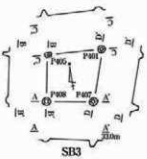
遺物は出土していない。当遺構はSE1に伴う可能性が考えられる。

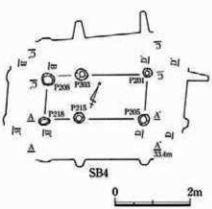
SB4（第42図）

調査区（Ⅰ区下段）の中央南寄り（K7・8／L7・8グリッド）に位置する。SK16との切り合い関係は不明である。検出高は33.13～33.18mを測る。棟方向はN-68°-Eである。検出規模は梁間1×桁行2、梁間1.2m×桁行2.6mを測る。柱間寸法は梁間1.2m、桁行0.9～1.7mを測る。柱穴数は6である。柱穴の規模は径25～35cm、深さ5～57cmを測る。

遺物はP201から口縁部を含む土師器片3点、P205から底部を含む土師器片6点と須恵器片1点、P215から瓦質土器片1点、口縁・底部を含む土師器片4点をそれぞれ出土している。底部は回転糸切りで、土師器片の多くは摩耗している。







第42図
SB2～4　平面・エレベーション図
(S=1/100)

SB5（第43図）

調査区（Ⅰ区下段）の南側（K9・10グリッド）に位置する。SD10との前後関係は不明である。検出高は33.08～33.16mを測る。棟方向はN-19°-Eである。検出規模は梁間1×桁行2、梁間2.0m×桁行3.7mを測る。柱間寸法は梁間2.0m、桁行1.8～2.3mを測る。柱穴数は5で、南西隅の柱穴は未検出と考えられる。柱穴の規模は径25～56cm、深さ13～34cmを測る。

遺物はP233から口縁・底部を含む土師器片8点と須恵器片2点、P340から土師器片2点、P345から土師器片7点と瓦片1点をそれぞれ出土している。

付近に位置するSB6・7とは棟方向が同軸であり、一連の遺構群の可能性が考えられる。

SB6（第43図）

調査区（Ⅰ区下段）の南側（I9・10／J9・10グリッド）に位置する。SD11を切っている。検出高は33.22～33.26mを測る。棟方向はN-19°-Eである。検出規模は梁間1×桁行2、梁間2.3m×桁行4.0mを測る。柱間寸法は梁間2.3m、桁行1.7～2.3mを測る。柱穴数は6である。柱穴の規模は径約22～31cm、深さ約14～28cmを測る。

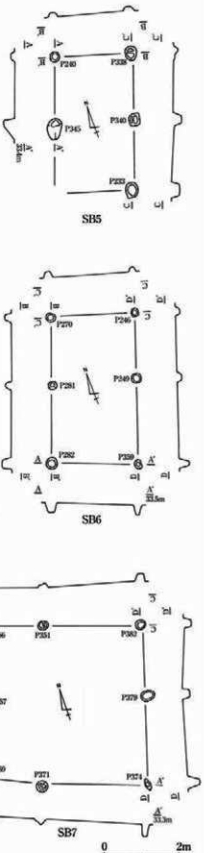
遺物はP249から土師器片6点、P270から土師器片1点、P359から土師器片8点をそれぞれ出土している。底部は回転糸切りで、土師器片の多くは摩耗している。

付近に位置するSB5・7とは棟方向が同軸であり、一連の遺構群の可能性が考えられる。

SB7（第43・44図）

調査区（Ⅰ区下段）の南側（J11・12／K11・12グリッド）に位置する。SB8との前後関係は不明である。検出高は32.95～33.07mを測る。棟方向はN-19°-Eである。検出規模は梁間2×桁行2、梁間4.1m×桁行4.3mを測る。柱間寸法は梁間1.9m～2.3m、桁行1.6m～2.6mを測る。柱穴数は8である。柱穴の規模は径27～38cm、深さ8～34cmを測る。

遺物はP356から土師器片6点、P357から土師器片2点、P369から土師器片1点、P371から口縁部を含む土師器片5点、P379から口

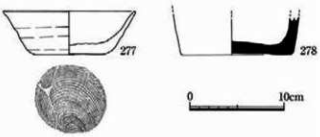


第43図　SB5～7　平面・エレベーション図（S=1/100）

縁・底部（輪高台1点）を含む土師器片28点、P382から土師器片2点と須恵器片20点をそれぞれ出土している。

底部は回転糸切りで、土師器片の多くは摩耗している。図示したものはP379出土の土師器の坏（277）と、P382出土の須恵器の壺（278）である。

付近に位置するSB5・6とは棟方向が同軸であり、一連の遺構群の可能性が考えられる。



第44図　SB7　出土遺物実測図（S=1/4）

SB8（第45図）

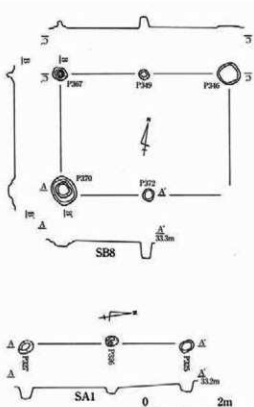
調査区（Ⅰ区下段）の南側（J11・12／K11・12グリッド）に位置する。SB7との前後関係は不明である。検出高は33.01～33.08mを測る。棟方向はN-82°-Eである。検出規模は梁間1×桁行2、梁間3.1m×桁行4.4mを測る。柱間寸法は梁間3.1m、桁行2.2mを測る。柱穴数は5であるが、北東隅の柱穴は未検出と考えられる。柱穴の規模は径28～76cm、深さ7～42cmを測る。

遺物はP349から土師器片3点、P367から瓦片1点をそれぞれ出土している。

SA1（第45図）

調査区（Ⅰ区下段）の中央東側（N7・8グリッド）に位置する。検出高は32.92～33.02mを測る。主軸方向はN-10°-Eである。検出規模は4.6mを測る。柱間寸法は2.0～2.2mを測る。柱穴数は3であり、南端のP327は土取り跡4の上面から検出している。柱穴の規模は径32～41cm、深さ17～32cmを測る。

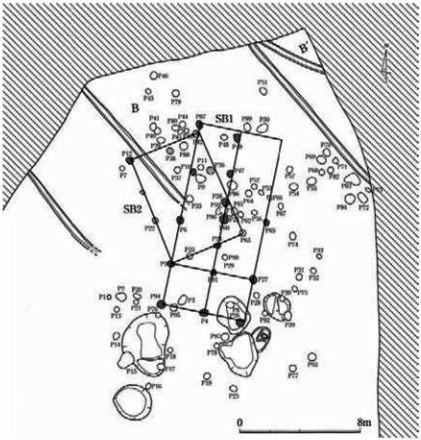
遺物は出土していない。



第45図　SB8・SA1　平面・エレベーション図（S=1/100）

柱穴等（P）（第46図～48図）

調査区全域から293基のピットを検出した。調査地点ごとに、調査時点の遺構番号と遺構の規模、出土遺物について一覧表にまとめて提示する。ピットからの出土遺物は細片が多く、時期が判断可能な遺物は、すべて古代末から中世前期にかけての遺物である。



第46図　Ⅰ区上段遺構と遺構（ピット）配置図（S=1/160）

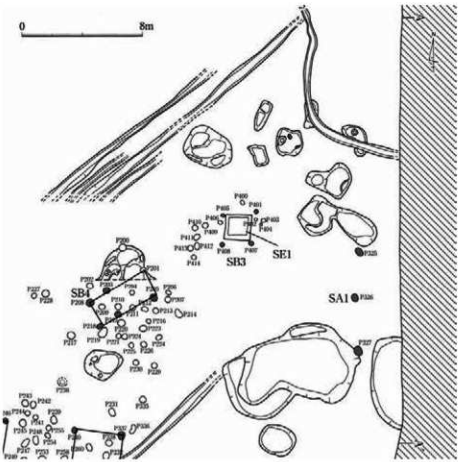
遺構	遺構内でのピット番号	ピット番号	短軸(cm)	長軸(cm)	深さ(cm)
SB－1	W 1	P－87	26.0	36.5	13.3
SB－1	W 2	P－10	29.0	30.0	9.2
SB－1	W 3	P－6	26.0	39.0	22.4
SB－1	W 4	P－5	26.0	29.0	14.0
SB－1	W 5	P－94	32.0	33.0	28.7
SB－1	C 1	P－48	25.0	26.0	13.6
SB－1	C 2	P－47	29.0	33.0	3.6
SB－1	C 3	P－60	25.0	39.0	8.5
SB－1	C 4	P－91	26.0	31.0	22.6
SB－1	C 5	P－4	28.0	35.0	38.8
SB－1	E 3	P－65	23.0	28.0	11.6
SB－1	E 4	P－27	30.0	37.0	27.3
SB－1	E 5	P－26	34.0	36.0	39.0
SB－2	W 1	P－12	29.0	33.0	14.1
SB－2	W 2	P－34	16.0	22.0	12.0
SB－2	W 3	P－22	21.0	24.0	24.5
SB－2	C 1	P－38	25.0	27.0	11.8
SB－2	C 4	P－24	24.0	31.0	5.3
SB－2	E 1	P－42	28.5	29.0	6.8
SB－2	E 2	P－36	30.0	32.0	15.3
SB－2	E 3	P－58	30.0	34.0	4.6
SB－2	E 4	P－63	23.5	27.0	15.4

ピット番号	短軸(cm)	長軸(cm)	深さ(cm)
P－1	19.0	21.0	4.0
P－2	38.0	40.0	24.0
P－3	28.0	46.0	17.9
P－7	21.0	21.5	6.3
P－8	29.0	34.0	10.5
P－9	32.0	47.0	7.0
P－11	24.0	25.0	8.1
P－13	24.0	25.0	2.8
P－14	26.0	34.0	13.1

ピット番号	短軸(cm)	長軸(cm)	深さ(cm)
P－15	60.0	72.0	27.4
P－16	20.0	28.0	38.4
P－17	28.0	31.5	22.3
P－18	21.0	22.0	12.2
P－19	25.5	27.0	9.2
P－21	22.0	22.0	7.1
P－20	20.0	36.0	8.4
P－23	26.0	26.0	10.2
P－25	25.0	28.0	16.7
P－28	25.0	28.0	16.1
P－29	35.0	42.0	23.4
P－30	25.0	27.5	5.5
P－31	25.0	29.5	19.7
P－32	22.0	37.0	16.4
P－33	16.5	19.0	20.6
P－35	29.0	30.0	9.3
P－37	27.0	30.0	10.8
P－39	28.0	38.5	9.2
P－40	25.0	27.0	36.8
P－41	25.0	34.0	30.8
P－43	21.0	22.0	3.8
P－44	26.0	26.5	8.6
P－45	22.0	22.0	5.2
P－46	27.0	30.5	30.5
P－49	24.0	39.0	11.7
P－50	32.0	46.0	19.7
P－51	28.0	36.0	11.2
P－52	23.5	27.0	10.4
P－53	18.0	28.0	9.3
P－54	26.5	34.0	14.1
P－55	29.0	42.0	6.4
P－56	20.5	22.0	9.6
P－57	25.0	26.0	4.1

ピット番号	短軸(cm)	長軸(cm)	深さ(cm)
P－59	20.0	30.0	7.4
P－61	26.0	30.0	10.6
P－62	23.5	25.0	13.1
P－64	24.0	26.0	9.0
P－66	20.0	21.0	7.3
P－67	23.0	28.0	4.9
P－68	25.0	26.0	6.5
P－69	30.0	38.0	8.1
P－70	29.0	43.0	23.1
P－71	25.0	30.0	11.9
P－72	32.0	47.0	10.9
P－73	14.5	36.0	10.2
P－74	28.0	32.0	14.4
P－75	20.0	22.0	6.2
P－76	21.0	22.0	23.6
P－77	28.0	28.0	7.4
P－78	21.0	22.0	7.4
P－79	27.5	30.0	63.1
P－80	23.0	30.5	11.8
P－81	15.0	26.0	7.2
P－82	25.0	25.0	19.8
P－83	39.0	62.0	15.3
P－84	42.0	43.0	25.7
P－85	28.0	42.0	17.1
P－86	37.0	41.0	21.6
P－88	31.0	34.0	21.7
P－89	29.0	35.0	17.1
P－90	22.5	25.0	13.2
P－92	22.0	26.0	14.3
P－93	35.0	35.0	32.5
P－95	33.5	34.0	12.7
P－96	26.0	31.0	16.0
P－97	34.0	34.0	30.2

表2　Ⅰ区ピット計測表（1）



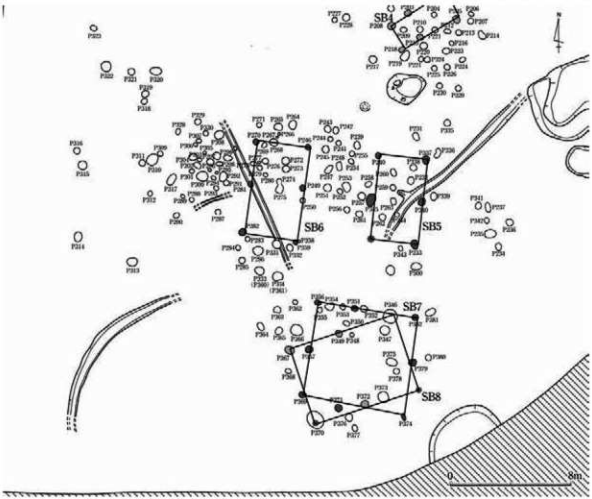
第47図　Ⅰ区下段北半部遺構と遺構（ピット）配置図（S=1/160）

遺構	遺構内でのピット番号	ピット番号	短軸(cm)	長軸(cm)	深さ(cm)
SB－3	W 1	P－405	12.5	18.0	17.2
SB－3	W 2	P－408	20.5	21.5	7.8
SB－3	E 1	P－401	19.0	19.0	8.3
SB－3	E 2	P－407	21.0	24.0	18.5
SA1	1	P－325	32.0	33.0	28.7
SA1	2	P－326	25.0	26.0	13.6
SA1	3	P－327	29.0	33.0	3.6
SB4	W 1	P－201	22.0	24.5	56.6
SB4	W 2	P－203	31.0	34.0	46.9
SB4	W 3	P－208	31.0	35.0	7.2
SB4	E 1	P－205	30.0	31.0	14.7
SB4	E 2	P－215	26.0	29.0	18.8
SB4	E 3	P－218	19.5	31.0	4.5
		P－400	19.0	22.0	4.2
		P－402	15.0	17.0	13.3
		P－403	17.0	21.0	7.8
		P－404	14.0	17.0	9.9
		P－406	17.0	22.0	20.3
		P－409	19.0	22.0	11.5
		P－410	21.5	22.5	13.3
		P－411	18.5	28.0	16.0
		P－412	21.0	28.0	13.3
		P－413	25.0	25.0	6.8
		P－414	19.0	21.0	8.1
		P－500	36.0	52.0	10.0
		P－200	29.0	41.5	21.1
		P－202	26.0	28.0	10.7
		P－204	23.0	24.0	57.1
		P－206	21.0	23.0	12.3
		P－207	24.0	28.0	9.8
		P－209	23.0	29.0	17.4
		P－210	28.5	30.0	25.5

ピット番号	短軸(cm)	長軸(cm)	深さ(cm)
P－211	23.0	25.0	32.5
P－212	19.0	29.0	25.2
P－213	22.0	26.0	25.6
P－214	32.0	42.0	39.9
P－216	20.0	22.0	21.9
P－217	32.0	33.0	17.5
P－219	29.0	48.0	27.3
P－220	27.0	30.0	16.6
P－221	20.0	29.5	16.5
P－223	26.0	26.0	23.4
P－224	19.5	24.5	12.8
P－225	25.0	25.0	24.4
P－226	20.5	23.0	15.1
P－227	18.0	22.0	12.5
P－228	29.0	29.0	8.9
P－229	21.0	24.0	16.1
P－230	22.0	23.0	9.6
P－231	25.0	34.0	11.4
P－232	27.0	31.0	21.0
P－234	27.0	29.0	20.5
P－235	35.0	47.0	18.6
P－236	26.0	27.0	20.9
P－237	20.0	44.0	19.1
P－238	15.0	33.0	21.1
P－239	29.0	33.0	8.4
P－241	22.0	23.0	7.7
P－242	25.0	33.0	19.1
P－243	27.0	32.0	11.0
P－244	23.0	23.0	10.7
P－245	28.0	35.0	7.7
P－247	24.0	45.0	41.0
P－248	23.5	38.0	17.6
P－250	23.0	23.0	22.7
P－251	34.0	36.0	29.2

ピット番号	短軸(cm)	長軸(cm)	深さ(cm)
P－252	21.0	28.0	15.9
P－253	30.0	40.0	18.6
P－254	22.0	28.0	27.9
P－255	25.0	25.0	10.3
P－256	24.0	26.0	30.3
P－257	28.0	32.0	33.5
P－258	21.0	32.0	38.0
P－259	21.0	26.0	17.2
P－260	24.0	35.0	18.6
P－261	25.0	27.0	15.4
P－262	27.0	27.0	18.2
P－263	27.0	31.0	16.0
P－264	30.0	39.0	27.0
P－265	28.0	37.0	8.1
P－266	17.0	17.0	4.2
P－267	9.0	13.0	3.2
P－268	33.0	36.0	18.6
P－269	17.0	31.0	13.0
P－271	21.0	23.0	11.9
P－272	34.0	35.0	21.9
P－273	31.0	31.0	27.0
P－274	26.0	27.0	13.8
P－275	35.0	40.0	19.2
P－276	27.0	28.0	21.1
P－277	12.0	12.0	7.8
P－278	17.0	23.0	15.8
P－279	23.0	25.0	18.5
P－280	19.0	19.0	16.5
P－283	22.5	23.0	23.8
P－284	18.0	22.0	27.5
P－285	23.5	27.0	26.5
P－286	37.0	46.0	24.9
P－287	22.0	24.0	16.7
P－288	21.0	23.0	13.4

表2　Ⅰ区ピット計測表（2）



第48図　Ⅰ区下段南半部遺構と遺構（ピット）配置図（S=1/160）

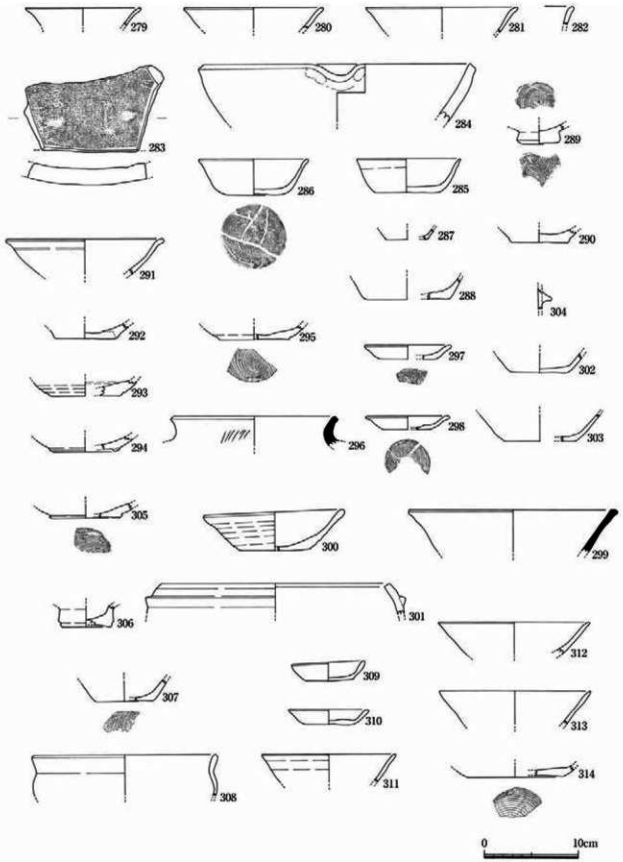
遺構	遺構内でのピット番号	ピット番号	短軸(cm)	長軸(cm)	深さ(cm)
SB5	W 2	P－345	37.0	56.0	29.9
SB5	E 1	P－337	30.0	38.0	12.1
SB5	E 2	P－340	29.0	34.0	21.0
SB5	E 3	P－233	34.0	39.0	22.9
SB6	W 1	P－270	23.0	25.0	18.5
SB6	W 2	P－281	21.5	22.0	17.5
SB6	W 3	P－282	30.0	31.0	28.1
SB6	E 1	P－246	19.5	24.0	13.2
SB6	E 2	P－249	25.0	25.0	13.6
SB6	E 3	P－359	17.0	26.0	27.8
SB7	W 1	P－356	23.0	28.0	17.2
SB7	W 2	P－357	25.0	27.0	28.7
SB7	W 3	P－369	28.0	30.0	7.8
SB7	C 1	P－351	25.0	27.0	11.1
SB7	C 3	P－371	31.0	32.0	15.9
SB7	E 1	P－382	25.0	28.0	46.0
SB7	E 2	P－379	26.0	38.0	20.1
SB7	E 3	P－374	16.0	33.0	33.4
SB8	W 1	P－346	56.0	56.0	5.6
SB8	W 2	P－349	24.0	28.0	27.8
SB8	W 3	P－367	32.0	39.0	19.3
SB8	E 2	P－372	28.0	32.5	41.7
SB8	E 3	P－370	62.0	76.0	16.1

ピット番号	短軸(cm)	長軸(cm)	深さ(cm)
P－298	20.0	30.0	13.6
P－299	25.0	40.0	13.8
P－300	38.0	46.0	23.7
P－301	18.5	23.5	13.0
P－302	22.0	28.5	11.6
P－303	21.0	24.5	21.4
P－304	28.0	39.0	17.7
P－305	13.0	15.0	4.8
P－306	16.0	21.5	7.3
P－307	23.0	23.5	12.8
P－308	35.0	45.0	20.5
P－309	21.0	23.0	15.7
P－310	42.0	51.0	23.3
P－311	26.0	28.0	12.7
P－312	17.5	21.5	12.2
P－313	33.0	45.0	25.5
P－314	33.0	43.0	16.0
P－315	35.0	38.0	24.3
P－316	24.0	25.0	12.9
P－317	30.0	52.0	11.9
P－318	24.0	28.0	12.3
P－319	25.0	30.0	10.8
P－320	34.0	50.0	13.5
P－321	29.0	31.0	16.0
P－322	40.0	40.0	16.8
P－323	26.0	27.0	10.6
P－324	25.0	28.0	22.4
P－328	18.5	39.0	14.1
P－329	25.0	25.0	8.1
P－330	24.0	24.0	10.2
P－331	46.0	47.0	28.7
P－332	30.0	31.0	36.1
P－333	35.0	41.0	16.4

ピット番号	短軸(cm)	長軸(cm)	深さ(cm)
P－334	34.0	43.0	12.7
P－335	29.0	31.0	21.6
P－336	20.0	45.0	6.9
P－338	28.0	28.0	11.1
P－339	29.0	34.0	14.7
P－341	27.0	32.0	12.5
P－342	21.5	25.0	15.9
P－343	23.0	26.5	11.2
P－344	22.0	24.0	16.1
P－347	40.0	41.0	35.4
P－348	16.5	19.0	8.8
P－350	20.0	30.0	6.5
P－352	28.0	29.5	13.6
P－353	20.0	27.0	3.5
P－354	27.0	36.0	14.8
P－355	22.0	23.0	24.9
P－358	14.0	14.0	17.6
P－360	34.0	40.0	15.8
P－361	33.0	41.0	12.9
P－362	19.0	19.0	6.5
P－363	28.0	40.0	26.7
P－364	27.0	29.0	10.8
P－365	26.0	36.0	20.7
P－366	43.0	48.0	29.1
P－368	23.0	29.0	11.9
P－373	40.5	47.5	37.4
P－375	32.0	44.0	29.9
P－376	32.0	33.0	7.6
P－377	19.0	26.0	10.5
P－378	27.0	29.0	39.7
P－380	25.0	30.0	11.7
P－381	25.0	45.0	12.2
P－383	27.0	34.0	15.1

P－289	12.5	18.0	2.3
P－290	21.0	25.0	6.4
P－291	23.0	29.0	16.2
P－292	35.0	43.0	19.2
P－293	20.0	23.0	18.3
P－294	18.0	19.0	6.7
P－295	13.0	13.0	10.6
P－296	14.5	15.0	3.9
P－297	28.0	30.0	13.9

表2　Ⅰ区ピット計測表（3）



第49図　ピット出土遺物実測図（S=1/4）

(6) 下層の遺構・土取り跡

下層検出の遺構は土取り跡４基と自然流路３条であり、遺構の配置を第50図に示した。Ⅰ区南東端に集まっており、グリッドＪ～Ｎ、７～11の範囲に分布している。自然流路は北西方向から南東方向に向かって流れている。

土取り跡1（第51図）

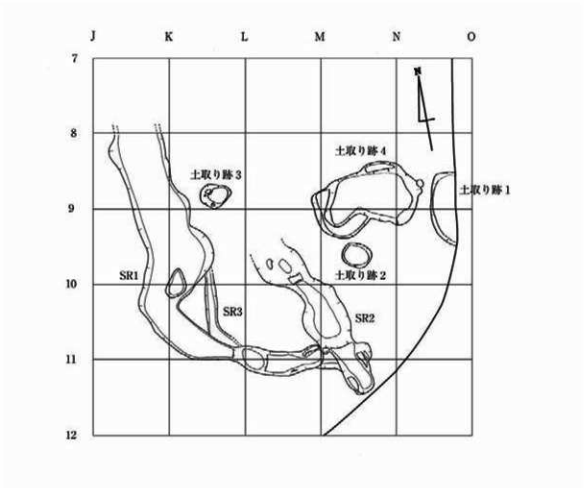
調査区（Ⅰ区下段）の東端南側（N8・9グリッド）に位置する土坑である。東側は調査区外の為未検出である。検出高は32.57mを測る。平面形態は長楕円形状を呈し、径3.80m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、壁面は斜めに立ち上がる。埋土は黒茶褐色腐葉土である。

遺物の出土は確認していない。

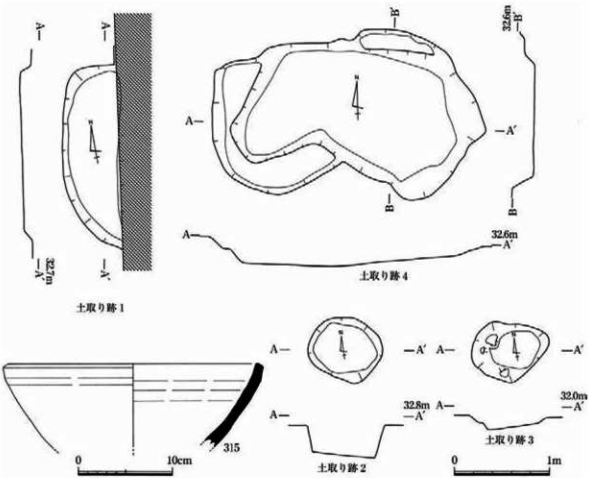
土取り跡2（第51図）

調査区（Ⅰ区下段）の南側東寄り（M9グリッド）に位置する土坑である。検出高は32.63mを測る。平面形態は歪な円形状を呈し、径1.50m、深さ58～70cmを測る。断面形態は箱形状を呈し、床面は東側に向かって傾斜している。埋土は黒茶褐色腐葉土である。

遺物の出土は確認していない。



第50図　Ⅰ区下層遺構位置図（S=1/200）



第51図　土取り跡1～4平面・エレベーション図（S=1/40）　土取り跡4出土遺物実測図（S=1/4）

土取り跡3（第51図）

調査区（Ⅰ区下段）の中央南寄り（K8グリッド）に位置する土坑である。検出高は32.81mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.54m、短径1.26m、深さ18～31cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、床面は西側に向かって傾斜している。埋土は黒褐色腐葉土である。

遺物の出土は確認していない。

土取り跡4（第51図）

調査区（Ⅰ区下段）の東側南寄り（L8・9／M8・9／N8・9グリッド）に位置する土坑である。検出高は32.59mを測る。平面形態は不整楕円形状を呈し、長径3.48m、短径3.00m、深さ29～54cmを測る。断面形態は皿状を呈し、床面は西側に向かって傾斜している。西側に段部を有し、形状から切り合いの可能性が考えられる。埋土は黒茶褐色腐葉土である。

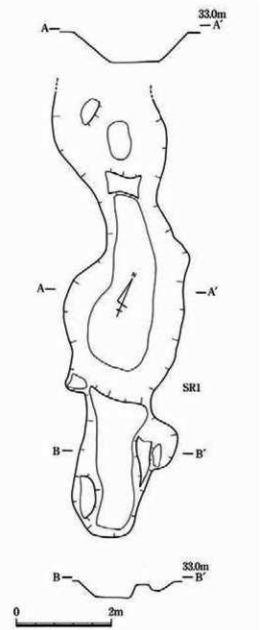
図示したものは須恵器の鉢（315）である。

(7) 下層の遺構・自然流路（SR）

SR1（第52図）

調査区（Ⅰ区下段）の南側（L9・10／M10・11グリッド）に位置する。北端は未検出である。検出高は北端で32.95m、南端で32.90mを測る。主軸方向はN-23°-Wで、ほぼ直線状に検出している。SD10に切られ、SR3を切っている。検出規模は9.52×2.00m、床面高は北端で32.62m、南端で32.38mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、最深部で68cmを測る。

遺物は出土していない。



第52図　SR1　平面・エレベーション図（S=1/80）

SR2（第53図）

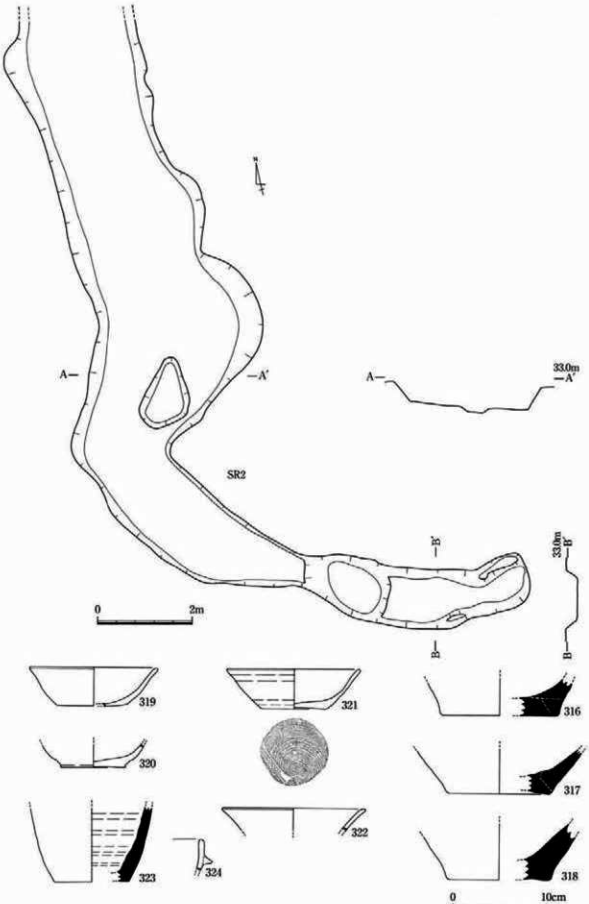
調査区（Ⅰ区下段）の南側（J8・9・10／K8・9・10・／L10・11グリッド）に位置する。北端は未検出である。検出高は北端で32.88m、東端で32.93mを測る。主軸方向は北端からN-6°-Wで約11.5m検出し、N-73°-Wで東端を東へ振る。SR3を切っている。検出規模は21.60×1.76m、床面高は東端で32.63m、北端は不明である。断面形態は逆台形状を呈し、最深部で59cmを測る。埋土は灰褐色砂である。

遺物は弥生土器片13点と石包丁の未製品1点を出土している。他に口縁・底部（回転糸切り）を含む土師器片20点と、須恵器片1点、瓦質土器片（羽釜）12点を出土している。土師器片の多くは摩耗しており、瓦質土器片（羽釜）は1個体分の可能性が考えられる。

図示したものは弥生土器の底部（316～318）、土師器の坏（319～322）、須恵器の壺（323）、瓦質土器の羽釜（324）であるが、土師器・須恵器・瓦質土器片の多くは検出面直上より出土しており、遺構に伴わない可能性が考えられる。切り合い関係や出土遺物等から、時期が大きく遡る可能性を含んでいる遺構である。

SR3（第54図）

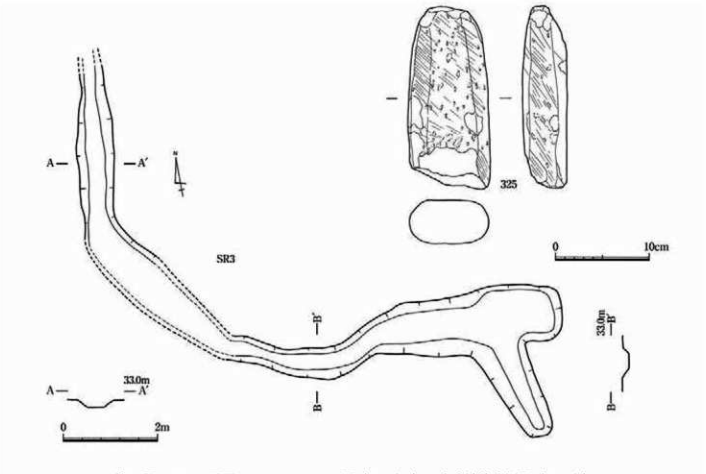
調査区（Ⅰ区下段）の南側（K9・10・11／L10・11／M10・11グリッド）に位置する。北端は未検出である。検出高は北端で32.81m、東端で32.64mを測る。主軸方向は北端からN-6°-Eで約3.5m検出し、N-88°-Wで東端を東へ振る。SR1・2に切られている。検出規模は12.48×0.54m、床面高は



第53図　SR2　平面・エレベーション図（S=1/80）　出土遺物実測図（S=1/4）

北端で32.76m、東端で32.57mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、最深部で25cmを測る。埋土は灰茶褐色砂である。

遺物は弥生土器片（底部）2点を出土している。図示したものは弥生時代の石斧（325）である。切り合い関係や遺物等から弥生時代の溝状遺構の可能性が考えられる。



第54図　SR3　平面・エレベーション図（S=1/80）　出土遺物実測図（S=1/4）

(6) 包含層出土遺物

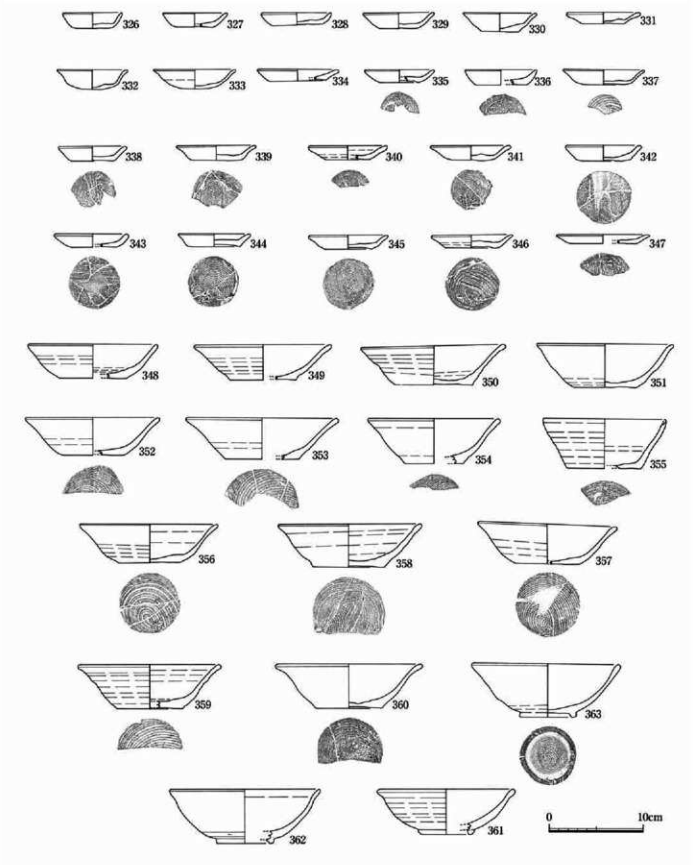
当遺跡の包含層出土遺物は、土師器・須恵器片を中心にコンテナケース約10箱分を出土しており、土師器片の多くは摩耗している。包含層出土遺物に層位による時期差を看取できなかったため、当稿においては包含層一括資料として扱い、器種ごとに分類し、図示し得た個々の遺物の特徴を概説していくこととする。

土師器（小皿・坏・椀・甕）

小皿（第55図）

326～347は小皿である。全て回転糸切りで、口径5.5～9.4cm、器高0.9～2.1cm、底径4.0～7.0cmを測る。

326はⅥ～Ⅶ層から出土し、口径6.2cm、器高1.7cm、底径4.4cmを測る。色調は浅黄橙色で赤色風化礫を含んでおり、全体的に摩耗している。327はⅠ区のⅤ～Ⅵ層から出土し、口径5.5cm、器高1.5cm、底径4.0cmを測る。色調はにぶい橙色で赤色風化礫を含み、内外面横ナデ、平行圧痕が認められる。328はⅫ層から出土し、口径7.2cm、器高1.4cm、底径5.2cmを測り、色調は浅黄橙色でチャートの粗粒砂を含んでおり、全体的に摩耗している。329は口径7.4cm、器高1.7cm、底径4.0cmを測り、色調は浅黄橙色でチャート、赤色風化礫の細・粗粒砂を含んでおり、全体的に摩耗している。330は口径7.6cm、器高2.0cm、底径4.0cmを測り、色調は浅黄橙色でチャート、赤色風化礫の細・粗粒砂を含んでおり、全体的に摩耗している。331はⅣ～Ⅴ層から出土し、口径7.5cm、器高1.2cm、底径4.5cmを測る。色調は浅黄橙色で赤色風化礫の粗粒砂を含む。332は口径7.2cm、器高2.1cm、底径5.0cmを測り、色調は浅黄橙色で精選された胎土を用い、平行圧痕が認められる。333はⅣ～Ⅴ層から出土し、口径8.4cm、器高2.1cm、底径5.0cmを測る。色調は灰白色で精選された胎土を用い、平行圧痕が認められる。334は口径8.4cm、器高1.5cm、底径6.0cmを測り、色調は灰白色で内外面に横ナデが認められる。335はⅢ～Ⅳ層から出土し、口径は7.2cm、器高1.3cm、底径4.2cmを測る。色調はにぶい橙色で精選された胎土を用いている。336はⅦ～Ⅷ層から出土し、口径は7.4cm、器高1.6cm、底径5.5cmを測る。色調はにぶい橙色で精選された胎土を用いている。337はⅣ～Ⅴ層から出土し、口径8.4cm、器高1.6cm、底径4.0cmを測る。色調は浅黄橙色で精選された胎土を用いている。338はⅢ～Ⅳ層から出土し、口径7.0cm、器高1.6cm、底径4.6cmを測る。色調は灰白色で精選された胎土を用い、平行圧痕が認められる。339はⅣ～Ⅴ層から出土し、口径8.0cm、器高1.6cm、底径5.4cmを測る。色調は灰白色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデ、平行圧痕が認められる。340はⅦ～Ⅷ層から出土し、口径8.2cm、器高1.5cm、底径4.6cmを測る。色調は橙色でチャートの粗粒砂を含み、平行圧痕が認められる。341はⅣ～Ⅴ層から出土し、口径8.2cm、器高1.7cm、底径4.5cmを測る。色調は精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められる。342は口径7.6cm、器高1.7cm、底径5.6cmを測り、色調は浅黄橙色でチャートの粗粒砂を含み、平行圧痕が認められる。343はⅣ～Ⅴ層から出土し、口径7.5cm、器高1.5cm、底径4.8cmを測る。色調は浅黄橙色でチャート他の粗粒砂を含み、内外面横ナデ、平行圧痕が認められる。344はⅣ～Ⅴ層から出土し、口径7.3cm、器高1.4cm、底径5.4cmを測る。色調は灰白色で精選された胎土を用いている。345はⅣ～Ⅴ層から出土し、口径8.0cm、器高1.5cm、底径5.0cmを測る。色調は灰白色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められる。346はⅨ層から出土し、口径8.3cm、器高1.4cm、



第55図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図１（S=1/4）

底径5.5cmを測る。色調は灰白色で細粒砂を含み、内外面横ナデ、平行圧痕が認められる。347は口径9.4cm、器高0.9cm、底径7.0cmを測り、色調は灰白色で精選された胎土を用い、平行圧痕が認められる。

坏（第55図）

348～360は坏であり、364～378は底部である。全て回転糸切りで、口径13.4～15.6cm、器高3.6～5.3cm、底径5.4～8.2cmを測る。

348はⅦ～Ⅷ層から出土し、口径13.4cm、器高3.6cm、底径7.2cmを測る。色調はにぶい赤橙色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められる。全体的に摩耗している。349はⅥ～Ⅶ層から出土し、口径14.0cm、器高3.7cm、底径7.0cmを測る。色調は浅黄橙色で赤色風化礫の細粒砂を含み、内外面に横ナデが認められる。350はⅣ～Ⅴ層から出土し、口径14.9cm、器高4.4cm、底径8.2cmを測る。色調は浅黄橙色でチャート他の粗・細粒砂を含み、内外面横ナデ、内面に右から左のケズリが認められ、外面が煤けている。351は口径14.2cm、器高4.6cm、底径6.8cmを測り、色調は浅黄橙色でチャート他の細・粗粒砂を含み、内外面に横ナデが認められる。全体的に摩耗している。352はⅣ～Ⅴ層から出土し、口径13.8cm、器高4.0cm、底径6.8cmを測る。色調は浅黄橙色で赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含み、内外面に横ナデが認められる。全体的に摩耗している。353はⅢ～Ⅳ層から出土し、口径15.6cm、器高4.3cm、底径7.8cmを測る。色調は浅黄橙色でチャートの細粒砂を含み、内外面横ナデ、外底に籾圧痕が認められる。354は口径13.6cm、器高4.7cm、底径6.2cmを測り、色調は浅黄橙色で精選された胎土を用い、内面に右から左のケズリ・横ナデが認められる。355は口径不明で、器高5.3cm、底径7.8cmを測り、色調はにぶい橙色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められ、内外面が煤けている。356はⅣ～Ⅴ層から出土し、口径14.3cm、器高4.2cm、底径6.6cmを測る。色調は浅黄橙色でチャートの細・粗粒砂を含み、内面に右から左のケズリが認められる。357はⅫ層から出土し、口径14.3cm、器高4.6cm、底径7.0cmを測り、色調はにぶい橙色でチャートの細粒砂を含み、内外面に横ナデが認められる。358はⅣ～Ⅴ層から出土し、口径14.8cm、器高4.6cm、底径7.7cmを測る。色調は灰白色で赤色風化礫の細粒砂を含み、内外面横ナデ、平行圧痕が認められる。359は口径14.8cm、器高4.7cm、底径7.0cmを測り、チャートの細粒砂を含み、内外面に横ナデが認められる。360は口径15.0cm、器高4.7cm、底径7.0cmを測り、色調は灰白色でチャート、赤色風化礫の細・粗粒砂を含み、内外面に横ナデが認められる。全体的に摩耗している。364は底径6.4cmを測り、色調はにぶい橙色でチャートの細・粗粒砂を多く含んでいる。365はⅣ～Ⅴ層から出土し、底径5.4cmを測り、色調は灰白色で細粒砂を多く含んでおり、全体的に摩耗している。366はⅣ～Ⅴ層から出土し、底径6.0cmを測る。色調は灰白色で精選された胎土を用い、平行圧痕が認められる。全体的に摩耗している。367はⅣ～Ⅴ層から出土し、底径7.4cmを測る。色調は浅黄橙色でチャートの細粒砂を含み、内外面に横ナデが認められ、全体的に摩耗している。368は底径7.0cmを測り、色調は橙色でチャートの粗粒砂を含んでいる。全体的に激しく摩耗している。369はⅥ～Ⅶ層から出土し、底径7.7cmを測る。色調は浅黄橙色でチャートの細・粗粒砂を含み、内外面に横ナデが認められる。370は底径6.0cmを測り、色調は浅黄橙色で精選された胎土を用い、円盤状高台が認められる。全体的に摩耗している。371はⅢ～Ⅳ層から出土し、底径6.4cmを測る。色調は浅黄橙色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められ、全体的に摩耗している。373はⅥ層から出土し、底径6.4cmを測る。色調は灰白色でチャートの細粒砂

を含んでおり、全体的に摩耗している。374はⅦ～Ⅷ層から出土し、底径7.0cmを測る。色調は浅黄橙色で赤色風化礫の細・粗粒砂を含み、内外面に横ナデが認められる。全体的に摩耗している。375はⅥ層から出土し、底径5.2cmを測る。色調は灰白（乳白）色で精緻な胎土を用いている。未製品の可能性が考えられる。376はⅦ～Ⅷ層から出土し、底径6.3cmを測る。色調は灰白（黄灰）色で精緻な胎土を用いている。377はⅣ～Ⅴ層から出土し、底径5.3cmを測る。色調は灰白（乳白）色で精緻な胎土を用い、石英粒を含んでいる。378はⅣ～Ⅴ層から出土し、底径5.0cmを測る。色調は灰白（乳白）色で精緻な胎土を用いている。

椀（第55・56図）

361～363は椀であり、379～396は底部である。円盤状高台を有するものは回転糸切り痕が認められる。口径14.0～15.6cm、器高4.8～5.8cm、底径5.0～7.5cmを測る。

361はⅥ～Ⅶ層から出土し、口径14.0cm、器高4.8cm、底径5.4cmを測る。色調は浅黄橙色で石英、赤色風化礫を含み、内外面に丁寧な横ナデ、外面に回転ナデの痕跡が顕著に認められ、丸みを帯びた貼り付け高台を有している。全体的に摩耗している。362はⅨ層から出土し、口径15.6cm、器高5.7cm、底径6.0cmを測る。色調は浅黄橙色で精選された胎土を用い、長石、石英を含み、内面右から左のケズリと丁寧な横ナデが認められ、断面台形の貼り付け高台を有している。搬入品と考えられる。363はⅨ層から出土し、口径15.2cm、器高5.8cm、底径6.1cmを測る。色調はにぶい黄橙色で石英粒を多く含み、内面はケズリと丁寧な横ナデが認められ、口縁部は肥厚し、断面長方形のしっかりした高台を有している。379はⅤ層から出土し、底径5.6cmを測る。色調は浅黄橙色で赤色風化礫を含み、内外面に横ナデが認められる。全体的に摩耗している。380はⅥ層から出土し、底径5.7cmを測る。色調は浅黄橙色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められ、高台は扁平化している。全体的に摩耗している。381はⅢ層から出土し、底径は7.2cmを測る。色調はにぶい黄橙色で雲母、石英粒を多く含み、内外面にヘラミガキが認められ、断面台形状のしっかりした高台を有している。搬入品と考えられる。382はⅤ層から出土し、底径6.0cmを測る。色調は浅黄橙色でチャートの細粒砂を多く含み、円盤状高台を有している。全体的に激しく摩耗している。383はⅣ層から出土し、底径5.6cmを測る。色調は浅黄橙色で赤色風化礫の細粒砂を含み、円盤状高台を有している。全体的に摩耗している。384はⅣ～Ⅴ層から出土し、底径7.5cmを測る。色調は浅黄橙色で細粒砂を含み、円盤状高台を有している。内面が煤けており、全体的に摩耗している。385はⅣ～Ⅴ層から出土し、底径5.5cmを測る。色調は浅黄橙色で精選された胎土を用い、内面にヘラミガキが認められ、円盤状高台を有している。全体的に摩耗している。386はⅢ～Ⅳ層から出土し、底径6.6cmを測る。色調は浅黄橙色でチャートの細粒砂を多く含み、円盤状高台を有している。全体的に摩耗している。387は底径6.0cmを測り、色調は浅黄橙色でチャートの粗粒砂を含み、円盤状高台を有している。内外面が煤けており、全体的に摩耗している。388は底径6.0cmを測り、色調は浅黄橙色でチャートの粗粒砂を含み、円盤状高台を有している。全体的に摩耗している。389はⅤ層から出土し、底径6.4cmを測る。色調は褐灰色で精選された胎土を用い、円盤状高台を有している。内外面が煤けており全体的に摩耗している。390は底径5.9cmを測り、色調は浅黄橙色で精選された胎土を用い、内面にヘラミガキが認められ、円盤状高台を有している。全体的に摩耗している。391はⅦ～Ⅷ層から出土し、底径は6.6cmを測る。色調は浅黄

橙色でチャートの細・粗粒砂を多く含み、円盤状高台を有している。全体的に摩耗している。392はⅫ層から出土し、底径5.6cmを測る。色調は浅黄橙色で精選された胎土を用い、内面にヘラミガキが認められ、円盤状高台を有している。全体的に摩耗している。393はⅢ～Ⅳ層から出土し、底径6.0cmを測る。色調は浅黄橙色で赤色風化礫の細粒砂を多く含み、円盤状高台を多く有している。全体的に摩耗している。394はⅣ～Ⅴ層から出土し、底径6.0cmを測る。色調はにぶい黄橙色で精選された胎土を用いており、全体的に摩耗している。395はⅦ～Ⅷ層から出土し、底径6.6cmを測る。色調はにぶい黄橙色で赤色風化礫を多く含んでおり、全体的に摩耗している。396は底径5.4cmで色調は浅赤橙色で赤色風化礫の粗粒砂を含んでおり、全体的に激しく摩耗している。

甕（第56図）

397～399は甕である。古代からの長胴甕の系譜を引く煮炊具と考えられる。

397はⅦ～Ⅷ層から出土し、口径25.0cmを測る。色調はにぶい赤褐色で石英、長石の細・粗粒砂を多く含み、口縁部内外面に横ナデが認められ、口唇部は凹状を呈している。398はⅥ層から出土し、口径30.6cmを測る。色調は浅黄橙色でチャート他の粗粒砂を多く含み、口縁部内外面に横ナデが認められ、頸胴部境に凹状の段を有している。399はⅣ～Ⅴ層から出土し、口径36.0cmを測る。色調は橙色で石英、長石他の細粒砂を多く含み、口縁部内外面に横ナデが認められ、口唇部は凹状を呈している。

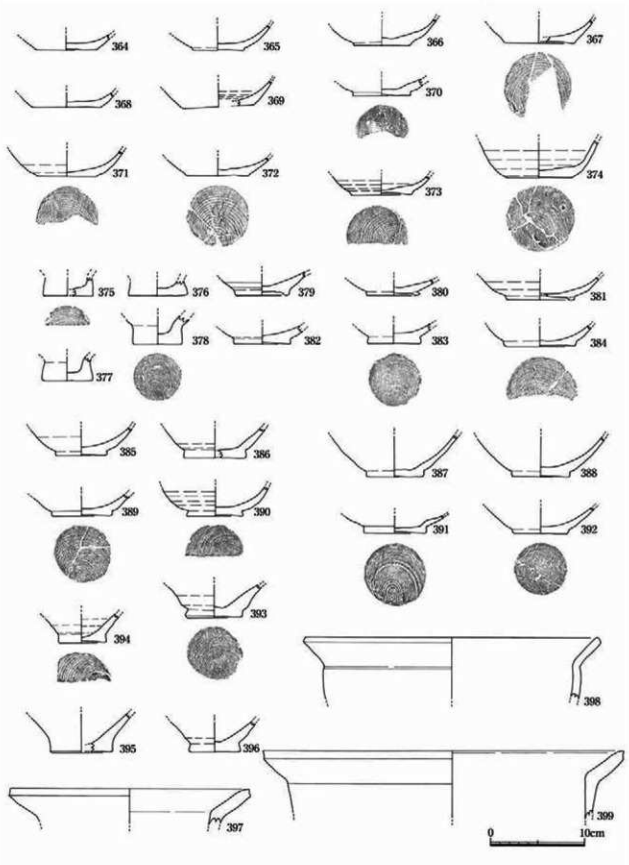
須恵器（椀・壺・甕・鉢・水注）

椀（第57図）

400～405は椀である。400はⅨ層から出土し、口径15.3cm、器高6.1cm、底径5.5cmを測る。色調は灰白色でチャートの細・粗粒砂を含み、内外面をケズリ、丁寧な横ナデが認められ、内面にヘラミガキを施した可能性がある。しっかりした方形高台を有している。401はⅢ～Ⅳ層から出土し、口径16.4cmを測る。色調は灰色で精選された胎土を用い、外面にケズリと横ナデ、内面に横ナデが認められる。内外面上半部に自然釉がかかる。402はⅦ～Ⅷ層から出土し、底径3.6cmを測る。色調は灰色で精選された胎土を用い、外面にケズリと横ナデ、内面にミガキが認められ、底部は回転糸切りである。403は底径6.0cmを測り、色調は灰色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められる。厚い円盤状高台を有し、底部は回転糸切りである。404はⅣ層から出土し、底径6.0cmを測る。色調はにぶい黄橙色で精選された胎土を用い、黄茶色に発色し、外面に横ナデ、内面にミガキが認められ、平行圧痕が残る。底部は回転糸切りで、火襷がみられる。405はⅦ～Ⅷ層から出土し、底径6.0cmを測る。色調は灰色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められ、底部は回転糸切りである。

壺（第57図）

408～410は壺である。408はⅦ～Ⅷ層から出土し、口径8.7cmを測る。色調は灰色で精選された胎土を用い、上胴部から内傾し、内外面に丁寧な横ナデが認められる。409はⅢ～Ⅳ層から出土した高杯の脚部である。色調は灰色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められる。全体的に摩耗している。410はⅦ～Ⅷ層から出土し、底径8.0cmを測る。色調は灰色で精選された胎土を用い、外面に弱いケズリと横ナデ、内面にナデ調整が認められる。



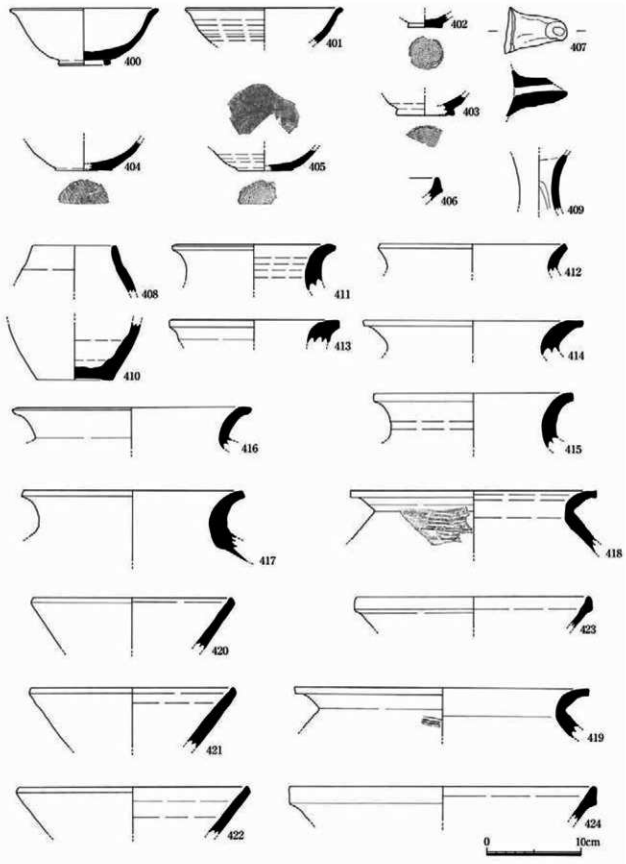
第56図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図２（S=1/4）

甕（第57・58図）

411～419は口縁部、427～431は底部である。411はⅤ層から出土し、口径24.0cmを測る。色調は灰色で粗粒砂を少量含み、内外面に横ナデが認められる。412はⅣ～Ⅴ層から出土し、口径17.3cmを測る。色調は灰色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められる。自然釉がみられる。413はⅡ層から出土し、口径18.0cmを測る。色調は灰色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められる。内面に自然釉がかかる。414は口径19.6cmを測り、色調は灰色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められ、口唇部は鋭く面を取る。内外面に自然釉がかかる。415は口径21.0cmを測り、色調は外面が灰褐色、内面が暗赤褐色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められる。外面と口縁端部に自然釉がかかる。416は口径23.0cmを測り、色調は灰色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められる。417はⅥ層から出土し、口径23.0cmを測る。色調は灰色で粗粒砂を多く含み、内外面に横方向のケズリと横ナデ、外面に横ナデが認められる。内外面に自然釉がかかる。418はⅣ～Ⅴ層から出土し、口径26.0cmを測る。色調は灰色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデ、胴部外面に平行タタキが認められる。419はⅢ～Ⅳ層から出土し、口径31.0cmを測る。色調は灰色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデ、胴部外面に平行タタキが認められ、口唇部は凹状を呈している。外面に自然釉がかかる。427はⅢ～Ⅳ層から出土し、底径12.2cmを測る。色調は外面が青灰色、内面が暗灰黄色で石英他の細・粗粒砂を多く含み、外面に左から右方向のケズリ、内面にナデ調整が認められる。外底に砂粒が多くみられる。428はⅤ層から出土し、底径12.6cmを測る。色調は灰色で精選された胎土を用い、外面に左から右方向のケズリ、内面にナデ調整が認められる。外底に砂粒が多くみられる。429はⅤ層から出土し、底径12.6cmを測る。色調は外面が浅黄橙色、内面が灰褐色でチャート他の粗粒砂を多く含み、外面にケズリと横ナデ、内面にナデ調整が認められる。外底に砂粒が多くみられる。430はⅦ層から出土し、底径11.0cmを測る。色調は灰色でチャート他の粗粒砂を含み、外面に左から右方向のケズリ、平行タタキが認められ、内面にナデ調整がみられる。底部は剥離している。431はⅣ～Ⅴ層から出土し、底径18.0cmを測る。色調は外面が暗赤褐色、内面が灰色で精選された胎土を用い、外面に自然釉がかかる。

鉢・他（第57図）

406・420～426は鉢（捏鉢）である。406はⅦ～Ⅷ層から出土し、色調は灰色で細・粗粒砂を含み、内外面に横ナデが認められる。東播系捏ね鉢と考えられる。420はⅣ～Ⅴ層から出土し、口径21.0cmを測る。色調は外面がにぶい赤褐色、内面が灰白色で焼成は堅緻である。内外面に横ナデが認められ、口縁端部は僅かに摘み上げ口唇部は面を取り、内面は白色化した自然釉がみられる。421は口径21.2cmを測り、色調は外面がにぶい赤橙色、内面が灰白色で焼成は堅緻であり、外面は茶色に発色している。内外面に横ナデが認められ、口縁端部は僅かに摘み上げ口唇部は面を取り、内面は白色化した自然釉がみられる。422はⅤ層から出土し、口径24.0cmを測る。色調は外面がにぶい赤橙色、内面が灰色で焼成は堅緻であり、外面は茶色に発色している。内外面に横ナデが認められる。東播系捏ね鉢を模倣した可能性が考えられる。423はⅦ～Ⅷ層から出土し、口径24.4cmを測る。色調は灰色で粗粒砂を含み、内外面に横ナデが認められ、重ね焼き痕がみられる。口唇部に自然釉がみられる。東播系捏ね鉢と考えられる。424は口径32.0cmを測り、色調は灰色で胎土は精緻である。内外面に横



第57図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図３（S=1/4）

ナデが認められ、口唇部外面上半に重ね焼き痕がみられる。東播系捏ね鉢と考えられる。425は底径10.4cmを測り、色調は灰色で粗粒砂を多く含み、内外面に横ナデが認められる。亀山窯の可能性が考えられる。426は底径11.0cmを測り、色調は灰色で粗粒砂を含み、内外面に横ナデ、外面の下地にケズリが認められる。亀山窯の可能性が考えられる。

407は水注の注口部で色調は褐灰色で精選された胎土を用い、注口端部は鋭く削いでいる。体部接合部から剥離し、外面に自然釉がかかる。

瓦器（小皿・椀）

小皿（第58図）

432はⅦ～Ⅷ層から出土し、口径9.0cm、器高1.9cmを測る。色調は暗灰色でチャート、頁岩の細・粗粒砂を含み、内面にナデ調整、外面に指頭圧痕が認められる。

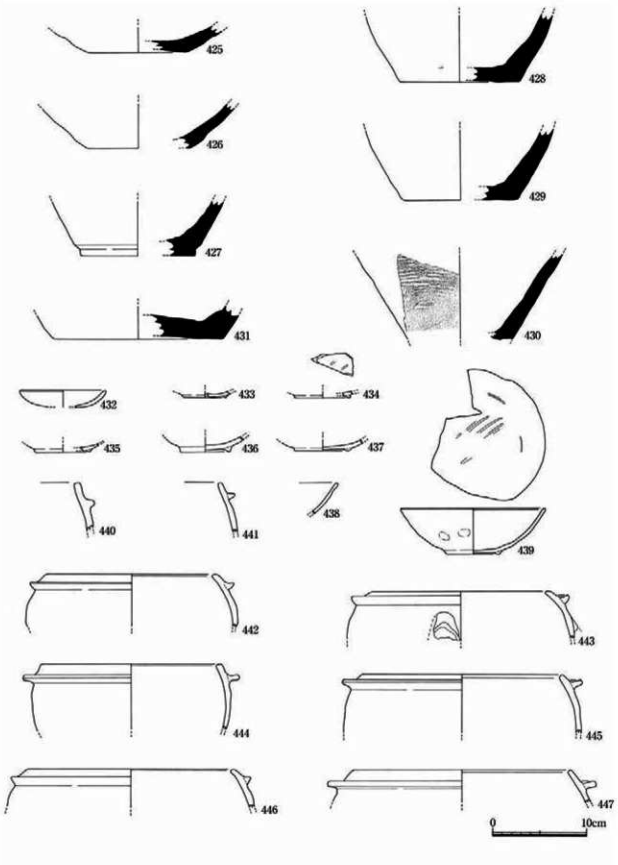
椀（第58図）

433～439は瓦器椀である。433はⅢ～Ⅳ層から出土し、底径4.6cmを測る。色調は灰色で精選された胎土を用い、断面三角形の貼り付け高台を有している。434はⅨ層から出土し、底径6.0cmを測る。色調は灰色で精選された胎土を用い、内面にヘラミガキが認められ、しっかりした外方に踏ん張る高台を有している。435はⅢ～Ⅳ層から出土し、底径5.8cmを測る。色調は黄灰色で精選された胎土を用い、断面三角形の貼り付け高台を有している。436は底径5.2cmを測り、チャートの粗粒砂を含み、内面に籾圧痕が認められ、断面三角形の貼り付け高台を有している。437はⅡ層から出土し、底径6.0cmを測る。色調は暗灰色でチャートの細・粗粒砂を多く含み、断面蒲鉾状の高台を有している。438の色調は暗灰色で、口縁部に横ナデ、内面にヘラミガキが認められ、外面に指頭圧痕がみられる。439はⅢ～Ⅳ層から出土し、口径15.2cm、器高4.9cm、底径5.6cmを測る。色調は暗灰色で精選された胎土を用い、外面口縁端部は横ナデが認められ、体部内面に横方向のヘラミガキ、内底は一定方向のヘラミガキがみられる。断面は丸みを帯びた三角状の高台を有している。

瓦質土器（羽釜・鉢）

羽釜・鍋（第58・59図）

440～447は羽釜である。440の色調は灰色でチャートの粗粒砂を多く含み、口唇部は面を取り、断面蒲鉾状の鍔で、鍔の上下口縁部に横ナデ、胴部外面に指頭圧痕が認められる。441の色調は暗灰色でチャート他の細・粗粒砂を含み、口唇部は丸みを帯び、断面三角形のしっかりした鍔で、鍔の上下口縁部に横ナデが認められる。外面が煤けている。442はⅢ～Ⅳ層から出土し、口径18.0cmを測る。色調はオリーブ黒色で口唇部は丸みを帯び、断面三角形のしっかりした鍔で、胴部外面に指頭圧痕が認められる。外面が煤けている。443はⅢ～Ⅳ層から出土し、口径18.6cmを測る。色調は黒色でチャートの粗粒砂を多く含み、口唇部は丸みを帯び、断面三角形の鍔で器表は激しく荒れている。三足鍋の脚は付け根が剥離している。外面が煤けている。444はⅫ層から出土し、口径19.0cmを測る。色調は外面が黒褐色、内面が灰黄色でチャートの粗粒砂を多く含み、口唇部は面を取り1.4cm幅の鍔で、鍔の上下口縁部に横ナデ、胴部内外面にナデ調整が認められる。外面が激しく煤けている。445はⅦ～Ⅷ層から出土し、口径21.2cmを測る。色調は外面が灰褐色、内面が灰色でチャート他の粗粒砂を多く含み、口唇部は面を取り、1.0cm幅の鍔で、鍔の上下口縁部に横ナデ、胴部内外面にナデ調整



第58図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図4（S=1/4）

が認められる。外面が煤けている。446はⅦ～Ⅷ層から出土し、口径22.0cmを測る。色調は外面が暗灰色、内面が灰白色で口唇部は丸みを帯び、断面三角形の鍔で器表は荒れている。447はⅦ～Ⅷ層から出土し、口径23.0cmを測る。色調は外面が灰色、内面が灰白色で口唇部は丸みを帯び、1.1cm幅の鍔で、胴部内外面にナデ調整が認められる。448はⅤ層から出土し、口径18.5cmを測る。色調は灰白色でチャート他の細粒砂を含み、口唇部は丸く収める。内外面にナデ調整、胴部外面に指頭圧痕が認められる。449はⅥ層から出土し、口径17.0cmを測る。色調は灰白色でチャートの細・粗粒砂を含み、口唇部は面を取り、内面にナデ調整、同部外面に指頭圧痕が認められ、外面が煤けている。450はⅤ層から出土し、口径18.0cmを測る。色調は外面が暗灰色、内面が灰色で精選された胎土を用い、口縁部内外面に横ナデ、胴部外面に指頭圧痕が認められ、外面が煤けている。448～450は「土佐型」の鍋と考えられる。451はⅢ～Ⅳ層から出土し、色調は外面が黒色、内面が暗灰色でチャートの粗粒砂を多く含み、外面が激しく煤けている。三足鍋の脚部の付け根である。452はⅦ～Ⅷ層から出土し、色調は外面が暗灰色、内面が灰色でチャートの細・粗粒砂を多く含み、ナデ調整が認められる。三足鍋の脚部である。453はⅦ～Ⅷ層から出土し、色調は暗灰色でチャートの細・粗粒砂を多く含み、外面が煤けている。三足鍋の脚部で付け根部分から剥離している。

鉢（第59図）

454は鉢である。Ⅲ～Ⅳ層から出土し、口径19.6cmを測る。色調は外面が灰白色、内面が灰色で細・粗粒砂を含み、口唇部は面を取り、外面は右から左方向のケズリとナデ調整、内面に横ナデが認められる。捏ね鉢と考えられる。

白磁（第59図）

455・456は壺、457～460は皿、461～479は碗である。

青磁（第60図）

480は皿か坏で、481～505は碗、506～508は皿である。

染付（青花）（第60図）

509・510は碗である。

瀬戸（第60図）

511・512は皿である。

備前（第60図）

513・514は擂り鉢である。

瓦（第61図）

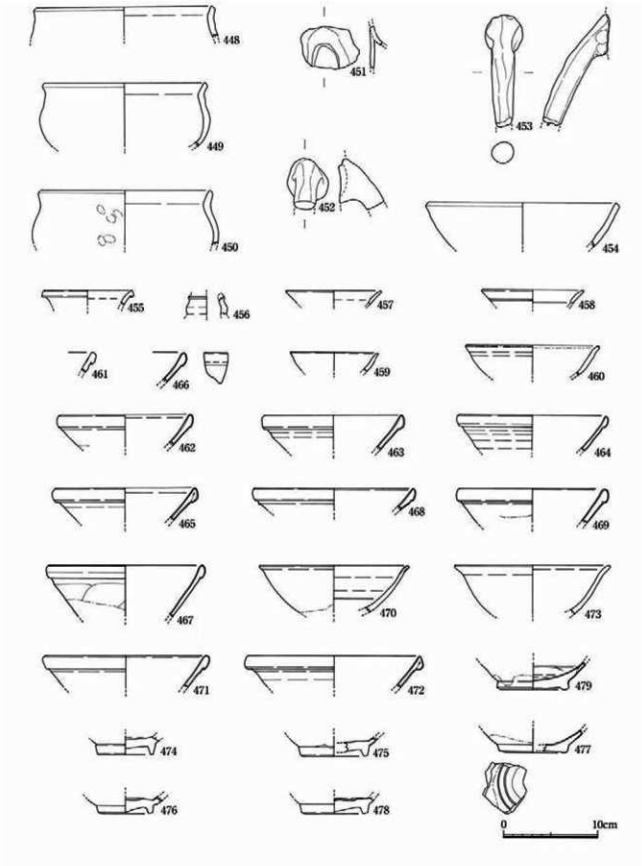
520は平瓦、521は軒丸瓦である。

石製品・石器（石鍋・硯・石鏃）（第61図）

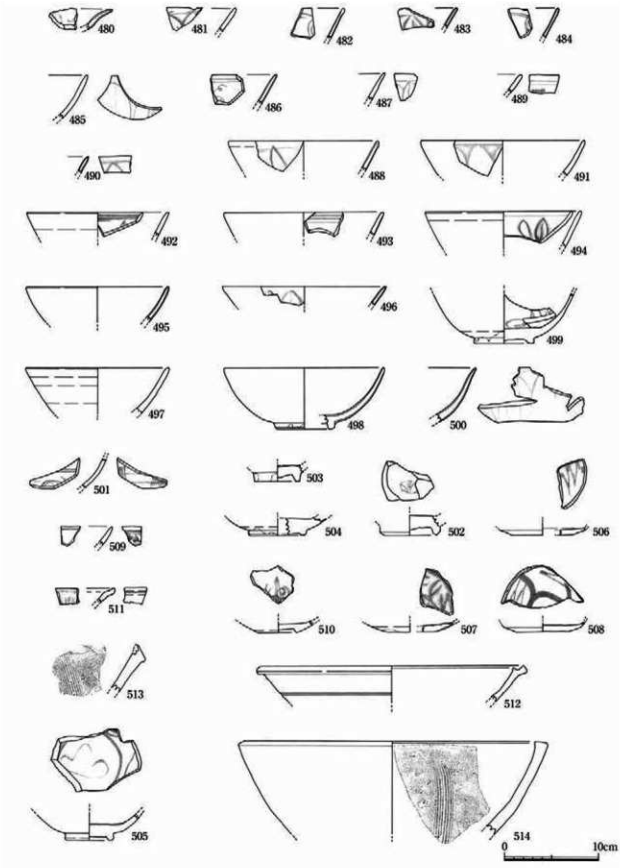
515～519は石鍋である。519の底部は2ヶ所穿孔されており、温石として転用されたと考えられる。522は硯、523は石鏃である。

鉄製品（第61図）

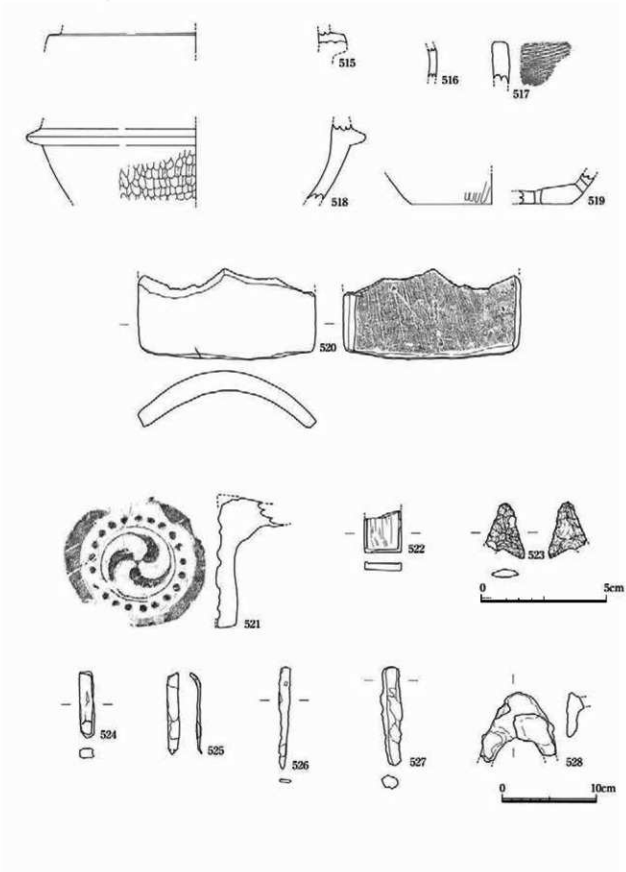
524～528は鉄製品である。



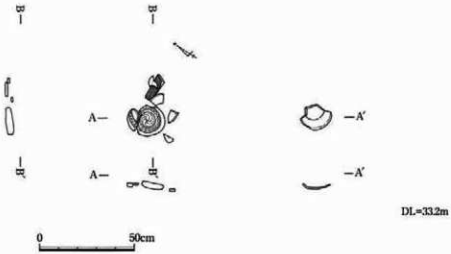
第59図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図5（S=1/4）



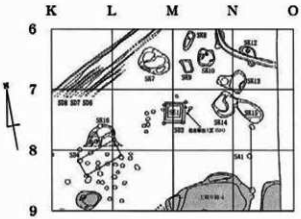
第60図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図6（S=1/4）



第61図　Ⅰ区包含層出土遺物実測図7（S=1/4、2/3）
※S=2/3は、523のみ



第62図　Ⅰ区包含層出土遺物（S=1/20）521・軒丸瓦出土状況及び位置図（S=1/250）



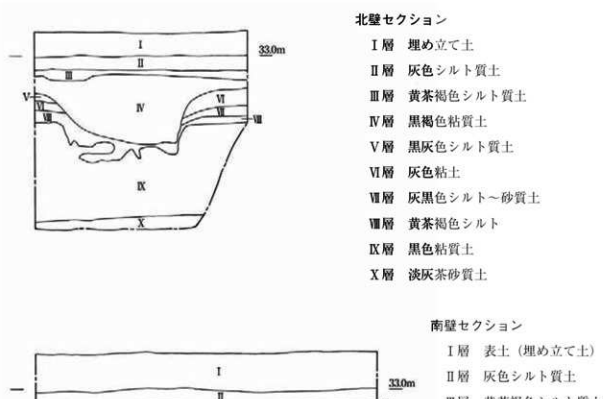
第２節　Ⅱ区

Ⅱ区はⅠ区の東側に隣接している。検出面標高は、Ⅰ区が32.8mから34.5mであるのに対し、Ⅱ区は32.5mから32.6mと一段低い場所に立地している。

１．基本層序

調査区の北壁と南壁で土層の堆積状況を確認した。基本層序は以下のとおりであり、北壁セクションと南壁セクションを第63図に示した。

Ⅰ層　表土（埋め立て土）
Ⅱ層　旧耕作土
Ⅲ層　基盤
Ⅳ層　流れ込みの層
Ⅴ層　遺構検出面



第63図　Ⅱ区北壁・南壁セクション図（S=1/50）

2．遺構と遺物

Ⅱ区からは13条の溝状遺構が検出されている。その中でSD15～23の10条には遺構名を付した（第64図）。遺構及び包含層からは平安時代末～20世紀はじめにかけての遺物が出土している。遺物包含層はⅢ層とⅣ層である。

遺物の出土が確認された溝はSD15～19・22・23であるが、いずれも近世以降の遺物を含んでおり、遺構形成時期は近世以降である。

(1) 溝（SD）

調査時点の所見では、溝は大きく3形態に分類されている。SD15・19は直線的な溝であり、溝の底には山石が敷かれるという特徴を持つ。2条の溝ともⅣ層を掘り込んで形成されている。溝の底に敷かれていた石がSD15では山石だけなのに対し、SD19では山石の上部に小さなクリ石を敷き詰めてあったという。これに対しSD22は大きく弧状に屈曲している溝であり、溝の両肩部分に杭が打たれており、溝に沿って数十本の杭跡が確認されている。埋土は黄灰色砂質土であり、近世以降の遺物を含むことから比較的新しい時期に機能した溝だと考えられている。SD16～18・23は同時期のもので人為的に掘られた溝だと考えられている。ともに埋土が灰色シルト質～砂質土（Ⅳ層）である。近世以降の遺物を含むが、遺構埋土よりSD15・19に先行する時期のものだと考えられる。

SD15（第64・65図）

調査区（Ⅱ区）の東側（O14／P13・14／Q12・13／R12グリッド）に位置する。東端はSD14と接続している。検出高は東端で32.49m、西端で32.56mを測る。主軸方向はN-62°-Eで、ほぼ直線状に検出している。検出規模は15.8×0.30m、床面高は東端で32.19m、西端で32.28mを測る。断面形態は箱形状を呈し、最深部で30cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトである。

遺物は土師器片1点と、須恵器片1点、焼成不良を含む瓦片（布目痕）3点、白磁片（Ⅴ類）1点を出土している。図示したものは土師器の坏（530・531）、白磁の碗（529）であるが、床面に礫（山石）が敷き詰められ、また古代～近代の包含層を切っていることなどから、近代以降の暗渠の可能性が考えられる遺構である。

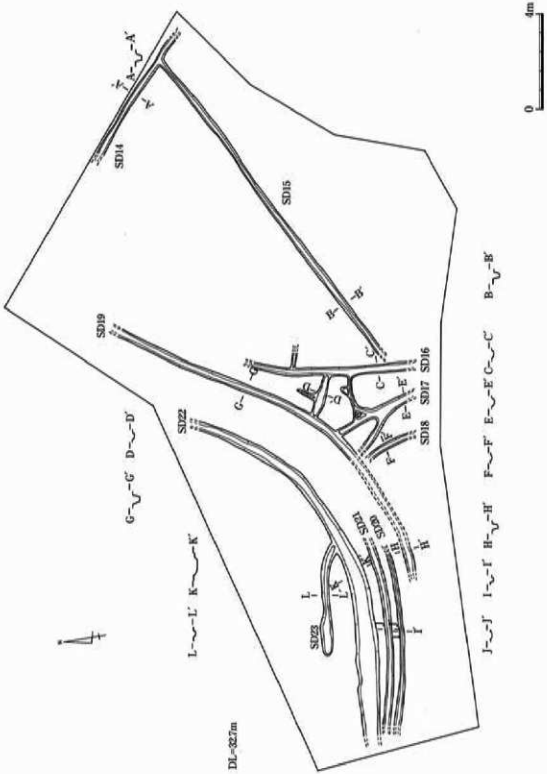
SD16（第64図）

調査区（Ⅱ区）の中央（O13・14グリッド）に位置する。南端はTRに切られている。検出高は北端で32.58m、南端で32.53mを測る。主軸方向はN-7°-Eで、ほぼ直線状に検出している。小規模な溝状遺構との切り合い関係については不明である。検出規模は6.80×0.37m、床面高は北端で32.55m、南端で32.45mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、最深部で13cmを測る。埋土は灰褐色砂質シルト（灰色シルト質砂）である。

遺物は底部を含む土師器片11点と、須恵器片1点を出土しており、土師器片の多くは摩耗している。他に混入と考えられる弥生土器片1点を出土している。

SD17（第64・65図）

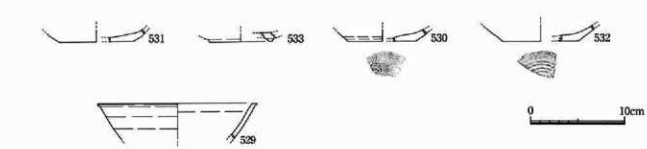
調査区（Ⅱ区）の中央南側（N14グリッド）に位置する。南端はTRに切られており、北端はSD19と切り合い、検出を終えている。検出高は北端で32.61m、南端で32.56mを測る。主軸方向はN-18°-Wで、ほぼ直線状に検出している。小規模な溝状遺構との切り合い関係については不明である。検



第64図　Ⅱ区全体図及び溝状遺構　平面・エレベーション図（S=1/160）

出規模は3.27×0.30m、床面高は北端で32.41m、南端で32.42mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、最深部で21cmを測る。埋土は灰褐色砂質シルト（灰色シルト質砂）である。

遺物は口縁・底部を含む土師器片26点と、須恵器片1点を出土しており、土師器片の多くは摩耗している。図示したものは土師器の坏（532）である。



第65図　Ⅱ区　SD15・17・21　出土遺物実測図（S=1/4）

529～531（SD15）　532（SD17）　533（SD21）

SD18（第64図）

調査区（Ⅱ区）の中央南側（N14グリッド）に位置する。両端はTRに切られている。検出高は北・南端ともに32.60mを測る。主軸方向はN-20°-Wで、ほぼ直線状に検出している。検出規模は1.88×0.22m、床面高は北端で32.55m、南端で32.53mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、最深部で8cmを測る。埋土は灰褐色砂質シルト（灰色シルト質砂）である。遺物は底部を含む土師器片3点と、白磁片（Ⅳ類）1点を出土しており、土師器片の多くは摩耗している。

SD19（第64図）

調査区（Ⅱ区）の中央（M14・15／N13・14／O11・12・13グリッド）に位置する。一部はTRに切られている。検出高は北・西端ともに32.53mを測る。北端からN-39°-Eで約10m検出し、N-73°-Eで弧を描き西端に至る。検出規模は11.16×0.30m、床面高は北端で32.22m、西端で32.26mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、最深部は42cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトである。遺物は底部（回転糸切り）を含む土師器片19点と、須恵器片1点、備前焼片（擂り鉢）1点、近世陶磁器片1点、瓦片（近代）2点を出土しており、土師器片の多くは摩耗している。床面に礫（山石・栗石）が敷き詰められ、また古代～近代の包含層を切っていることなどから、近代以降の暗渠の可能性が考えられる遺構である。

SD20（第64図）

調査区（Ⅱ区）の西側（K14／L14／M14グリッド）に位置する。東端はTRに切られている。検出高は東端で32.59m、西端で32.49mを測る。東端からN-89°-Wで約6.5m検出し、N-73°-Wで西端を北へ振る。検出規模は7.30×0.23m、床面高は東端で32.37m、西端で32.43mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、最深部で13cmを測る。遺物は出土していない。

SD21（第64・65図）

調査区（Ⅱ区）の西側（K14・L14・M14グリッド）に位置する。東端はTRに切られている。検出高は東端で32.52m、西端で32.50mを測る。東端からN-86°-Eで約7.0m検出し、N-77°-Wで西端を北へ振る。検出規模は7.72×0.30m、床面高は東端で32.43m、西端で32.46mを測る。断面形態は逆台形

状を呈し、最深部で9cmを測る。遺物は口縁部を含む土師器片6点を出土しており、多くは摩耗している。図示したものは土師器の椀（533）である。

SD22（第64図）

調査区（Ⅱ区）の西側（K14／L14／M13・14／N12・13グリッド）に位置する。検出高は北端で32.56m、西端で32.61mを測る。東端からN-40°-Eで約4.5m検出し、N-86°-Wで西端を西へ振る。検出規模は16.0×0.80m、床面高は北端で32.51m、西端で32.50mを測る。断面形態は皿状を呈し、最深部で14cmを測る。埋土は黄褐色砂質シルト（黄褐色砂質土）である。遺物は底部を含む土師器片7点と、瓦片（布目痕）1点を出土しており、土師器片の多くは摩耗している。他に炭化物5点を出土している。

SD23（第64図）

調査区（Ⅱ区）の西側（L14／M14グリッド）に位置する。SD22との切り合い関係は不明である。検出高は東端で32.65m、西端で32.57mを測る。主軸方向はN-87°-Wで、ほぼ直線状に検出しているが、東端を僅かに南側に振る。検出規模は4.65×0.30m、床面高は東端で32.60m、西端は不明である。断面形態は逆台形状を呈し、最深部で12cmを測る。埋土は灰色砂質シルトである。遺物は底部（回転糸切り）を含む土師器片7点を出土している。他に混入の可能性が考えられる弥生土器片1点を出土している。

(2) 包含層出土遺物

土師器（小皿・坏・椀）

小皿　534は小皿である。Ⅳ層から出土し、口径7.4cm、底径5.0cmを測る。色調は浅黄橙色で、精選された胎土を用い、底部は回転糸切りである。全体的に摩耗している。

坏　535～538・541～545は坏である。535は口径13.8cmを測り、色調は浅黄橙色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められる。536は口径13.0cmを測り、色調はにぶい黄橙色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められる。口縁部外方に屈曲している。537は口径15.6cmを測り、色調はにぶい黄橙色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められる。538は口径16.2cmを測り、色調は浅黄橙色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められる。541は底径6.2cmを測り、色調は外面が黒色、内面が褐灰色で精選された胎土を用い、外面にナデ調整、内面にヘラミガキが認められる。外面が激しく煤けている。542は底径5.6cmを測り、色調は浅黄橙色で粗い胎土を用い、器表の荒れが激しい。全体的に摩耗している。543はⅣ層から出土し、底径9.0cmを測る。色調は灰褐色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められ、底部は静止糸切りである。内外面が煤けている。544はⅣ層から出土し、底径9.0cmを測る。色調は灰褐色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められ、底部は回転糸切りである。内外面が煤けている。545はⅣ層から出土し、底径6.8cmを測る。色調は浅黄橙色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデ、底部は回転糸切りである。全体的に摩耗している。

椀　539は底部でⅣ層から出土し、底径6.2cmを測る。色調は浅黄橙色で精選された胎土を用い、円盤状高台を有して、底部は回転糸切りである。540は底部で、底径6.1cmを測り、色調は浅黄橙色で精

選された胎土を用い、僅かにチャートの粗粒砂を含み、内外面に横ナデが認められる。底部は回転糸切りである。

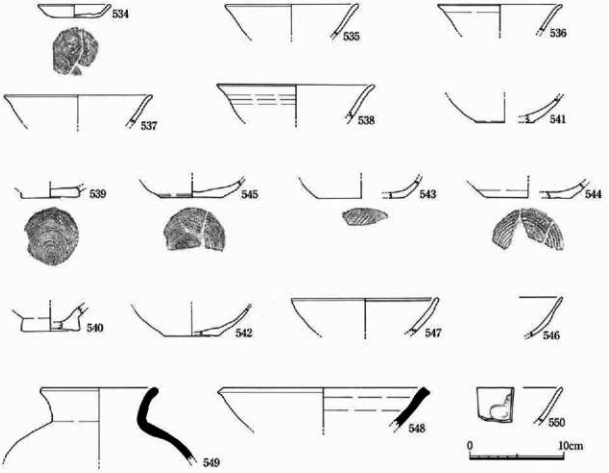
瓦器（椀）

椀　546の色調は外面が灰白色、内面が灰色で細・粗粒砂を含み、口縁部内外面及び体部内面横ナデ、体部外面に指頭圧痕がみられる。547は口径15.4cmを測り、色調は外面が黒色、内面が灰白色でチャートの細・粗粒砂を含み、内面に沈線がみられる。焼成は炭素吸着不良の未製品で在地産の可能性が考えられる。

須恵器（壺・鉢）

壺　549は壺である。Ⅲ層から出土し、口径11.4cmを測る。色調は灰色で精選された胎土を用い、内外面に横ナデが認められる。

鉢　548は鉢である。Ⅳ層から出土し、口径21.2cmを測る。色調は灰色で細・粗粒砂を含み、口縁端部は摘み出し、内外面に横ナデが認められる。



第66図　Ⅱ区包含層出土遺物（S=1/4）

表３　Ⅰ区出土遺物観察表（弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器）

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	特徴	備考
1	集石遺構	土師器	小皿	－	(0.7)	4.1	内）灰白 外）灰白	赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。全体に摩耗が激しい。底部糸切り。	
2	集石遺構	土師器	小皿	8.5	1.5	5.2	内）灰白 外）灰白	精選された胎土。底部糸切り。	
3	集石遺構	土師器	小皿	7.4	1.6	4.4	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
4	集石遺構	土師器	小皿	6.6	1.6	4.7	内）にぶい橙 外）にぶい橙	精選された胎土。底部糸切り。平行圧痕あり。	
5	集石遺構	土師器	小皿	6.6	1.4	4.5	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
6	集石遺構	土師器	小皿	7.1	1.4	4.3	内）浅黄橙 外）浅黄橙	赤色風化礫の砂粒を多く含む。	
7	集石遺構	土師器	小皿	7.9	1.4	(5.0)	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
8	集石遺構	土師器	小皿	6.6	1.7	4.4	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
9	集石遺構	土師器	小皿	7.0	1.8	3.8	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
10	集石遺構	土師器	小皿	8.0	1.7	4.5	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。ロクロ右回り。	
11	集石遺構	土師器	小皿	7.8	1.6	3.8	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
12	集石遺構	土師器	小皿	7.0	1.5	4.4	内）にぶい橙 外）にぶい橙	精選された胎土。底部糸切り。平行圧痕あり。	
13	集石遺構	土師器	小皿	8.3	1.6	5.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
14	集石遺構	土師器	小皿	8.2	1.3	(6.0)	内）灰白 外）灰白	細粒砂を多く含む。底部糸切り。	
15	集石遺構	土師器	小皿	8.4	1.8	5.1	内）橙 外）橙	チャート、長石の細粒を多く含む。底部糸切り。	
16	集石遺構	土師器	坏	11.6	3.6	6.2	内）橙 外）橙	チャートの細粒を含む。底部糸切り。	
17	集石遺構	土師器	坏	12.0	4.0	6.4	内）にぶい橙 外）にぶい橙	赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。底部糸切り。	
18	集石遺構	土師器	坏	13.4	4.1	7.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャート他の細粒砂を含む。底部糸切り。	
19	集石遺構	土師器	坏	13.4	(3.8)	－	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。内面ヘラミガキ。外面ヨコナデ。口縁外面肥厚する。	
20	集石遺構	土師器	坏	15.6	(3.2)	－	内）褐灰 外）褐灰	細粒砂、雲母を多く含む。	
21	集石遺構	土師器	椀	－	(1.8)	5.6	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。断面カマボコ状の貼付高台。	
22	集石遺構	土師器	坏	－	(2.8)	5.4	内）褐灰 外）浅黄橙	細粒砂を含む。底部糸切り。	
23	集石遺構	土師器	坏	－	(2.2)	6.6	内）灰白 外）灰白	精選された胎土。底部糸切り。	
24	集石遺構	土師器	坏	－	(1.9)	8.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	砂粒を少量含む。底部糸切り。	外面煤ける。
25	集石遺構	土師器	坏	－	(2.4)	7.2	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
26	集石遺構	土師器	坏	－	(2.7)	6.2	内）灰白 外）灰白	赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。底部糸切り。	
27	集石遺構	土師器	坏	－	(2.2)	6.4	内）灰白 外）灰白	精選された胎土。底部糸切り。	
28	集石遺構	土師器	椀	－	(1.1)	6.3	内）灰白 外）灰白	精選された胎土。底部糸切り。	
29	集石遺構	土師器	坏	－	(2.7)	6.0	内）褐灰 外）灰白	精選された胎土。底部糸切り。	
30	集石遺構	土師器	坏	－	(3.0)	8.8	内）にぶい橙 外）にぶい橙	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。底部糸切り。	
31	集石遺構	土師器	椀	－	(2.0)	7.1	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
32	集石遺構	土師器	羽釜	－	(2.7)	－	内）灰白 外）灰白	細粒砂を多く含む。	
33	集石遺構	土師器	甕	－	(4.9)	－	内）褐灰 外）灰褐	チャートの細粒砂を含む。頸部内外面ヨコナデ。胴部内面ヨコハケ。胴部外面タタキ＋ナデ。	外面煤ける。
34	集石遺構	土師器	甕	24.4	(4.0)	－	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャートの粗粒砂を含む。口唇面取り。内外面ヨコナデ。	
35	集石遺構	土師器	甕	27.0	(2.4)	－	内）にぶい黄橙 外）黒褐	チャート他の粗粒砂を多く含む。内外面ヨコナデ。	外面激しく煤ける。

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	特徴	備考
36	集石遺構	土師器	甕	29.0	(1.9)	－	内）にぶい橙 外）にぶい橙	チャート他の粗粒砂を多く含む。内外面ヨコナデ。	内外被熱赤変。
37	集石遺構	土師器	甕	30.8	(7.2)	－	内）にぶい黄橙 外）灰褐	チャート他の粗粒砂を含む。口唇面取り。口縁内外ヨコナデ。胴部外面タタキ。	外面被熱赤変。煤付る。
38	集石遺構	須恵器	椀	15.1	5.1	6.6	内）灰 外）灰	粗粒砂、小礫を含む。内外面ヨコナデ、内面に板ナデ（コアテア）が認められる。底部糸切り。	
39	集石遺構	須恵器	椀	－	(1.5)	4.0	内）灰 外）灰	精選された胎土。底部糸切り。	
40	集石遺構	須恵器	椀	－	(2.6)	7.0	内）灰 外）灰	細粒砂を含む。円盤状高台。内面丁寧なナデ。底部糸切り。	
41	集石遺構	須恵器	壺	5.2	(1.1)	－	内）暗灰 外）暗灰	精選された胎土。内外面に自然釉がかかる。	
42	集石遺構	須恵器	壺	－	(2.5)	－	内）暗灰 外）暗灰	やや粗い胎土。内外面に自然釉がかかる。	
43	集石遺構	須恵器	壺	－	(3.5)	10.0	内）灰褐 外）灰褐	精選された胎土。内外面自然釉。ヨコナデ。	
44	集石遺構	須恵器	壺	－	(6.9)	10.2	内）灰 外）灰	チャート他の粗粒砂を多く含む。外面自然釉。厚いつくり。	
45	集石遺構	須恵器	甕	23.0	(3.1)	－	内）灰 外）灰	やや粗い胎土。内外ヨコナデ。	
46	集石遺構	須恵器	甕	－	(2.2)	16.0	内）にぶい褐 外）にぶい褐	チャートの粗粒砂を含む。内外ナデ。内面は凹凸がみられる。	
47	集石遺構	須恵器	甕	－	(3.9)	10.2	内）灰 外）灰	精選された胎土。内外ヨコナデ。	
48	集石遺構	須恵器	鉢	－	(4.5)	11.0	内）灰 外）灰	チャート他の粗粒砂を含む。内外ヨコナデ。	
49	集石遺構	白磁	椀	11.8	(3.4)	－	内）灰白 10Y8/1 外）灰白 10Y8/1 断）灰白 10Y7/1	胎土は粗く黒い細粒を含む。釉は空色もしくはオリーブ色がかった灰白色で白濁である。厚く施釉。在存部では内外面全体に施釉。内面体部中位にロクロ痕か沈線が1条認められる。口縁部は僅かに外反し端部は丸く収めている。体部下位にいくに従って器肉は厚くなる。	
50	集石遺構	白磁	椀	－	(2.6)	6.3	内）灰白 5Y7/2 外）灰白 5Y7/2 断）明オリーブ灰 2.5GY7/1	胎土は細かく密で黒い細粒を含む。外面体部下位及び高台部にヘラ調整痕もしくはヘラ調整の跡のみかと思われるものがある。残存部では外面は露胎。内面は施釉（黄色みがかった灰白色）。畳付内面は削り出している。畳付外面は縦やかに内傾している。畳付外面は削り出している。	五類
51	集石遺構	青磁	椀	－	(2.5)	－	内）オリーブ灰 10Y5/2 外）オリーブ灰 10Y5/2 断）灰白 N7/	胎土は粗く黒色の強い灰色である。釉はくすんだ緑色で内外面ともに貫入がある。外面体部下位には施釉されていない。外面には細かい櫛描きがあり露胎部にもある（櫛描き→施釉）。内面には櫛によるジグザグ文様とヘラによる片彫りが施される。	同安窯系青磁椀Ⅰ－1b類。
52	集石遺構	青磁	椀	－	(2.1)	6.8	内）明オリーブ灰 2.5GY7/1 外）明オリーブ灰 2.5GY7/1 断）灰白 5Y8/1	胎土はやや密で灰白色を呈し黒い細粒を含む。釉は空色味を帯びた乳緑色で不透明な釉を内面は全面に外面は高台内部を除いて施釉。釉のかかっていない露胎部分は赤茶色に発色する。見込みに施文、見込みと体部の境に段がみられる。高台は断面四角形。	類型は不明。
53	集石遺構	瓦器	椀	12.8	(2.4)	－	内）灰 外）灰	精選された胎土。内面横方向の暗文。口縁部外面ヨコナデ。胴部外面に指頭圧痕が認められる。内面にモミ圧痕。竜骨構造。組織痕も残る。インディカの可能性が高い。	
54	集石遺構	瓦質土器	鍋	23.0	(3.2)	－	内）灰 外）灰	チャートの粗粒砂を多く含む。口縁内傾、口唇は丸く収める。断面三角形の鍔がつく。	外面激しく煤ける。
55	集石遺構	瓦質土器	鍋脚部	－	(4.2)	－	外）灰白 断）灰	チャートの粗粒砂を多く含む。三足鍋の脚部。径2.0～2.5cm。	
56	集石遺構	瓦質土器	鍋脚部	－	(6.1)	－	外）灰 断）灰	チャートの粗粒砂を多く含む。三足鍋の脚部。径2.0cm。	
57	集石遺構	瓦質土器	鍋脚部	－	(6.7)	－	外）灰 断）灰	チャートの粗粒砂を多く含む。三足鍋の脚部。身との接合部。径2.5～2.8cm。	一部被熱赤変。
58	集石遺構	瓦質土器	鍋脚部	－	(8.4)	－	外）黒 断）黒	細粒砂、雲母を多く含む。三足鍋の脚部。	外面激しく煤ける。
60	集石遺構	弥生	鉢	21.0	(6.3)	－	内）灰 外）灰/灰白	チャートの粗粒砂を多く含む。内外面ナデ。	後期
65	SE1	土師器	坏	－	(1.5)	(6.0)	内）浅黄橙 外）浅黄橙	砂粒をほとんど含まない。断面台形状の厚い底部。底部糸切り。	検出面
66	SE1	土師器	小皿	6.8	2.1	5.0	内）灰白 外）灰白	チャートの小礫、細粒砂を含む。外底に平行圧痕が認められる。内底横方向のナデ。底部糸切り。	検出面№3
67	SE1	土師器	小皿	7.8	1.9	4.3	内）灰白 外）灰白	細粒砂を僅かに含む。体部中位下に段を有する。底部糸切り。	検出面
68	SE1	土師器	坏	－	2.2	6.9	内）灰白 外）灰白	砂粒を含まない。底部糸切り。	検出面
69	SE1	瓦器	椀	13.2	(1.7)	－	内）黒褐 外）黒褐	口縁内外面ヨコナデ。外面指頭圧痕。	検出面№8?

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	特徴	備考
70	SE1	土師器	坏	15.8	(3.5)	−	内）浅黄橙 外）浅黄橙	細・粗粒砂を含む。口縁部はまっすぐに立ち上げ端部は僅かに外反させて丸く収める。	検出面
71	SE1	土師器	坏	14.4	(3.4)	−	内）灰白 外）灰白	細・粗粒砂を含む。口縁部はまっすぐに立ち上げ端部は僅かに外反させて丸く収める。	検出面
72	SE1	土師器	坏	14.8	(3.0)	−	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャートの細粒砂を含む。口縁部はまっすぐに立ち上げ端部は丸く収める。	検出面
73	SE1	土師器	坏	14.8	(4.1)	7.0	内）灰褐 外）灰白	チャートの細粗粒砂を含む。底部円盤が確認できる。	検出面。口縁内面激しく傷ける。
74	SE1	土師器	椀	14.4	5.2	7.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャートの細・粗粒砂を含む。口縁部はまっすぐに立ち上げ端部は丸く収める。底部は高台状を呈す。全体的に摩耗が激しい。	検出面
75	SE1	土師器	椀	14.5	3.8	8.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	細粒砂を含む。口縁部はまっすぐに立ち上げ端部は丸く収める。底部糸切り。	検出面№8?
76	SE1	土師器	椀	14.8	4.3	7.2	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャートの細・粗粒砂を含む。底部糸切り。	検出面№13
77	SE1	土師器	椀	14.2	4.6	7.0	内）淡橙 外）淡橙	チャートの細粒砂を多く含む。底部は円盤状高台を呈す。底部糸切り。	検出面№18
78	SE1	土師器	椀	14.6	4.1	6.5	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャートの細粒砂を含む。底部糸切り。	検出面№14
79	SE1	土師器	椀	14.2	4.5	7.0	内）浅黄橙 外）明褐灰	チャートの細・粗粒砂を含む。内面に右→左方向の弱いケズリ。ロクロ右回り。底部糸切り。	撹出面№2.内面の一部が脆し傷ける。
80	SE1	土師器	椀	15.4	4.0	6.6	内）浅黄橙 外）灰白	チャート他の細粒砂を含む。内面右→左方向の弱いケズリ。ロクロ右回り。底部糸切り。	検出面№17
81	SE1	須恵器	鉢	28.0	(4.1)	−	内）灰 外）灰	粗粒砂を多く含む。内外ヨコナデ。捏ね鉢。亀山。	検出面№5
83	SE1	土師器	小皿	7.8	1.3	5.2	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャート他の細粒砂を含む。ロクロ左回り。内底横方向のナデ。底部糸切り。	2面目№9
84	SE1	土師器	小皿	7.8	1.3	5.0	内）灰白 外）灰白	精緻。内底横方向のナデ。底部糸切り。	2面目№5
85	SE1	土師器	小皿	7.6	1.6	3.9	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャートの細粒砂を含む。底部糸切り。	2面目№18
86	SE1	土師器	小皿	7.5	1.5	5.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	砂粒はほとんど含まない。内底横方向のナデ。モミ痕0.7×3.5mm。底部糸切り。	2面目
87	SE1	土師器	小皿	6.9	1.3	5.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャート他の細粒砂を含む。内底に同心円文がみられる。底部糸切り。	2面目№12
88	SE1	土師器	小皿	7.8	1.8	4.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャート、赤色細粒砂を含む。底部糸切り。	2面目№10
89	SE1	土師器	小皿	8.0	1.6	5.3	内）浅黄橙 外）浅黄橙	赤色細粒を多く含む。内底ヨコナデ。底部糸切り。	2面目№16
90	SE1	土師器	小皿	8.0	1.6	5.1	内）灰白 外）灰白	チャートの細粒砂を多く含む。内底横方向のナデ。外面底部に平行圧痕が認められる。底部糸切り。	2面目№20
91	SE1	土師器	小皿	7.8	1.8	4.6	内）灰白 外）灰白	細粒砂を僅かに含む。内底横方向のナデ。薄手なつくり。外面底部に平行圧痕が認められる。底部糸切り。	2面目
92	SE1	土師器	小皿	8.0	1.8	4.4	内）浅黄橙 外）浅黄橙	砂粒を含まない。内外面化粧土塗布か。底部糸切り。	内
93	SE1	土師器	椀	14.0	4.1	7.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャートの細・粗粒砂を含む。ロクロ右回り。内面に右→左方向の弱いケズリ。外面底部に平行圧痕が認められる。底部糸切り。	2面目№19
94	SE1	土師器	椀	15.0	4.1	8.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	細粒砂を含む。口縁部僅かに外反する。底部糸切り。	2面目№13
95	SE1	土師器	椀	15.2	4.9	7.0	内）にぶい橙 外）浅黄橙	チャート、赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。口縁部はまっすぐに立ち上げ、端部は外方へ僅かに屈曲させ丸く収める。円盤状の上に粘土を貼付している。底部糸切り。	内。内面傷ける。
96	SE1	土師器	坏	−	(0.8)	6.9	内）黒褐 外）黒褐	赤色風化礫の細粒砂を含む。底部糸切り。	2面目。内外面傷ける。
97	SE1	土師器	椀	14.8	3.8	7.0	内）灰白 外）灰白	チャートの粗粒砂を多く含む。内底横方向のナデ。底部糸切り。	内
98	SE1	土師器	椀	15.0	5.1	7.0	内）灰黄褐 外）灰白	チャートの細・粗粒砂を含む。円盤状高台を呈す。底部糸切り。	内。内面は激しく傷ける。
99	SE1	瓦器	椀	14.8	5.3	6.0	内）黒 外）黒	チャートの小礫を含む。口縁外面に暗文。断面台形のしっかりした高台。体部外面は指頭圧痕顕著。在地産。	内。
101	SE1	須恵器	甕	21.0	(9.4)	−	内）灰 外）黄灰	砂粒を多く含む。内面同心円文状の当て具痕＋ナデ。口頸部外面ヨコナデ。胴部外面平行タタキ。	2面目№21
102	SE1	須恵器	甕	−	(9.6)	−	内）にぶい褐 外）灰黄	細粒砂を含む。外面平行タタキ。外面の一部に自然釉がかかる。内面ナデ。	2面目。内外面の一部被熱赤変か。
103	SE1	須恵器	甕	−	(26.5)	−	内）灰 外）灰褐	チャートの細粒砂を含む。内面ナデ。外面平行タタキ。	2面目№21他
104	SE1	須恵器	甕	−	(7.5)	23.0	内）灰 外）灰白	細粒砂を含む。外面タタキ。外面の一部に自然釉がかかる。内面ナデ。	内
105	SE1	須恵器	甕	−	−	(15.0)	内）黄褐 外）暗褐	粗い胎土。外面平行タタキ。内外面自然釉がかかる。焼成中につぶれたもの。	内

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	特徴	備考
129	SE1	土師器	坏	15.6	(3.4)	–	内) にぶい橙 外) 灰褐	チャートの細粒砂を含む。外面に目跡が顕著。	堀形
130	SE1	瓦器	椀	–	(5.1)	–	内) 黒 外) 灰白	外面に炭素は吸着しない。内面にヘラミガキが認められる。外面指頭圧痕顕著。	堀形
131	SK2	土師器	椀	–	(2.5)	7.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャートの粗粒砂を多く含む。円盤状高台。	
132	SK3	土師器	坏	12.2	(3.4)	–	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
133	SK3	土師器	坏	15.0	(1.2)	–	内) 灰白 外) 灰白	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
134	SK7	土師器	小皿	7.5	1.8	4.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	雲母他の細粒砂を含む。底部平行圧痕。	
135	SK7	土師器	坏	13.2	(1.2)	–	内) にぶい橙 外) 褐灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
136	SK7	土師器	坏	13.0	(2.6)	–	内) 灰黄 外) にぶい黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
137	SK7	土師器	坏	14.0	(3.3)	–	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
138	SK7	土師器	坏	16.0	(2.1)	–	内) にぶい橙 外) にぶい橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
139	SK7	土師器	坏	15.0	(2.6)	–	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	精選された胎土。外面に付着物がみられる。	内面煤ける。
140	SK7	土師器	坏	15.8	(2.2)	–	内) 黒褐 外) 灰黄褐	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
141	SK7	土師器	椀	–	(1.6)	6.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	石英、チャートの細粒砂を多く含む。円盤状高台。	
142	SK7	土師器	坏	–	(1.5)	6.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート他の細粒砂を含む。底部糸切り。	
143	SK7	土師器	椀	–	(2.3)	6.6	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	石英の細・粗粒砂を多く含む。体部外面ケズリ＋ナデ。弱い高台。底部糸切り。	外面煤ける。
144	SK7	土師器	椀	–	(2.6)	6.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。外面ヨコナデ。内面弱いケズリ＋ヘラミガキ。底部糸切り。	
145	SK7	土師器	坏	–	(1.3)	6.0	内) 黄灰 外) 黄灰	細・粗粒砂を多く含む。底部糸切り。	
146	SK7	土師器	坏	–	(1.4)	6.0	内) 灰白 外) 黄灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
147	SK7	土師器	坏	–	(1.4)	6.4	内) 灰白 外) 灰黄褐	精選された胎土。底部糸切り。	
148	SK7	土師器	坏	–	(1.5)	6.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート他の細粒砂を多く含む。底部糸切り。	
149	SK7	土師器	坏	–	(1.3)	7.0	内) 褐灰 外) にぶい黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	外面煤ける。
150	SK7	土師器	坏	–	(1.9)	6.4	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
151	SK7	土師器	坏	–	(2.9)	7.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
152	SK7	土師器	羽釜	–	(3.2)	–	内) 褐灰 外) にぶい黄橙	チャートの粗粒砂を多く含む。口縁部下断面三角突帯。内外面摩耗が激しい。	
153	SK7	須恵器	甕	22.8	(5.8)	–	内) にぶい黄橙 外) 黒褐	チャート他の細粒砂を含む。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面平行タタキ。	外面煤ける。
154	SK7	土師器	甕	29.0	(4.4)	–	内) にぶい黄橙 外) 黒	チャート他の細・粗粒砂を多く含む。口唇部強いヨコナデ。口縁部内外面ヨコナデ。	外面激しく煤ける。
155	SK7	土師器	甕	24.0	(1.8)	–	内) 黒褐 外) 褐灰	チャートの細粒砂を多く含む。口唇部上方につまみだし。	内外面煤ける。
156	SK7	土師器	甕	28.2	(3.3)	–	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャートの細・粗粒砂を多く含む。口縁部内外面ヨコナデ。口唇部下方につまみ出し強くヨコナデ。	
157	SK7	土師器	甕	32.0	(6.8)	–	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート他の粗粒砂を多く含む。口縁部内外面及び上胴部ヨコナデ。外面胴部タタキ。	外面煤ける。
158	SK7	須恵器	壺	15.0	(2.4)	–	内) 灰 外) 灰	チャート他の細粒砂を含む。内外面ヨコナデ。	
159	SK7	須恵器	捏ね鉢	21.0	(4.5)	–	内) 灰 外) 灰	チャートの小礫を少し含む。内外面ヨコナデ。片口捏ね鉢。	
160	SK7	須恵器	甕	–	(6.8)	11.0	内) 灰 外) 灰	チャート他の細・粗粒砂を含む。外底に砂粒が多く付着する。外面に擦痕。	
161	SK7	須恵器	甕	–	(7.9)	–	内) 灰黄褐 外) 褐灰	細粒を含む。外面平行タタキ。外面に自然釉。	
162	SK7	瓦器	椀	–	(2.1)	–	内) 黒 外) 黒	精選された胎土。外面指圧痕。内面に暗文がみられる。	
163	SK7	瓦質土器	羽釜	22.0	(5.3)	–	内) 褐灰 外) 黒	チャートの細・粗粒砂を含む。口縁部内外面ヨコナデ。口唇部面をとる。断面カマボコ状の突帯。	外面煤ける。

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	特徴	備考
164	SK7	瓦質土器	鍋脚	－	(6.6)	－	内）にぶい黄橙 外）灰黄褐	チャート、赤色チャート、他の粗粒砂を多く含む。在地産。	二次的に被熱する。
165	SK7	瓦質土器	鍋脚	－	(11.6)	－	内）黒灰 外）黒灰	石英粒を多く含む。	
166	SK7	瓦質土器	鍋脚	－	(10.9)	－	内）灰白 外）灰白	チャート、石英粒を多く含む。	
167	SK7	白磁	皿	11.2	3.0	5.8	内）灰白 5Y7/1 外）灰白 5Y7/1 断）灰白 N7/	胎土は緻密で黒い細粒を含む。釉は黄色味を帯びた灰白色で白濁し不透明である。釉は全体に厚く施釉されており、高台畳付けのみ露胎する。口縁部は外反させ端部は丸く収めている。底部の器肉は薄い。	E-2b類と思われる。
168	SK7	白磁	碗	15.2	(2.8)	－	内）灰オリーブ 5Y6/2 外）灰オリーブ 5Y6/2 断）灰白 7.5Y7/1	胎土は粗く黒い細粒が含まれる。黒に近い灰白色。釉はオリーブ色で透明、残存部では内面全体に外面は口縁と体部上位にのみ施釉。口縁付近には釉の二重がけがされているようである。外面口縁直下に沈線による段がある。口縁は玉縁で三角形に近い。器肉は薄い。	青磁
169	SK7	白磁	碗	16.6	(3.9)	－	内）灰白 2.5Y8/1 外）灰白 2.5Y8/1 断）灰白 10Y8/1	胎土はやや粗く黒い細粒を含みやや粗い。釉は黄色味を帯びた灰白色でオ透明（乳白色）で全体的に薄く施釉されており、所々灰色である。釉は残存部で内外面ともに全体に施釉される。体部の器肉が薄く、口縁部を外反させ丸く収めている。体部外面ロクロ痕か。体部内面の所々に貫入がみられ、気泡も確認できる。	V-3類
181	SK9	土師器	坏	14.8	(2.6)	－	内）浅黄橙 外）浅黄橙	細粒砂を多く含む。内外面ヨコナデ。	
182	SK9	土師器	坏	－	(0.9)	4.4	内）浅黄橙 外）浅黄橙	細・粗粒砂を含む。底部糸切り。	
183	SK9	土師器	椀	－	(1.9)	7.4	内）暗褐 外）灰白	精選された胎土。円盤状高台。底部糸切り。	
184	SK9	土師器	坏	－	(1.9)	6.4	内）にぶい橙 外）にぶい橙	チャート他の細・粗粒砂を含む。	
185	SK9	土師器	坏	－	(3.0)	6.6	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャート他の細・粗粒砂を含む。底部円盤状で糸切り。	
186	SK9	土師器	甕	23.0	(6.9)	－	内）にぶい黄橙 外）褐灰	チャートの粗粒砂を含む。外面タタキ痕がみられる。	内外面に煤付。特に外面は煤付が強しく付着。
187	SK12	土師器	坏	13.6	5.3	5.8	内）にぶい橙 外）にぶい橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。円盤状高台。	
188	SK13	土師器	坏	15.0	4.6	6.4	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	チャートの粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。	
189	SK13	土師器	坏	－	(2.4)	6.6	内）にぶい橙 外）にぶい橙	チャート他の粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。	
190	SK13	土師器	坏	13.8	(1.5)	－	内）にぶい橙 外）にぶい橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
191	SK13	土師器	坏	14.0	(1.2)	－	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
192	SK14	土師器	坏	15.0	(7.3)	－	内）灰白 外）灰白	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
193	SK16	土師器	小皿	8.0	1.6	5.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
194	SK16	土師器	小皿	9.6	1.6	7.0	内）灰黄 外）黄灰	細粒砂を含む。底部糸切り。	
195	SK16	土師器	小皿	8.1	1.7	5.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャートの粗・細粒砂を含む。底部糸切り。	
196	SK16	土師器	小皿	7.6	2.0	4.6	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。底部糸切りで平行圧痕がみられる。	
197	SK16	土師器	椀	15.8	(3.2)	－	内）灰白 外）灰白	細粒砂を含む。内外面ヨコナデ。	
198	SK16	土師器	椀	15.0	(4.3)	－	内）にぶい黄橙 外）浅黄橙	チャートの細粒砂を少量含む。内外面ナデ。	
199	SK16	土師器	椀	17.0	(2.1)	－	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
200	SK16	土師器	椀	16.8	(4.1)	－	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。口縁部外面に太い沈線。外面ヨコナデ。内面丁寧なヘラミガキ。	
201	SK16	土師器	坏	－	(2.1)	7.3	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャート他の粗・細粒砂を含む。底部糸切り。	
202	SK16	土師器	椀	－	(2.1)	6.6	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャート他の細・粗粒砂を多く含む。内面にヘラミガキがみられる。円盤状高台。底部は糸切り。	
203	SK16	土師器	椀	－	(1.9)	5.6	内）浅黄橙 外）褐灰	チャート他の細粒砂を含む。底部糸切り＋ナデ。高台高3mm。断面扇平な高台貼り付け。高台内面強いナデ。体部外面右→左方向の擦痕顕著。ロクロ右まわり。	
204	SK16	土師器	鉢	－	(2.6)	10.0	内）にぶい黄橙 外）にぶい橙	チャート、赤色風化礫の粗粒砂が多く含まれる。底部糸切り。	

図版番号	出土地点 層位	種類	器種 器形	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	特徴	備考
205	SK16	土師器	坏	14.4	4.1	7.0	内) 褐灰 外) にぶい黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	内面煤ける。
206	SK16	須恵器	鉢	−	(6.0)	14.0	内) 褐灰 外) 灰黄褐	チャートの細・粗粒砂を多く含む。内面散しく摩耗する。 亀山？捏ね鉢か擂鉢。	
207	SK16	土師器	小皿	−	(0.6)	4.7	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
208	SK16	土師器	小皿	8.0	1.7	4.5	内) 淡赤橙 外) 淡赤橙	精選された胎土。摩耗が激しい。	
209	SK16	土師器	小皿	8.2	1.8	5.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
210	SK16	土師器	小皿	8.0	1.5	5.0	内) 灰白 外) 灰白	細粒を含む。底部糸切り。	
211	SK16	土師器	小皿	8.0	1.6	5.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャートの細粒砂を含む。内面底部横方向のナデ。底部糸切りで平行圧痕がみられる。	
212	SK16	土師器	小皿	8.0	1.6	5.7	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャートの細粒砂を含む。内面底部横方向のナデ。底部糸切り。	
213	SK16	土師器	坏	14.8	(2.4)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
214	SK16	土師器	坏	14.0	(2.5)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
215	SK16	土師器	坏	14.4	(2.6)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	細粒砂を含む。内外面ヨコナデ。	外面煤ける。
216	SK16	土師器	坏	14.4	(3.2)	−	内) 明褐灰 外) にぶい黄橙	チャートの細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。	
217	SK16	土師器	坏	15.0	(3.1)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂が多く含まれる。内外面強いヨコナデ。	
218	SK16	土師器	坏	15.6	(3.1)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
219	SK16	土師器	坏	15.8	(2.5)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
220	SK16	土師器	坏	15.4	(2.6)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
221	SK16	土師器	坏	16.8	(3.4)	−	内) にぶい褐 外) にぶい黄橙	細粒砂を含む。内外面ヨコナデ。	
222	SK16	土師器	坏	15.0	(2.0)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
223	SK16	土師器	坏	15.0	(3.2)	−	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャートの細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。	
224	SK16	土師器	坏	16.0	(3.9)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート他の細粒を含む。内外面ヨコナデ。	
225	SK16	土師器	坏	15.6	(3.7)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャートの細粒砂を含む。	
226	SK16	土師器	坏	16.4	(3.6)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
227	SK16	土師器	椀	15.0	5.4	5.8	内) 灰白 外) 灰白	チャート他の細・粗粒砂を含む。口縁部は外反する。円盤状高台。底部糸切り。焼成不良。	
228	SK16	土師器	椀	15.0	(3.8)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
229	SK16	土師器	椀	−	(1.0)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内面ミガキ。断面カマボコ状の扁平な貼り付け高台で高さ3mm。	
230	SK16	土師器	坏	−	(3.0)	5.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。外面ヨコナデ。底部糸切り。柱状の高台で、内面のくぼみが大きい。	
231	SK16	土師器	坏	−	(2.7)	7.0	内) 灰白 外) 灰白	精選された胎土。底部糸切り。	
232	SK16	土師器	坏	−	(2.5)	6.6	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート他の粗・細粒砂を含む。底部糸切り。	
233	SK16	土師器	坏	−	(2.9)	7.0	内) 灰白 外) 灰白	精選された胎土。内面底部横方向のナデ。底部糸切り、平行圧痕残る。	
234	SK16	土師器	椀	−	(2.4)	5.8	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	細粒砂を含む。円盤状高台。底部は糸切り＋平行圧痕。	
235	SK16	土師器	椀	−	(1.8)	5.4	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャートの細粒を含む。断面扁平化した貼り付け高台。高台幅は一定せず3～4mm。内外面摩耗が激しい。	
236	SK16	土師器	椀	−	(3.9)	5.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート他の細粒砂を多く含む。内外面ナデ。円盤状高台。底部糸切り。	
237	SK16	土師器	甕	25.8	(2.7)	−	内) 暗赤灰 外) 暗赤灰	石英粗粒砂を多く含む。内外面ヨコナデ。	搬入品。
238	SK16	土師器	甕	−	(2.5)	−	内) 灰黄褐 外) にぶい黄橙	チャート、赤色風化礫の砂粒を含む。	
239	SK16	須恵器	短頸壺	10.0	(3.7)	−	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	特徴	備考
240	SK16	須恵器	短頸壺	10.4	(8.1)	−	内）灰褐 外）灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。外面に自然釉。	
241	SK16	須恵器	甕	21.8	(2.5)	−	内）灰 外）灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。内面に自然釉。	
242	SK16	須恵器	甕	20.0	(7.4)	−	内）灰 外）灰	精選された胎土。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面タタキ。内面の一部にハケ調整がみられる。外面に自然釉。	
243	SK16	須恵器	甕	−	(6.5)	17.0	内）灰 外）灰	チャートの粗粒砂を多く含む。内外面ヨコナデ。下胴部、底部剥落。	
244	SK16	須恵器	甕	−	(9.1)	13.6	内）灰 外）灰	チャートの細・粗粒砂を含む。外面平行タタキ。内面ナデ。	
245	SK16	須恵器	甕	−	(29.9)	−	内）灰 外）灰	チャート他の細粒砂を含む。外面右下がりの平行タタキ。器壁は厚い。（1.7～3.8cm）	№4
246	SK16	須恵器	壺	−	(7.6)	−	内）灰 外）灰	精選された胎土。胴部の器壁が著しく厚く1.0～1.8cm。内外面ヨコナデ。	
247	SK16	瓦器	椀	−	(1.1)	4.7	内）黒 外）黒	断面台形状のしっかりした高台。	
248	SK16	瓦器	椀	−	(2.6)	−	内）黒 外）黒	内面に暗文がみられる。	
249	SK16	白磁	椀	15.8	(3.7)	−	内）灰黄 2.5Y7/2 外）灰黄 2.5Y7/2 断）灰白 2.5Y7/1	胎土はやや粗く黒い細粒が含まれる。釉は灰黄色で外面口縁付近に釉の二重がけがみられる。外面口縁部直下に釉垂れがみられ気泡が目立つ。口縁部は玉縁である。内外面に貫入がみられる。	舶製。
250	SK16	白磁	椀	−	(3.4)	−	内）灰白 5Y7/1 外）灰白 5Y7/1 断）灰白 2.5YR8/2	胎土はやや粗く灰色を呈し黒い細粒を含む。釉は灰白色で白濁する。残存部では内外面ともに全面に厚く施釉される。口縁部外面に釉垂れがみられる。体部外面の所々に気泡がみられる。外面に割り込みによる弱い稜線がみられる。口縁部は玉縁である。	
257	SD4	土師器	小皿	8.7	1.7	6.0	内）橙 外）橙	精選された胎土。	
258	SD4	土師器	坏	−	(2.7)	6.8	内）橙 外）橙	赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。底部糸切り。	外面煤ける。
259	SD4	土師器	土鍋	−	(3.2)	−	内）にぶい橙 外）にぶい橙	石英、角門石他の細粒砂を含む。断面三角形の鍔。	
260	SD4	瓦質土器	羽釜	−	(2.7)	−	内）暗灰 外）暗灰	チャート他の細・粗粒砂を含む。	
262	SD5	土師器	坏	14.6	(3.1)	−	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
263	SD5	土師器	坏	−	(2.1)	6.6	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャートの細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。	
264	SD5	土師器	坏	−	(1.8)	6.6	内）灰白 外）灰白	チャート、雲母の細粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
265	SD5	須恵器	蓋	14.6	(1.4)	−	内）灰 外）灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
266	SD10	土師器	小皿	7.3	1.6	4.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。	
267	SD10	土師器	小皿	7.8	1.4	5.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
268	SD10	土師器	鉢	23.0	(6.3)	−	内）灰白 外）灰白	チャートの粗粒砂を多く含む。内外面強いヨコナデ。	
270	P5	土師器	小皿	8.8	1.5	6.6	内）橙 外）淡赤橙	精選された胎土。	
271	P26	土師器	小皿	6.7	1.7	4.4	内）橙 外）橙	赤色風化礫を多く含む。	
272	P26	土師器	小皿	6.4	1.7	4.4	内）橙 外）橙	赤色風化礫を多く含む。	
273	P4	土師器	椀	−	(1.2)	6.4	内）浅黄橙 外）浅黄橙	円盤状高台。底部糸切り。	
274	P26	土師器	椀	−	(1.5)	6.0	内）橙 外）橙	細・粗粒砂を少量含む。外底円盤貼付痕がみられる。底部糸切り。	
275	P94	瓦質土器	鉢	−	(4.8)	−	内）灰白 外）暗灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。捏ね鉢。	
276	P6	瓦質土器	羽釜	−	(2.4)	−	内）灰 外）灰白	チャートの粗粒砂を多く含む。	
277	P379	土師器	坏	12.6	4.2	6.8	内）にぶい橙 外）浅黄橙	チャート他の細粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
278	P382	須恵器	壺	−	(3.6)	10.5	内）灰 外）灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
279	P1	土師器	坏	12.0	(1.9)	−	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	特徴	備考
280	P2	土師器	坏	14.6	(2.3)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
281	P2	土師器	坏	15.8	(2.7)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
282	P3	土師器	坏	−	(1.9)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
284	P8	須恵器	鉢	28.2	(6.1)	−	内) 橙 外) 赤灰橙	チャートの粗粒砂を多く含む。内外面ヨコナデ。片口捏ね鉢。	赤変。
285	P9	土師器	坏	10.9	3.7	7.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
286	P9	土師器	坏	11.4	4.8	7.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
287	P9	土師器	小皿	−	(1.1)	4.4	内) にぶい橙 外) にぶい橙	赤色風化礫を含む。	
288	P9	土師器	坏	−	(2.3)	8.6	内) にぶい橙 外) にぶい橙	赤色風化礫の粗粒砂を含む。	
289	P56	土師器	坏	−	(2.0)	4.4	内) 灰褐 外) 褐灰	チャートの細粒砂を含む。底部糸切り。	
290	P97	土師器	坏	−	(1.4)	6.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
291	P200	土師器	坏	16.2	(3.8)	−	内) にぶい橙 外) にぶい橙	精選された胎土。外面ナデ。内面ミガキ。	
292	P200	土師器	坏	−	(1.6)	6.6	内) 淡赤橙 外) 淡赤橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
293	P200	土師器	椀	−	(1.6)	7.4	内) にぶい橙 外) にぶい橙	細粒砂を多く含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
294	P200	土師器	椀	−	(1.6)	7.4	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。外面ケズリ＋ミガキ。内面ミガキ。断面四角形の扁平な高台。外底糸切り＋ナデ。	
295	P213	土師器	坏	−	(1.5)	7.4	内) にぶい橙 外) にぶい橙	チャートの粗粒砂を含む。底部糸切り。	
296	P213	須恵器	甕	17.0	(3.1)	−	内) 灰 外) 灰	細粒砂を含む。内外面ヨコナデ。	
297	P221	土師器	小皿	8.8	1.5	6.0	内) 灰褐 外) 灰褐	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
298	P221	土師器	小皿	8.4	1.4	5.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
299	P232	須恵器	鉢	21.8	(4.5)	−	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
300	P247	土師器	坏	14.5	4.4	7.4	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャートの細・粗粒砂を多く含む。底部糸切り。	
301	P247	瓦質土器	羽釜	24.0	(3.2)	−	内) 灰 外) 灰	チャート他の細粒砂を含む。口縁部下断面三角突帯貼付。	
302	P276	土師器	坏	−	(2.1)	6.0	内) 黒褐 外) にぶい橙	精選された胎土。内面炭素付着。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
303	P276	土師器	坏	−	(2.9)	7.6	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	細粒砂を含む。内外面ヨコナデ。	
304	P276	瓦質土器	羽釜	−	(2.3)	−	内) 暗灰 外) 暗灰	チャート、雲母の細粒砂を含む。断面三角の大きい突帯が巡る。	
305	P308	土師器	椀	−	(1.5)	7.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
306	P332	土師器	坏	−	(2.3)	5.0	内) 浅黄橙 外) 橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
307	P333	土師器	坏	−	(2.2)	6.0	内) にぶい橙 外) 黒褐	細粒砂を含む。。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	外面激しく煤ける。
308	P333	瓦質土器	鍋	19.0	(4.3)	−	内) 灰白 外) 灰白	チャートの細・粗粒砂を多く含む。	外面煤ける。
309	P380	土師器	小皿	7.6	2.2	5.0	内) にぶい橙 外) にぶい橙	精選された胎土。	
310	P380	土師器	小皿	8.0	1.6	5.0	内) にぶい橙 外) にぶい橙	精選された胎土。底部糸切り。	
311	P500	土師器	坏	16.0	(3.4)	−	内) にぶい黄橙 外) 灰黄褐	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	外面煤ける。
312	P380	土師器	坏	14.0	(3.0)	−	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
313	P500	土師器	坏	16.0	(3.6)	−	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	外面煤ける。
314	P500	土師器	坏	−	(1.2)	10.0	内) 灰黄褐 外) にぶい黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
315	土取り跡4	須恵器	鉢	26.0	(8.9)	−	内) 灰 外) 灰	粗粒砂を多く含む。外面に自然釉がかかる。口唇部は面をとる。外面右→左方向のケズリ＋ヨコナデ。内面ヨコナデ。捏ね鉢。	

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	特徴	備考
316	SR2	弥生土器	壺	−	(4.0)	12.0	内）にぶい黄橙 外）浅黄橙	チャートの粗粒砂を多く含む。	
317	SR2	弥生土器	壺	−	(4.8)	10.6	内）褐灰 外）浅黄橙	チャート他の粗粒砂を多く含む。	
318	SR2	弥生土器	壺	−	(6.0)	10.8	内）暗灰黄 外）浅黄橙	チャートの粗粒砂を多く含む。	
319	SR2	土師器	坏	13.5	4.1	7.5	内）灰白 外）灰白	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
320	SR2	土師器	坏	−	(2.5)	6.9	内）にぶい橙 外）にぶい橙	粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
321	SR2	土師器	坏	13.8	4.2	7.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
322	SR2	土師器	坏	15.0	(2.4)	−	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャートの細・粗粒砂を多く含む。	
323	SR2	須恵器	壺	−	(7.9)	8.0	内）褐灰 外）灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
324	SR2	瓦質土器	羽釜	−	(3.3)	−	内）暗灰 外）暗灰	精選された胎土。	外面煤ける。
326	包含層	土師器	小皿	6.2	1.7	4.4	内）浅黄橙 外）浅黄橙	赤色風化礫を含む。底部糸切り。	
327	包含層	土師器	小皿	5.5	1.5	4.0	内）にぶい橙 外）にぶい橙	赤色風化礫を多く含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。平行圧痕。	
328	包含層	土師器	小皿	7.2	1.4	5.2	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャートの粗粒砂を含む。底部糸切り。	
329	包含層	土師器	小皿	7.4	1.7	4.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャート、赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。底部糸切り。	
330	包含層	土師器	小皿	7.6	2.0	4.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャート、赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。底部糸切り。	
331	包含層	土師器	小皿	7.5	1.2	4.5	内）浅黄橙 外）浅黄橙	赤色風化礫の粗粒砂を含む。	
332	包含層	土師器	小皿	7.2	2.1	5.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。底部糸切りで平行圧痕がみられる。	
333	包含層	土師器	小皿	8.4	2.1	5.0	内）灰白 外）灰白	精選された胎土。底部糸切りで平行圧痕がみられる。	
334	包含層	土師器	小皿	8.4	1.5	6.0	内）灰白 外）灰白	内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
335	包含層	土師器	小皿	7.2	1.3	4.2	内）浅黄橙 外）にぶい橙	精選された胎土。底部糸切り。	
336	包含層	土師器	小皿	7.4	1.6	5.5	内）にぶい橙 外）にぶい橙	精選された胎土。底部糸切り。	
337	包含層	土師器	小皿	8.4	1.6	4.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
338	包含層	土師器	小皿	7.0	1.6	4.6	内）灰白 外）灰白	精選された胎土。底部糸切りで平行圧痕がみられる。	
339	包含層	土師器	小皿	8.0	1.6	5.4	内）灰白 外）灰白	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。平行圧痕。	
340	包含層	土師器	小皿	8.2	1.5	4.6	内）浅黄橙 外）橙	チャートの粗粒砂を含む。平行圧痕。	
341	包含層	土師器	小皿	8.2	1.7	4.5	内）灰白 外）灰白	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
342	包含層	土師器	小皿	7.6	1.7	5.6	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャートの粗粒砂を含む。底部糸切りで平行圧痕がみられる。	
343	包含層	土師器	小皿	7.5	1.5	4.8	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャート他の粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り、平行圧痕。	
344	包含層	土師器	小皿	7.3	1.4	5.4	内）灰白 外）灰白	精選された胎土。底部糸切り。	
345	包含層	土師器	小皿	8.0	1.5	5.0	内）灰白 外）灰白	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
346	包含層	土師器	小皿	8.3	1.4	5.5	内）灰白 外）灰白	細粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り、平行圧痕。	
347	包含層	土師器	小皿	9.4	0.9	7.0	内）灰白 外）灰白	精選された胎土。底部糸切り、平行圧痕。	
348	包含層	土師器	坏	13.4	3.6	7.2	内）にぶい赤橙 外）にぶい赤橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
349	包含層	土師器	坏	14.0	3.7	7.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	赤色風化礫の細粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
350	包含層	土師器	坏	14.9	4.4	8.2	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャート他の粗・細粒砂を含む。内外面ヨコナデ。内面石→左のケズリ。底部糸切り。	外面煤ける。
351	包含層	土師器	坏	14.2	4.6	6.8	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャート他の細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	特徴	備考
352	包含層	土師器	坏	13.8	4.0	6.8	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
353	包含層	土師器	坏	15.6	4.3	7.8	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャートの細粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。外底にモミ圧痕がみられる。	
354	包含層	土師器	坏	13.6	4.7	6.2	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内面右→左のケズリ＋ヨコナデ。ロクロ右回り。底部糸切り。	
355	包含層	土師器	坏	−	5.3	7.8	内) にぶい橙 外) にぶい橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	内外面煤ける。
356	包含層	土師器	坏	14.3	4.2	6.6	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャートの細・粗粒砂を含む。内面右→左のケズリ。ロクロ右回り。底部糸切り。	
357	包含層	土師器	坏	14.3	4.6	7.0	内) にぶい橙 外) にぶい橙	チャートの細粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
358	包含層	土師器	坏	14.8	4.6	7.7	内) 灰白 外) 灰白	赤色風化礫の細粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切りで平行圧痕。	
359	包含層	土師器	坏	14.8	4.7	7.0	内) 浅黄橙 外) にぶい橙	チャートの細粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
360	包含層	土師器	坏	15.0	4.7	7.0	内) 灰白 外) 灰白	チャート、赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
361	包含層	土師器	椀	14.0	4.8	5.4	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	石英、赤色風化礫を含む。外面回転ナデの痕跡が顕著。内外面丁寧なヨコナデ。丸みを帯びた貼り付け高台。	
362	包含層	土師器	椀	15.6	5.7	6.0	内) にぶい褐 外) 浅黄橙	精選された胎土。長石、石英を含む。内面右→左方向のケズリ＋丁寧なヨコナデ。断面台形の貼り付け高台。搬入品。	
363	包含層	土師器	椀	15.2	5.8	6.1	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャートを含まない。石英粒を多く含む。口縁部は肥厚する。内面はケズリ＋丁寧なヨコナデ。断面長方形のしっかりした高台。底部糸切り＋ナデ。ロクロ回転右回り。	
364	包含層	土師器	坏	−	(1.6)	6.4	内) にぶい橙 外) にぶい橙	チャートの細・粗粒砂が多く含まれる。	
365	包含層	土師器	坏	−	(2.7)	5.4	内) 灰白 外) 灰白	細粒砂を多く含む。	
366	包含層	土師器	坏	−	(2.8)	6.0	内) 灰白 外) 灰白	精選された胎土。底部糸切りで平行圧痕。	
367	包含層	土師器	坏	−	(2.5)	7.4	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャートの細粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
368	包含層	土師器	坏	−	(1.6)	7.0	内) 橙 外) 橙	チャートの粗粒砂を含む。底部糸切り。	
369	包含層	土師器	坏	−	(2.8)	7.7	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャートの細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
370	包含層	土師器	坏	(1.8)	−	6.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。円盤状高台。底部糸切り。	
371	包含層	土師器	坏	−	(2.8)	6.4	内) にぶい橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
372	包含層	土師器	坏	−	(2.0)	6.6	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
373	包含層	土師器	坏	−	(1.7)	6.4	内) 灰白 外) 灰白	チャートの細粒砂を含む。底部糸切り。	
374	包含層	土師器	坏	−	(4.1)	7.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
375	包含層	土師器	坏	−	(2.3)	5.2	内) 灰白 外) 灰白	乳白色で精緻な胎土。擬口縁部に粘土を継ぎ足して完成か。坏の未製品か。	
376	包含層	土師器	坏	−	(1.8)	6.3	内) 灰白 外) 灰白	黄灰色で精緻な胎土。底部糸切り。	
377	包含層	土師器	坏	−	(2.6)	5.3	内) 灰白 外) 灰白	乳白色で精緻な胎土。石英粒を含む。	
378	包含層	土師器	坏	−	(3.0)	5.0	内) 灰白 外) 灰白	乳白色で精緻な胎土。底部糸切り。	
379	包含層	土師器	椀	−	(2.4)	5.6	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	赤色風化礫を含む。内外面ヨコナデ。	
380	包含層	土師器	椀	−	(1.7)	5.7	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。高台は扁平化する。底部糸切り。	
381	包含層	土師器	椀	−	(2.5)	7.2	内) 褐灰 外) にぶい黄橙	雲母、石英粒を多く含む。内外面ヘラミガキ。断面台形状のしっかりした高台。搬入品。	
382	包含層	土師器	椀	−	(1.9)	6.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャートの細粒砂を多く含む。円盤状高台。底部糸切り。	
383	包含層	土師器	椀	−	(2.1)	5.6	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	赤色風化礫の細粒砂を含む。底部糸切り。	
384	包含層	土師器	椀	−	(2.2)	7.5	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	細粒砂を含む。底部糸切り。	
385	包含層	土師器	椀	−	(2.9)	5.5	内) 褐灰 外) 浅黄橙	精選された胎土。内面ヘラミガキ。円盤状高台。	内面煤ける。
386	包含層	土師器	椀	−	3.2	6.6	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャートの細粒砂を多く含む。円盤状高台。底部糸切り。	

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	特徴	備考
387	包含層	土師器	椀	－	(4.4)	6.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャートの粗粒砂を含む。円盤状高台。底部糸切り。	内外面煤ける。
388	包含層	土師器	椀	－	(4.3)	6.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャートの粗粒砂を含む。円盤状高台。底部糸切り。	
389	包含層	土師器	椀	－	(2.2)	6.4	内）褐灰 外）褐灰	精選された胎土。円盤状高台。底部糸切り。	内外面煤ける。
390	包含層	土師器	椀	－	(3.1)	5.9	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。内面ヘラミガキ。円盤状高台。底部糸切り。	
391	包含層	土師器	椀	－	(1.9)	6.6	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャートの細・粗粒砂を多く含む。底部糸切り。円盤状高台。	
392	包含層	土師器	椀	－	(2.8)	5.6	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。内面ヘラミガキ。円盤状高台。底部糸切り。	
393	包含層	土師器	椀	－	(3.4)	6.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	赤色風化礫の細粒砂を多く含む。円盤状高台。底部糸切り。	
394	包含層	土師器	椀	－	(3.1)	6.0	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
395	包含層	土師器	椀	－	(4.1)	6.6	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	赤色風化礫を多く含む。底部糸切り。	
396	包含層	土師器	椀	－	(3.2)	5.4	内）浅赤橙 外）浅赤橙	赤色風化礫の粗粒砂を含む。	
397	包含層	土師器	甕	25.0	(3.7)	－	内）にぶい褐 外）にぶい赤褐	石英、長石の細・粗粒砂を多く含む。口縁部内外面ヨコナデ。口唇部凹状を呈する。	
398	包含層	土師器	甕	30.6	(6.5)	－	内）にぶい橙 外）浅黄橙	チャート他の粗粒砂を多く含む。口縁部内外面ヨコナデ。	
399	包含層	土師器	甕	36.0	(7.2)	－	内）にぶい橙 外）橙	石英、長石他の細粒砂を多く含む。内外面赤褐色。口縁部内外面ヨコナデ。口唇部は凹状を呈する。	
400	包含層	須恵器	椀	15.3	6.1	5.5	内）灰白 外）灰白	チャートの細・粗粒砂を含む。内外面強り＋丁寧なヨコナデ。内面にヘラミガキか、しっかりした力形高台。底部糸切り＋ナデ。ロクロ回転右回り。	
401	包含層	須恵器	椀	16.4	(3.7)	－	内）灰 外）灰	精選された胎土。外面ケズリ＋ヨコナデ。内面ヨコナデ。内外上半部に自然釉がかかる。	
402	包含層	須恵器	椀	－	(1.4)	3.6	内）灰 外）灰	精選された胎土。外面ケズリ＋ヨコナデ。内面ミガキ。底部糸切り。	
403	包含層	須恵器	椀	－	(2.2)	6.0	内）灰 外）灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。厚い円盤状高台。底部糸切り。	
404	包含層	須恵器	椀	－	(3.2)	6.0	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	精選された胎土。黄茶色に発色。外面ヨコナデ。内面ミガキ。火襷がみられる。底部糸切り。平行圧痕が残る。	
405	包含層	須恵器	椀	－	(2.2)	6.0	内）灰 外）灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
406	包含層	須恵器	捏ね鉢	－	(2.4)	－	内）灰 外）灰	細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。東播系須恵器。	
407	包含層	須恵器	水注 注口部	－	(4.8)	－	内）褐灰 外）褐灰	精選された胎土。注口端部は鋭く削いでいる。外面に自然釉。体部接合部から剥離。	
408	包含層	須恵器	壺	8.7	(5.0)	－	内）灰 外）灰	精選された胎土。上胴部から内傾する。内外面丁寧なヨコナデ。	
409	包含層	須恵器	壺	－	(5.9)	－	内）灰 外）灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
410	包含層	須恵器	壺	－	(6.1)	8.0	内）灰 外）灰	精選された胎土。外面弱いケズリ＋ヨコナデ。内面ナデ。	
411	包含層	須恵器	甕	24.0	(4.4)	－	内）灰 外）灰	粗粒砂を少量含む。内外面ヨコナデ。	
412	包含層	須恵器	甕	17.3	(4.9)	－	内）灰 外）灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
413	包含層	須恵器	甕	18.0	(2.4)	－	内）灰 外）灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。内面に自然釉がかかる。	
414	包含層	須恵器	甕	19.6	(3.0)	－	内）灰 外）灰	精選された胎土。口唇部鋭く面を取る。内外面ヨコナデ。内外面に自然釉がかかる。	
415	包含層	須恵器	甕	21.0	(5.8)	－	内）暗赤褐 外）灰褐	精選された胎土。内外面ヨコナデ。内外面に自然釉がかかる。	
416	包含層	須恵器	甕	23.0	(3.6)	－	内）灰 外）灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
417	包含層	須恵器	甕	23.0	(7.5)	－	内）灰 外）灰	粗粒砂を多く含む。内面横方向のケズリ＋ヨコナデ。外面ヨコナデ。	
418	包含層	須恵器	甕	26.0	(6.5)	－	内）灰 外）灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。胴部外面平行タタキ。	
419	包含層	須恵器	甕	31.0	(5.2)	－	内）灰 外）灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。口唇部は凹状を呈する。胴部外面平行タタキ。外面に自然釉がかかる。	
420	包含層	須恵器	鉢	21.0	(5.4)	－	内）灰白 外）にぶい赤橙	焼成は堅緻。内外面ヨコナデ。内面は白色化した自然釉が付着する。口縁端部は僅かに摘み上げ口唇部は面を取る。捏ね鉢。	

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	特徴	備考
421	包含層	須恵器	鉢	21.2	(6.4)	−	内）灰白 外）にぶい赤橙	焼成は堅緻。内外面ヨコナデ。内面白色の自然釉がかかる。口唇部に面を取り端部を僅かに摘み上げる。捏ね鉢。	
422	包含層	須恵器	鉢	24.0	(5.0)	−	内）灰 外）にぶい赤橙	焼成は堅緻。内外面ヨコナデ。東播系捏ね鉢模倣か。	
423	包含層	須恵器	鉢	(24.4)	(3.3)	−	内）灰 外）灰	粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。口唇部に自然釉がみられる。重ね焼き。東播系捏ね鉢。	
424	包含層	須恵器	鉢	32.0	(3.7)	−	内）灰 外）灰	精緻。内外面ヨコナデ。口唇部外面上半に重ね焼き痕がみられる。東播系捏ね鉢。	
425	包含層	須恵器	鉢	−	(2.7)	10.4	内）灰 外）灰	粗粒砂を多く含む。内外面ヨコナデ。捏ね鉢。亀山。	
426	包含層	須恵器	鉢	−	(4.7)	11.0	内）灰 外）灰	粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。外面は下地にケズリ。捏ね鉢。亀山。	
427	包含層	須恵器	甕	−	(5.8)	12.2	内）暗灰黄 外）青灰	石英他の細・粗粒砂を多く含む。外面左→右方向のケズリ。内面ナデ。外底砂粒が多く付着する。	
428	包含層	須恵器	甕	−	(7.1)	12.6	内）灰 外）灰	精選された胎土。外面左→右方向にケズリ。内面ナデ。外底砂粒が多い。	
429	包含層	須恵器	甕	−	(7.5)	12.6	内）灰褐 外）浅黄橙	チャート他の粗粒砂を多く含む。外面ケズリ＋ヨコナデ。内面ナデ。外底に砂粒が多く付着する。	
430	包含層	須恵器	甕	−	(8.9)	11.0	内）灰 外）灰	チャート他の粗粒砂を含む。外面左→右方向のケズリ。外面平行タタキ。内面ナデ。底部剥離。	
431	包含層	須恵器	甕	−	(3.5)	18.0	内）灰 外）暗赤褐	精選された胎土。外面に自然釉がかかる。	
432	包含層	瓦器	小皿	9.0	1.9	−	内）暗灰 外）暗灰	チャート、頁岩の細・粗粒砂を含む。内面ナデ。外面指頭圧痕がみられる。	
433	包含層	瓦器	椀	−	(0.7)	4.6	内）灰 外）灰	精選された胎土。断面三角形の貼り付け高台。	
434	包含層	瓦器	椀	−	(0.7)	6.0	内）灰 外）灰	精選された胎土。しっかりした外方に踏ん張る高台。内面ヘラミガキ。	
435	包含層	瓦器	椀	−	(0.9)	5.8	内）黄灰 外）黄灰	精選された胎土。断面三角形の貼り付け高台。	
436	包含層	瓦器	椀	−	(1.6)	5.2	内）黄灰 外）黄灰	チャートの粗粒砂を含む。断面三角形の貼り付け高台。内面にモミ圧痕がみられる。	
437	包含層	瓦器	椀	−	(1.2)	6.0	内）暗灰 外）暗灰	チャートの細・粗粒砂を多く含む。断面カマボコ状の高台。	
438	包含層	瓦器	椀	−	(3.3)	−	内）暗灰 外）暗灰	口縁部ヨコナデ。内面ミガキ。外面に指頭圧痕がみられる。	
439	包含層	瓦器	椀	15.2	4.9	5.6	内）暗灰 外）暗灰	精選された胎土。薄いつくり。外面口縁部はヨコナデ。体部内面に横方向のミガキ。内底は一定方向のミガキ。断面丸みを帯びた三角状の高台。	
440	包含層	瓦質土器	羽釜	−	(4.9)	−	内）灰 外）灰	チャートの粗粒砂を多く含む。口唇部は面をとる。断面カマボコ状の鍔で、鍔の上下口縁部ヨコナデ。胴部外面に指頭圧痕。	
441	包含層	瓦質土器	羽釜	−	(5.2)	−	内）灰 外）暗灰	チャート他の細・粗粒砂を含む。口唇部は丸みを帯びる。断面三角形のしっかりした鍔で、鍔の上下口縁部ヨコナデ。	外面煤ける。
442	包含層	瓦質土器	羽釜	18.0	(5.5)	−	内）オリーブ黒 外）黒		
443	包含層	瓦質土器	羽釜	18.6	(5.0)	−	内）黒 外）黒	チャートの粗粒砂を多く含む。口唇部は丸みを帯びる。断面三角形の鍔。器表の荒れが激しい。脚は付け根が剥離。三足鍋。	外面煤ける。
444	包含層	瓦質土器	羽釜	19.0	(7.0)	−	内）灰黄 外）黒褐	チャートの粗粒砂を多く含む。口唇部は面を取る。1.4cm幅の鍔で、鍔の上下口縁部ヨコナデ。胴部内外面ナデ。	外面激しく煤ける。13C
445	包含層	瓦質土器	羽釜	21.2	(6.2)	−	内）灰 外）灰褐	チャート他の粗粒砂を多く含む。口唇部は面を取る。1.0cm幅の鍔で、鍔の上下口縁部ヨコナデ。胴部内外面ナデ。	外面煤ける。
446	包含層	瓦質土器	羽釜	22.0	(4.0)	−	内）灰白 外）暗灰		
447	包含層	瓦質土器	羽釜	23.0	(3.5)	−	内）灰白 外）灰		
448	包含層	瓦質土器	鍋	18.5	(3.3)	−	内）灰白 外）灰白	チャート他の細粒砂を含む。口唇部は丸く収める。内外面ナデ調整。胴部外面に指頭圧痕。	
449	包含層	瓦質土器	鍋	17.0	(6.8)	−	内）灰 外）灰白	チャートの細・粗粒砂を含む。口唇部は面を取る。内面ナデ。胴部外面指頭圧痕。	外面煤ける。
450	包含層	瓦質土器	鍋	18.0	(5.8)	−	内）灰 外）暗灰	精選された胎土。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面指頭圧痕。	外面煤ける。
451	包含層	瓦質土器	鍋脚	−	(4.5)	−	内）暗灰 外）黒	チャートの粗粒砂を多く含む。三足鍋の脚の付け根。	外面激しく煤ける。
452	包含層	瓦質土器	鍋脚	−	(5.5)	−	内）灰 外）暗灰	チャートの細・粗粒砂を多く含む。ナデ。三足鍋。	
453	包含層	瓦質土器	鍋脚	−	(11.8)	−	内）暗灰 外）暗灰	チャートの細・粗粒砂を多く含む。付け根から剥離。三足鍋。	外面煤ける。

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	特徴	備考
454	包含層	瓦質土器	鉢	19.6	(4.7)	－	内）灰 外）灰白	細・粗砂を含む。口縁部は面を取る。外面は右→左方向のケズリ＋ナデ。内面ヨコナデ。捏ね鉢。	
455	包含層	白磁	壺	9.8	(1.5)	－	内）灰オリーブ 5Y6/2 外）灰オリーブ 5Y6/2 断）灰白 5Y7/1	胎土は粗く灰黒っぽい。釉は灰オリーブ色で残存部では内外面全面に比較的薄く施釉されている。口縁部直下には釉溜まりが確認できる。内外面に少し貫入がみられる。壺の口縁部と思われる。	
456	包含層	白磁	壺	－	(1.9)	－	内）灰白 7.5Y7/1 外）灰白 7.5Y7/1 断）灰白 N7/	胎土は密で黒い細粒を微かに含む。釉は空色味を帯びた灰白色で、残存部では内外面ともに施釉される。残存部下位は外湾しているようである。中位は中湾、上位は外湾。上位は玉縁状の口縁か。内面調整痕と思われる斜めの稜線が2条みられる。	
457	包含層	白磁	皿	10.2	(1.5)	－	内）灰白 7.5Y6/1 外）灰白 7.5Y6/1 断）灰白 2.5Y7/1	胎土はやや粗く黒い細粒を微かに含む。釉はオリーブ色がかった灰色でやや厚めに施釉されている。残存部では内外面ともに全体に施釉される。残存部の下方に貫入がみられる。内面体部上位で内湾しその屈曲部に段を有する。	青磁もしくは同一1a類
458	包含層	白磁	皿	10.9	(1.6)	－	内）灰 5Y6/1 外）灰 5Y6/1 断）灰白 5Y7/1	胎土は粗く黒い細粒を少量含む。釉はオリーブがかった灰色で内面屈曲部に厚く施釉される。残存部では内外面とも に全体に施釉される。体部上位で内湾しその屈曲部に段を有する。外面体部上位には沈線が2条みられる。口縁端部は丸く収める。	青磁もしくは同一1類の皿。
459	包含層	白磁	皿	9.4	(2.1)	－	内）灰白 10Y8/1 外）灰白 2.5GY8/1 断）灰白 7.5Y8/1	胎土は密で黒い細粒を含む。釉は内面と外面の釉色が異なる。内面はやや青味がかった純白であるが、外面はオリーブがかった釉で外面には貫入を伴う。外面体部中位から下は露胎。口縁部端部には施釉されない「口禿げの白磁」と思われる。外面端部は黄色に変色しており施釉は定かではないが、体部下位の露胎が黄変しているので外面端部も露胎と考えられる。端部内面は露胎であるが純白で断面の色とは異なるので化粧土を施したことも考えられる。口縁部は僅かに外反する。外面は滑らかではなく凹凸がある。	入部の皿と考えられる。
460	包含層	白磁	皿	10.0	(3.2)	－	内）灰白 5GY8/1 外）灰白 5GY8/1 断）灰白 5Y8/1	胎土は粗く黒い細粒を含む。釉はやや空色およびオリーブ色がかった灰白色でやや白濁する。比較的厚めに施釉されており、残存部では内外面ともに施釉されるが口縁部端部のみ露胎の「口禿げの白磁」である。口縁部端部は露胎で断面とは色が違うため化粧土を施している可能性が考えられる。口縁部は外反しており体部は内湾している。	入部もしくは広東の皿。
461	包含層	白磁	碗	－	(2.3)	－	内）灰白 10Y7/1 外）灰白 10Y7/1 断）灰白 7.5Y8/1	胎土はやや粗く黒い細粒を含む。口縁部釉の二重がけ。口縁部下に段がみられる。口縁部は細長い玉縁で、断面からみると折り返した部分が繊細している。貫入がみられる。	青磁
462	包含層	白磁	碗	13.8	(3.4)	－	内）灰白 5Y7/2 外）灰白 5Y7/2 断）灰白 7.5Y8/1	胎土は細かく密で黒い細粒を少量含む。釉は黄色を帯びた灰白色で透明。残存部では内面全体及び外面体部上位から中位にかけてやや厚めに施釉されており、口縁部付近は二重がけされる。内面体部上位に釉垂れ。口縁部はなだらかなカーブで細長い玉縁である。	青磁
463	包含層	白磁	碗	14.6	(3.8)	－	内）灰白 5Y7/1 外）灰白 5Y7/1 断）灰白 N7/	胎土はやや粗く黒い細粒が含まれる。釉は体部外面全面に黄色味がかった透明の釉を施す。口縁内外面に釉の二重がけがみられる。口縁部外面に重ね焼き痕が1ヵ所みられる。外面体部に小さな気泡がみられる。	青磁
464	包含層	白磁	碗	15.6	(3.8)	－	内）灰白 5Y7/1 外）灰白 5Y7/1 断）灰白 7.5Y7/1	胎土は比較的粗く黒い細粒が含まれる。釉は黄色又はオリーブがかった灰色でやや厚めに施釉される。残存部では内外面全体に施釉されており口縁には二重がけしている。口縁部は玉縁である。外面体部にロクロ痕がみられ、内面体部上位に釉垂れがみられる。口縁部は玉縁である。	青磁
465	包含層	白磁	碗	14.6	(3.5)	－	内）灰白 5Y7/2 外）灰白 5Y7/2 断）灰白 5GY8/1	胎土は粗く黒い細粒を含む。釉は黄色味を帯びた灰白色で厚めに施釉される。口縁部外面は二重がけが厚めになっている。残存部では内外面全体に施釉される。口縁部は玉縁で、内部断面には空洞がみられる。施釉により全体が滑らかな曲線であるが、ロクロ整形時には角張っていたようである。	青磁
466	包含層	白磁	碗	14.2	(3.2)	－	内）灰黄 2.5Y7/2 外）灰黄 2.5Y7/2 断）灰白 2.5Y8/2	胎土は密でクリーム色に近く、黒い細粒が含まれる。釉は灰黄色でやや厚めに施釉され釉が厚い部分に気泡が多くみられる。口縁部は釉の二重がけか。口縁部は丸みのある玉縁である。内面体部上位に釉の垂下がみられる。内外面に貫入がみられるが、内面はやや少ない。	青磁
467	包含層	白磁	碗	16.4	(5.5)	－	内）灰 5Y7/1 外）灰 5Y7/1 断）灰 N6/	胎土は粗く黒い細粒が含まれる。口縁部に釉の二重がけが見られ垂下している。口縁部下、体部上位に縦やかな稜線がみられ交差して下方に向かう。口縁部は玉縁である。体部中位から下は露体する。	青磁
468	包含層	白磁	碗	16.8	(2.4)	－	内）灰黄 2.5Y7/2 外）灰黄 2.5Y7/2 断）灰白 2.5Y8/2	胎土はやや粗くクリーム色に近く、黒い細粒が含まれる。釉は灰黄色で口縁部下位から体部上位にかけて釉が濃くなっている。釉が濃くなっている部分には気泡がみられる。口縁部は釉の二重がけか。口縁部直下には段をもつ。口縁部は玉縁である。内外面に貫入がみられるが、口縁部外面は摩耗のためか薄い。	青磁

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm)口径	器高	底径	色調	特徴	備考
469	包含層	白磁	碗	15.6	(3.7)	－	内）灰白 5Y7/2 外）灰白 5Y7/2 断）灰白 N7/	胎土は密で黒い細粒を含む。釉はやや黄色味を帯びた透明な釉で厚く施釉する。外面口縁部直下外面に沈線状の段をもつが釉により段はほとんどなくなっている。口縁部は玉縁である。体部中位から下は露胎する。	青磁
470	包含層	白磁	碗	15.6	(5.0)	－	内）灰白 5Y7/2 外）灰白 7.5Y7/1 断）灰白 10Y8/1	胎土はやや密で黒い細粒が含まれる。釉は黄もしくはオリーブ色がかった灰白色で透明な釉である。口縁部ではより厚くなっており、二重がけしたものと思われる。外面化粧土の上に施釉と思われる。外面体部下位からは施釉されておらず露胎する。体部の器肉は口縁部から高台に近づくにつれ厚くなる。口縁部の器肉は薄い。口縁部は外反させ端部は丸く収める。内面底部下位に沈線を有する。	V-3類か。
471	包含層	白磁	碗	17.0	(3.4)	－	内）にぶい黄橙 10YR7/3 外）にぶい黄橙 10YR7/3 断）灰白 2.5Y8/2	胎土は粗く黒い細粒も若干含まれる。釉はにぶい黄橙色で薄く施釉されている。体部には気泡がみられる。残存部では内外面に施釉されている。体部上位に一段の稜がみられる。口縁部は玉縁で断面から見ると折り返した部分が繊薄している。貫入が内外面にみられる。	青磁
472	包含層	白磁	碗	18.2	(3.4)	－	内）灰白 5Y7/2 外）灰白 5Y7/2 断）灰白 5Y7/1	胎土は細かく密で黒い細粒を含む。釉は黄色味がかった灰白色でやや厚めに施釉する。口縁部直下に段がみられるが、釉で覆われ外面はなだらかである。口縁部外面には釉の二重がけがみられ釉が厚くなっている。内面では明確には確認できない。口縁部内部断面に空洞がみられる。口縁部は玉縁で口縁端部は比較的尖っている。	青磁
473	包含層	白磁	碗	17.9	(4.3)	－	内）灰白 5Y7/1 外）灰白 5Y7/1 断）灰白 N7/	胎土はやや粗く黒い細粒を含む。釉はオリーブ色および灰色を帯びた灰白色で透明である。残存部では全面にやや厚めに施釉されている。体部はやや内湾気味で体部上位で外反する。体部下位で器肉が厚くなる。口縁部は外反し端部は丸く収めている。	V-2類かV-3類であるが、V-2類の可能性が高い。
474	包含層	白磁	碗	－	(2.0)	6.0	内）にぶい黄橙 10YR7/2 外）にぶい黄橙 10YR7/2 断）灰白 10YR8/2	胎土はやや粗く黄色味がかった灰白色（クリーム色）である。残存部では全く釉がかかっていない。内面見込みはつるつるしており化粧土をかけているかと思われる。高台は比較的高く、付け高台と思われる。	青磁か。
475	包含層	白磁	碗	－	(2.1)	7.0	内）灰白 5Y7/2 外）灰 5Y6/1 断）灰白 7.5Y8/1	胎土はやや密で黒い細粒が含まれる。釉は黄色味がかった灰白色で内外面に貫入がみられる。外面は高台まで施釉し高台は露胎する。底部が比較的厚く、ケズリ出しはシャープである。内面見込みの釉を輪状に掻き取っており、内底見込み近くに段をもつ。	瀬戸
476	包含層	白磁	碗	－	(1.9)	5.8	内）浅黄 5Y7/3 外）灰 7.5Y6/1 断）灰白 N8/	胎土はやや粗く黒い細粒を含む。釉は浅黄色で、内底見込みには貫入がみられる。断面の色と釉がけしていない外面との色調が違うので、素地の上に化粧土をかけていると思われる。内底見込みの釉を輪状に掻き取っており、内底見込み近くに沈線がみられる。底部が比較的厚く、見込み外面にはヘラケズリの跡がみられ、ケズリ出しは浅いがシャープである。高台と体部との境に段をもつ。体部外面にヘラケズリ痕と思われるものがみられる。	瀬戸
477	包含層	白磁	碗	－	(2.2)	7.2	内）灰白 7.5Y8/1 外）灰白 7.5Y8/1 断）灰色 5Y7/1	胎土は粗く黒い細粒が含まれる。釉はオリーブ色がかった灰白色で、内面と外面体部下位まで施釉。残存部では釉は薄く施釉されている。高台は幅広で、削り出しは浅いため、底部の器肉も厚い。内面見込みに融着物がみられる。	青磁
478	包含層	白磁	碗	－	(1.8)	3.6	内）灰白 5Y7/2 外）灰白 5Y7/2 断）灰白 5Y8/1	胎土は粗く黒い細粒を含む。釉は黄色味がかった灰白色で、外面は体部下位より上に施釉されている。底部が比較的厚く、見込み外面にはヘラケズリの跡がみられる。ケズリ出しはシャープである。高台と体部の境に段をもつ。体部外面にヘラケズリ痕とおもわれるものがみられる。内面見込みの釉を輪状に掻き取っている。内面見込み近くに沈線がみられる。	瀬戸
479	包含層	白磁	碗	－	(2.9)	7.6	内）灰白 7.5Y8/1 外）灰白 7.5Y8/1 断）灰白 5Y8/1	胎土は比較的粗く黒い細粒が含まれる。釉はオリーブ色がかった灰白色で残存部では薄く施釉。外面体部下位まで施釉。外面底部及び高台にヘラケズリ痕かと思われるものが認められる。高台は幅広で削り出しは浅いため底部の器肉も厚い。内面見込みに沈線状の段、融着物がみられる。	青磁
480	包含層	青磁	皿か坏	－	(1.9)	－	内）灰オリーブ 7.5Y5/2 外）灰オリーブ 7.5Y5/2 断）灰白 7.5Y8/1	胎土はやや粗く灰色を呈し黒い細粒を含む。釉はくすんだオリーブ色の透明釉で、残存部では内外面ともに全面に厚く施釉する。外面体部内に向かって一段の屈曲部がみられる。口縁部は外反し端部は丸く収める。腰折れの皿か坏か。	類型は不明。
481	包含層	青磁	碗	－	(2.4)	－	内）灰オリーブ 5Y5/2 外）灰オリーブ 5Y5/2 断）灰白 5Y8/1	胎土は粗く黒い細粒を含む。釉は灰色がかったにぶいオリーブ色の透明釉で、残存部では内外面ともに全面に厚く施釉される。口縁部はまっすぐ立ち上げ端部は丸く収める。外面体部に鎬連弁文を施している。	龍泉窯系青磁Ⅰ-5b類。491と同一個体か。
482	包含層	青磁	碗	－	(3.2)	－	内）オリーブ灰 2.5Y6/1 外）オリーブ灰 2.5Y6/1 断）灰白 7.5Y7/1	胎土はやや粗く灰色である。釉は青味を帯びた緑色でやや厚く施釉する。内外面口縁部は釉が薄く淡い。口縁部内面に2条の沈線がみられる。体部に4条の沈線がみられる。口縁部の器肉は比較的薄い。口縁部はごく小さい玉縁である。	龍泉窯系青磁Ⅰ-4類

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	特徴	備考
483	包含層	青磁	碗	－	(2.3)	－	内）灰オリーブ 5Y5/3 外）灰オリーブ 5Y5/3 断）灰白 5Y7/1	胎土は密で灰白色である。釉は黄色味がかった緑色の透明釉で厚く施釉する。外面口縁部と体部の境に段を有する。口縁部はまっすぐに立ち上げ端部は丸く収める。外面体部に鎬連弁文を施す。	龍泉窯系青磁Ⅰ-5b類
484	包含層	青磁	碗	－	(3.2)	－	内）灰オリーブ 5Y5/2 外）灰オリーブ 5Y5/2 断）灰白 5Y7/1	胎土はやや粗く灰白色である。釉は灰色がかったオリーブ色で透明、厚く施釉されている。内面に少し、外面に大きい貫入がみられる。内面にヘラによる文様がみられる。口縁部に輪花がみられる。口縁部が若干玉縁になっている。	龍泉窯系青磁Ⅰ-4b類
485	包含層	青磁	碗	－	(4.2)	－	内）灰オリーブ 5Y5/2 外）灰オリーブ 5Y5/2 断）灰白 5Y8/1	胎土はやや粗く灰色である。釉は黄色味がかったオリーブ色で残存部で内外面全面に施釉する。口縁部はまっすぐに立ち上げ端部は丸く収める。外面に鎬連弁文を施す。	龍泉窯系青磁Ⅰ-5b類と思われるが、Ⅳ類の可能性も考えられる。
486	包含層	青磁	碗	13.2	(3.1)	－	内）灰オリーブ 5Y6/2 外）灰オリーブ 5Y6/2 断）灰白 5Y7/1	胎土はやや粗く灰色である。釉は青味を帯びた緑色で残存部の口縁部では全面に厚く施釉される。内面には口唇部に2条のヘラによる片彫りの沈線、体部には焼雲文を施す。外面口唇部にも2条の沈線がみられる。口縁部にかかけてはぼまっすぐに立ち上がり口唇部を薄くして端部は丸く収めている。	龍泉窯系青磁Ⅰ-4類
487	包含層	青磁	碗	15.0	(2.7)	－	内）オリーブ黄 外）オリーブ黄 断）	胎土は密で灰色である。釉はオリーブ色がかった灰色で、残存部では内外面ともに全面に厚く施釉される。口縁部はまっすぐに立ち上げ端部は丸く収める。体部外面に鎬連弁文がみられる。	龍泉窯系青磁
488	包含層	青磁	碗	16.0	(3.2)	－	内）オリーブ灰 5GY6/1 外）オリーブ灰 5GY6/1 断）灰白 N7/	胎土はやや粗く黒色の強い灰白色である。釉は青味を帯びた緑色で残存部では全面にやや厚めに施釉される。口縁部は外面が直立に引き出される。外面体部に鎬連弁文を施す。	龍泉窯系青磁Ⅰ-5b類
489	包含層	青磁	碗	14.2	(1.9)	－	内）灰オリーブ 5Y5/3 外）灰オリーブ 5Y5/3 断）灰白 N7/	胎土はやや粗く黒の強い灰色である。釉はやや黄色味がかった緑灰色で透明、残存部の口縁部では内外面全面に施釉される。外面上位に細かい微貫入が見られる。口縁部はまっすぐに引き上げて端部は丸く収めている。	同安窯系青磁Ⅰ-1b類
490	包含層	青磁	碗	16.0	(1.7)	－	内）灰オリーブ 5Y5/3 外）灰オリーブ 5Y5/3 断）灰白 5Y7/1	胎土は密で灰白色である。釉は黄色がかったオリーブ色の透明釉で、残存部では内外面ともに全面に厚く施釉される。内外面ともに細かい貫入がみられる。口縁部は僅かに外反し薄く引き出している。外面体部に鎬連弁文を施している。	龍泉窯系青磁Ⅰ-5b類
491	包含層	青磁	碗	17.4	(3.8)	－	内）灰オリーブ 5Y6/2 外）灰オリーブ 5Y6/2 断）灰白 5Y7/1	胎土は密で灰白色である。釉はくすんだ灰オリーブ色で内外面ともに全面に厚く施釉する。所々貫入がみられる。外面口縁部と体部の境に段を有する。口縁部はまっすぐに立ち上げ端部は丸く収める。外面に鎬連弁文を施す。	龍泉窯系青磁Ⅰ-5b類
492	包含層	青磁	碗	15.0	(2.6)	－	内）灰オリーブ 5Y5/2 外）灰オリーブ 5Y5/2 断）灰白 5Y8/1	胎土はやや粗く灰白色である。釉はくすんだオリーブ色で残存部の口縁部には内外面全面に薄く施釉する。内面口唇部には3条の沈線がみられ、一部2条になる部分もみられる。体部には焼雲文を施している。外面は無文である。口縁部は内面が少しだけ外反する。	龍泉窯系青磁Ⅰ-4類
493	包含層	青磁	碗	17.0	(2.5)	－	内）灰 10Y6/1 外）灰 10Y6/1 断）灰白 5Y8/1	胎土は密で灰白色である。釉は青味を帯びた緑灰色で、残存部では内外面全面にやや厚めに施釉されている。口縁部には2条の沈線がみられる。口縁部はまっすぐに立ち上げ端部は丸く収める。	龍泉窯系青磁Ⅰ-4類か
494	包含層	青磁	碗	16.6	(4.0)	－	内）灰オリーブ 5Y6/2 外）灰オリーブ 5Y6/2 断）灰白 2.5Y7/1	胎土は密で灰白色である。釉は黄色味を帯びた緑色で薄く施釉される。残存部の口縁部付近では全面に施釉される。外面口縁部は釉が少し濃くなっている。外面は無文で内面には蓮華文の片彫りを有する。内面体部上位に1条の沈線を有する。体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部はまっすぐに引き出し丸く収めている。	龍泉窯系青磁Ⅰ-2類
495	包含層	青磁	碗	15.0	(3.8)	－	内）明緑灰 7.5GY7/1 外）明緑灰 7.5GY7/1 断）灰白 7.5Y7/1	胎土はやや粗く灰白色である。釉はやや青味がかった明緑灰色で透明で厚く施釉される。残存部では内外面に施釉する。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。内外面とも無文。	龍泉窯系青磁Ⅰ-1類
496	包含層	青磁	碗	17.4	(2.0)	－	内）灰オリーブ 5Y5/3 外）灰オリーブ 5Y5/3 断）灰白 5Y7/1	胎土は精緻で灰白色である。釉は黄色がかったオリーブ色の透明釉で、内外面ともに全面に施釉する。口縁部と体部との境に段を有する。体部外面に鎬連弁文を施す。	龍泉窯系青磁Ⅰ-5b類
497	包含層	青磁	碗	15.2	(4.9)	－	内）灰オリーブ 5Y5/3 外）灰オリーブ 5Y5/3 断）灰白 N7/	胎土はやや粗く灰白色である。釉は灰色がかったオリーブ色で透明、薄く施釉される。残存部では内外面とも全体に施釉されており、全体に貫入がみられる。器肉は体部下位にいくほど厚くなる。全体的には厚めである。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部端部は丸く収める。	龍泉窯系青磁Ⅰ-1類鎬と思われるが、釉色が青味を帯びた緑ではなく、越州窯系青磁Ⅰ類の特徴である黄緑色を呈する。
498	包含層	青磁	碗	17.0	(6.5)	－	内）明緑灰 7.5GY7/1 外）明緑灰 7.5GY7/1 断）灰白 5Y7/1	胎土は密で白に近い灰色を呈し黒い細粒を含む。釉は空色味の強い緑灰色で、残存部では内外面ともに全面に厚く施釉される。高台とその内部は露胎し赤く発色している。体部は内湾して口縁部までなだらかに立ち上がり、端部は丸く収める。底部の器肉は厚く、高台の断面は四角形である。内外面ともに無文。	類型は不明。

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm)口径	器高	底径	色調	特徴	備考
499	包含層	青磁	碗	－	(5.2)	6.4	内）黄オリーブ 5Y7/1 外）黄オリーブ 5Y7/1 断）灰白 5Y7/1	胎土はやや密で灰白色である。釉は黄色味がかったオリーブ色で内面は全面に施釉。外面は基本的に高台は露胎。一部高台内部まで釉がつき，一部底部下位まで露胎する。内外面ともに貫入がみられる。内面体部にヘラによる片彫りの文様がみられるが，飛雲文か草花文かは残存部が少なく判断できないが草花文に近いようである。見込みと体部との境に沈線状の段を有する。高台は断面四角形で底部の器肉は厚い。	龍泉窯系青磁Ⅰ-1～4類のいずれかである。
500	包含層	青磁	碗	－	(6.6)	－	内）灰オリーブ 5Y5/3 外）灰オリーブ 5Y5/3 断）灰白 5Y7/1	胎土はやや密で灰白色である。釉は黄色がかったオリーブ色で透明釉で，残存部では内外面ともに全面に厚く施釉される。内外面とも細かい貫入がみられる。体部は内湾しながら立ち上がり口縁部がわずかに外反する。口縁は薄く引き出している。外面体部に鎬連弁文を施している。	龍泉窯系青磁Ⅰ-5b類
501	包含層	青磁	碗	－	(3.5)	－	内）オリーブ黄 5Y6/3 外）オリーブ黄 5Y6/3 断）灰白 5Y7/1	胎土はやや密で灰白色である。釉は同安窯特有の黄色味の強い船色ガラス質で，残存部の体部中上位は全面に施釉する。体部は若干内傾に屈曲。内面上位に2条の沈線がみられる。外面に細かい微目がみられる。残存部上位で微目が切れている。	同安窯系青磁Ⅰ-1b類
502	包含層	青磁	碗	－	(2.2)	6.4	内）明オリーブ灰 5GY7/1 外）明オリーブ灰 5GY7/1 断）灰白 N8/1	胎土は密で灰色を呈し黒い細粒を含む。釉は明るいオリーブ色が白濁した乳白色でやや厚く施釉される。高台内部と高台畳付け内側の釉を削り取っており，削り取った境が赤茶色に発色する。高台内側の釉削り部分に砂目跡が残る。高台は断面四角形であるが畳付けの先端が断面三角形になっている。内面見込みにカプトハバ文様がみられる。	類型は不明。
503	包含層	青磁	碗	－	(1.7)	4.8	内）灰オリーブ 5Y5/4 外）灰白 5Y7/1 断）灰白 5Y7/1	胎土は精緻で灰色である。釉は黄色味の強い緑色で船色ガラス質である。内面と外面の一部施釉されるが，高台部にはほとんど施釉されておらず体部の釉が垂下したものと考えられる。内面見込みの高くなった部分は釉が残げている。見込みには施文されない。内面見込みと体部との境に段を有する。高台は台形状の厚い高台で体部との境に段を有する。底部の器肉が比較的厚い。	同安窯系青磁Ⅰ-1類
504	包含層	青磁	碗	－	(1.9)	6.2	内）灰オリーブ 7.5Y6/2 外）灰オリーブ 7.5Y6/2 断）灰白 N8/1	胎土はやや粗く灰白色である。釉はくすんだオリーブ色の透明釉で，残存部では内面全体と外面は体部のみ薄く施釉する。見込みと体部の境に沈線状の段がみられる。底部の器肉は厚い。	類型は不明。
505	包含層	青磁	碗	－	(3.2)	4.9	内）明緑灰 7.5GY7/1 外）明緑灰 7.5GY7/1 断）灰白 N8/	胎土は精良で緻密，白に近い灰白色である。釉は青味を帯びた緑色で透明である。内面に全て，外面は高台までに施釉がみられる。一部高台に垂下がみられるが気意につけたものはないだろう。高台が厚く，高台の裾部分と見込み部分との境に段を有する。内面見込みに薄い釉を施されている。内面体部にも施文がみられる。外面は無文。見込みと体部との境に段を有するが，釉により表面はなだらかである。体部はなだらかに内湾気味に立ち上がる。高台内部に一部砂のようなものが付着する。所々赤茶色に変色する。	龍泉窯系青磁Ⅰ-2a類
506	包含層	青磁	皿	－	(0.8)	6.2	内）灰オリーブ 7.5Y6/2 外）灰白 5Y7/1 断）灰白 5Y8/1	胎土は粗く灰白色である。釉は特有の船色とは少し異なり，少しくすんだ灰オリーブ色である。底部は露胎する。外面露胎部と断面の色が違う。外面体部下位は内傾に屈曲。見込みには櫛描きによるジグザグ文様を有する。	同安窯系青磁Ⅱ-1類
507	包含層	青磁	皿	－	(0.9)	5.0	内）オリーブ 5Y5/4 外）灰白 5Y7/1 断）灰白 5Y7/1	胎土は粗く灰白色である。釉は同安窯特有のやや黄色味の強い船色ガラス質で少し厚めに施釉する。外面体部下半と底部には施釉されない。体部下位が屈曲しているが釉により表面はなだらかである。見込みにヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様がある。	同安窯系青磁Ⅱ-1b類
508	包含層	青磁	皿	－	(0.8)	2.8	内）明オリーブ灰 2.5GY7/1 外）灰白 5Y7/1 断）灰白 N7/	胎土は粗く灰白色である。断面と外面露胎部分の色調が異なる。しかし同安窯系青磁には化粧土がないため汚れの可能性も考えられる。釉は特有の船色とは少し異なり少しくすんだオリーブ灰色である。底部は露胎する。底部外面下位に釉が残げている所がある。外面体部に下位が屈曲している。見込みにはヘラによる片彫りと櫛による ジグザグ文様を有する。	同安窯系青磁Ⅱ-2類
509	包含層	染付青花	碗	－	(2.3)	－	内）灰白 5Y8/2 外）灰白 5Y8/2 断）灰白 2.5Y8/2	胎土は比較的密でクリーム色である。釉は内外面ともに全面に施釉する。内外面に染付けの文様がみられる。細かい貫入がみられる。	
510	包含層	染付青花	碗	－	(1.2)	3.8	内）明オリーブ灰 2.5GY7/1 外）明オリーブ灰 2.5GY7/1 断）灰白 10YR8/2	胎土は粗く灰色である。釉は空色味がかった乳緑色で白濁している。残存部では内外面全面に施釉する。見込みと外面体部には文様が施される。底部には砂が溶着している。	染付皿Ｅ群
511	包含層	瀬戸	皿	－	(1.7)	－	内）灰オリーブ 5Y5/3 外）灰オリーブ 5Y5/3 断）灰白 2.5Y8/2	胎土は粗く灰白色である。風化が激しく釉も剥げている所が多い。残存する釉は濃いオリーブ色でザラザラになっている。折り縁の口縁である。瀬戸の菊花皿である。	
512	包含層	瀬戸か	深皿	28.8	(3.8)	－	内）淡黄 2.5Y8/3 外）淡黄 2.5Y8/3 断）灰白 2.5Y8/2	胎土は密でクリーム色に近い。釉は薄い黄色の透明で，残存部では内外面ともに全面にごく薄く施釉される。口縁部内面に段を有する。古瀬戸の深皿か。	
513	包含層	備前？	擂り鉢	－	(4.5)	－	内）褐灰 外）褐灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。内面に9条の条線がみられる。須恵器のような焼成。	
514	包含層	備前	擂り鉢	31.0	(9.9)	－	内）褐灰 外）褐灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。内面に7条の条線がみられる。	Ⅱ～Ⅲ期

表４　Ⅰ区出土遺物観察表（瓦類）

図版番号	出土地点	器形	全長	全幅	全厚	色　調	特　徴	備考
61	集石遺構	軒平瓦	(7.0)	(5.0)	2.0	内）灰 外）灰	チャートの粗粒砂を含む。瓦頭幅6cm。軒平瓦の瓦頭。周縁はやや広く高い素文縁で、内区に三巴文を飾ったものである。上帯ナデ、下帯には1条の沈線がみられ側帯には指で強くナデた痕跡が残る。三巴の頭の先は尖っており、内高で尾が長い。包み込み技法。	
62	集石遺構	平瓦	(7.0)	(5.0)	2.0	内）灰白 外）灰白	細粒砂を少量含む。凹面布目痕。凸面太い繊維の圧痕。凸面側の角を面とる。	検出面№12
63	集石遺構	平瓦	(14.3)	(6.5)	1.8	内）灰 外）灰	精選された胎土。凹面布圧痕。凸面ナデ。凹面側の角面取り。	内
82	SE1	平瓦	(18.2)	(18.1)	1.7	内）灰 外）灰	細・粗粒砂を含む。凹面布圧痕。凸面ナデ。凹面の短辺角は面取り。	内
106	SE1	丸瓦	(8.1)	13.1	2.3	内）黒褐 外）褐灰	精選された胎土。須恵器の焼成具合。凹面布目圧痕。凸面ナデ。凸面に自然釉。	2面目№1
107	SE1	平瓦	(8.7)	(6.9)	1.8	内）灰 外）灰	精選された胎土。凹面布圧痕。凸面ナデ。凹面側の角は面取り。須恵器のような焼成。	内
108	SE1	丸瓦	(17.2)	(12.7)	1.6	内）灰 外）灰	精選された胎土。凹面布目圧痕。凸面ナデ。凹面側角は面取り。	2面目№3
109	SE1	軒平瓦	(6.7)	(11.2)	5.0	内）灰 外）灰	長石、チャート他の細・粗粒砂を多く含む。瓦頭幅約4.5cm、U字の隆帯を貼付並列して瓦頭文（朝顔文）を形成する。包み込み技法による。	内
110	SE1	丸瓦	32.2	13.0	1.7	内）にぶい赤褐 外）灰赤	尾幅9.5cm、頭幅13.5cm。細粒砂を含む。須恵器のような焼成。凹面に布目圧痕。凸面ナデ。凸面尾端より4cm前後のところに重ね部の段がみられる。4～1mm。凹面にも尾端から7cm程のところに僅かな段が認められる。凹面側の角は面を取る。	2面目№15・赤変
111	SE1	平瓦	(7.5)	(15.9)	2.4	内）灰白 外）灰白	精選された胎土。凹面布圧痕。凸面ナデ。下地に叩きあり。他の平瓦より厚く滑面も強い。	2面目№17・赤変
112	SE1	平瓦	(10.2)	(18.2)	1.9	内）浅黄橙 外）浅黄橙	砂粒をほとんど含まない。凹面布圧痕。凸面ナデ調整。縦方向に条線が走る。	2面目№6
113	SE1	平瓦	(18.5)	(8.1)	2.0	内）橙 外）橙	細・粗粒砂を少量含む。凹面布圧痕。凸面ナデ。	2面目№4
114	SE1	平瓦	(24.3)	(9.5)	1.7	内）灰 外）灰	細粒砂を含む。凹面側の角を5mm幅で面取り。凹面布目圧痕。凸面ナデ指頭圧痕により凹凸が認められる。	2面目№17・赤変
115	SE1	平瓦	(19.5)	(15.4)	2.0	内）灰白 外）灰白	砂粒を少量含む。凹面布圧痕。凸面ナデ。凹凸両面角は面取り。	2面目№14・赤変
116	SE1	平瓦	29.5	21.0	2.0	内）橙 外）橙	チャートの小礫、粗粒砂を含む。凹面に粗目の布圧痕（1～3mm）。凸面はナデ仕上げ、所々に指頭圧痕が認められる。凹面側角を面取り。	2面目№2・赤変
117	SE1	平瓦	30.0	19.9	2.5	内）赤橙 外）橙	細粒砂を少量含む。凹面に目の粗い布圧痕跡。凸面はナデ仕上げ、所々に指頭圧痕が認められる。凹面側角を面取り。	2面目№7・8
118	SE1	軒平瓦	28.9	19.7	2.9	内）橙 外）橙	チャート他の粗・細粒砂を含む。瓦頭幅4.5cm、瓦頭部に向かって両面に粘土を貼り厚くする。瓦頭文様はU字状を呈する隆帯（朝顔文）。平瓦よりも厚くつくられ、布目は凹面のみならず側面にも認められる。凹面長側縁角は面取り。	2面目№7・8
119	SE1	平瓦	28.1	20.0	2.1	内）灰黄 外）灰黄	細粒砂を含む。凹面布圧痕＋ナデ。凸面ナデ、指痕も認められる。	
172	SK7	丸瓦	(18.4)	(6.7)	2.0	内）灰 外）灰	精選された胎土。凹面に布目圧痕。凸面ナデ。側縁面をとる。	
173	SK7	丸瓦	(10.8)	(7.7)	1.8	内）灰 外）灰	チャート他の細・粗粒砂を含む。凹面に布目圧痕。凸面ナデ。	
174	SK7	平瓦	(8.6)	(6.9)	1.4	内）灰 外）灰	精選された胎土。須恵器の仕上がり。凹面布目圧痕。凸面ナデ。	
175	SK7	平瓦	(9.4)	(7.3)	1.8	内）にぶい橙 外）にぶい橙	チャート他の細・粗粒砂を多く含む。凹面に布目圧痕。凸面縄席文。	
176	SK7	平瓦	(8.5)	(9.2)	1.8	内）灰 外）灰	チャート他の細・粗粒砂を含む。凹面に布目圧痕。	
177	SK7	平瓦	(8.1)	(6.3)	2.3	内）灰 外）灰	細・粗粒砂を多く含む。凹面に布目圧痕。凸面ナデ。	
178	SK7	平瓦	(8.2)	(10.2)	1.6	内）灰白 外）灰白	チャート他の細・粗粒砂を多く含む。凹面に布目圧痕。凸面ナデ。	
179	SK7	平瓦	(12.4)	(12.9)	2.8	内）にぶい橙 外）橙	チャート他の細・粗粒砂を含む。凹面に布目圧痕。凸面タタキ。	
180	SK7	平瓦	(16.5)	(10.2)	1.6	内）灰白 外）暗灰	チャート他の粗粒砂を含む。凹面に布目圧痕。凸面ナデ。側縁稜部面取りなし。	
251	SK16	軒平瓦	(14.8)	26.5	2.5	内）灰 外）灰	精選された胎土。凹面布目圧痕、モコツ痕なし。凸面平行タタキ。瓦頭部に宝相華文。瓦頭長7.7cm、上幅2.7cm、下幅5.0cm。	
254	SD2	丸瓦	(11.6)	(9.7)	1.8	内）暗灰 外）暗灰	細・粗粒砂を含む。内面凹面布目圧痕。側面は面を取る。	
255	SD4	平瓦	(3.7)	(9.1)	1.4	内）灰白 外）灰白	細・粗粒砂を含む。凹面布目圧痕。凸面ナデ。	
261	SD2	平瓦	(7.2)	(5.4)	1.4	内）黄灰 外）にぶい黄橙	凹面布目圧痕＋ナデ。側面は面を取る。	
283	P3	平瓦	(9.1)	(14.2)	1.8	内）暗灰 外）灰	チャート他の細粒砂を含む。凹面に布目圧痕。凸面ナデ。	
520	包含層	丸瓦	(9.4)	18.9	2.2	内）灰 外）灰	凸面ナデ。凹面布目圧痕。須恵器のような焼成。側面は面を取る。	
521	包含層	瓦頭	14.0	15.0		内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャート他の粗粒砂を含む。直径14×15cm、連珠三巴文。径9mm の珠文21個配置し、内側に巴文が施される。尾は長く、隠線に達する。	

表５　Ⅰ区出土遺物観察表（木製品）

図版番号	出土地点	器種	全長	全幅	全厚	樹　種	特　徴	備考
120	SE1	井戸枠（隅柱）	53.5	10.4	7.6	ヒノキ科アスナロ属	2分割材（丸木）を使用。1面に丸木の素材面を残し、残り3面を平坦に削って成形する。木取りは他の3柱も同様である。井桁を支える四隅の柱のうちの1本であり、上端を杭の先端状に削り、尖らせる。上端より18～24cmの部位に短軸（2.6～2.8cm）×長軸（5.2～5.6cm）の長方形のホゾ穴を穿つ。ホゾ穴の深さは4～5cm。ホゾ穴は L 字型に直行し、貫通しない。	杭1
121	SE1	井戸枠（隅柱）	50.8	7.7	6.3	ヒノキ科アスナロ属	井桁を支える四隅の柱のうちの1本であり、上端を杭の先端状に削り、尖らせる。上端より15～21cmの部位に短軸（2.5～2.8cm）×長軸（5.6～5.8cm）の長方形のホゾ穴を穿つ。ホゾ穴は内部で L 字型に直行し、貫通しない。	杭2
122	SE1	井戸枠（隅柱）	45.0	8.9	5.5	ヒノキ科アスナロ属	井桁を支える四隅の柱のうちの1本であり、上端を杭の先端状に削り、尖らせる。上端より9～15cmの部位に短軸（2.8～3.2cm）×長軸（5.0～6.0cm）の長方形のホゾ穴を穿つ。ホゾ穴は内部で L 字型に直行している。素材面のホゾ穴の延長線上に穴が開いた部分があるが、貫通を意図したものではない。	杭4
123	SE1	井戸枠（隅柱）	51.3	11.1	9.9	ヒノキ科アスナロ属	井桁を支える四隅の柱のうちの1本であり、上端を杭の先端状に削り、尖らせる。上端より15～21cmの部位に短軸（2.8～3.6cm）×長軸（5.2～5.8cm）の長方形のホゾ穴を穿つ。ホゾ穴の深さは約4cm。ホゾ穴の方向は直行するが、段違いとなっており貫通していない。また、上端より8.7～12.5cmの部位に、1.7×3.6cmの平面長方形、深さ2cmのホゾ穴が残る。	杭3
124	SE1	井戸枠（横桟）	82.7	4.9	2.0	ヒノキ科アスナロ属	厚さ2cm・幅5cm程度の板目の板材であり、両端にホゾ穴に差し込んだ痕跡が確認される。両端を削って細く造り出している。板材の表面には鱗状の加工痕が観察される。	北側
125	SE1	井戸枠（横桟）	83.2	5.2	2.9	ヒノキ科アスナロ属	厚さ2cm・幅5cm前後の板目の板材であり、板状の木をそのまま差し込んだもの。板材の表面には加工痕が観察される。	東側
126	SE1	井戸枠（横桟）	73.5	5.3	1.9	ヒノキ科アスナロ属	厚さ2cm・幅5cm程度の板目の板材であり、両端にホゾ穴に差し込んだ痕跡が確認される。板状の木をそのまま差し込んだもの。板材の表面には加工痕が観察される。	南側
127	SE1	井戸枠（横桟）	63.7	4.5	3.1	ヒノキ科アスナロ属	厚さ3cm・幅4cm程度の板目の板材であり、両端にホゾ穴に差し込んだ痕跡が確認される。板状の木をそのままホゾ穴に差し込み、縦板を支える横桟とする。	西側
128	SE1東側	杭	(21.9)	4.9	4.0	マツ科マツ属（二葉松類）	直径4.5～5cmの棒状の木の先端を加工し杭状に尖らせる。加工部以外は樹皮を残す。折れており、全長不明。	

表６　Ⅰ区出土遺物観察表（石器・石製品・石鍋・土錘・鉄類・窯壁片　他）

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm)				色調	特徴	備考
				口径	器高	底径				
59	集石遺構	石製品	石鍋		1.5			黒灰	滑石製の石鍋。底部付近。5mm大の穿孔あり。外面黒色。内面は擦痕顕著。	
64	集石遺構	窯壁	窯壁片					黒灰	色調は黒～灰白。内外は海綿状を呈し気泡が多い。	
100	SE1	土製品	土錘	全長 5.1	全幅 1.4	孔径 0.6	重量 8.7g	内）浅黄橙 外）浅黄橙	砂粒をほとんど含まない。ナデ調整。両端面をとる。0.6cmの孔を穿つ。管状土錘。	2面目出土
171	SK7	鉄	不明					橙	表面海綿状を呈する。	
252	SK16	窯壁	窯壁片	(9.2)	(4.5)				砂粒を含まない。中にモミ、ワラ状の圧痕。	
253	SK16	窯壁	窯壁片	(9.6)	(8.3)				砂粒を含まない。中にモミ圧痕が多くみられる。粘接性を良くするためにワラ・モミなどを入れたものであろう。被熱部はガラス状を呈する。	
256	SD2	窯壁	窯壁片					赤橙		
269	SD13	石製品	鋳型					赤褐	４条の沈線がみられる。鋳型の可能性がある。	
				残存長	全幅	全厚	重量			
325	SR3	石器	磨製石斧	16.0	7.1	3.8	850g	緑灰	御荷鉾緑色岩製の太形蛤刃石斧の基部。刃部欠損。	
				口径	器高	底径				
515	包含層	石製品	石鍋		(1.1)	1		内）灰 外）灰	鍔の幅は1.5cm。身の厚さは1.3cm。	
516	包含層	石製品	石鍋		(3.1)			内）灰 外）灰	石鍋胴部。外面に多角形状の整形痕がみられる。身の厚さ8mm。	
517	包含層	石製品	石鍋		(4.5)			内）灰白 外）灰	断面紅色。厚さは1.6cm。外面に条線がみられる。	
518	包含層	石製品	石鍋		(8.0)			内）灰 外）灰		
519	包含層	石製品	石鍋		(3.3)	17		内）灰 外）灰	下胴部と底部に6～7mmの孔が2つみられる。石鍋転用温石。	外底は激しく煤ける。
				全長	全幅	全厚	重量			
522	包含層	石製品	硯	4.4	3.9	0.9			粘板岩製。幅3.75cm、厚さ8mm、ドテ幅2～2.5mm、ドテ高1～1.5mm。	
523	包含層	石器	石鏃	2.2	1.6	0.3	0.7g		サヌカイト。基部はＶ字状に抉れる。	
524	包含層	鉄製品	不明	7.0	1.5	1.0				
525	包含層	鉄製品	不明	8.5	1.2	0.3				
526	包含層	鉄製品	不明	10.8	1.2	0.3				
527	包含層	鉄製品	不明	10.4	2.2	1.4				
528	包含層	鉄製品	不明	7.3	8.0					

表７　Ⅱ区出土遺物観察表（土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器）

図版番号	出土地点層位	種類	器種器形	法量(cm) 口径	器高	底径	色調	特徴	備考
529	SD15	白磁	椀	17.0	(3.7)	－	内）灰白 5Y7/2 外）灰白 5Y7/2 断）灰色 5Y/1	胎土は緻密で黒い細粒を含む。釉は黄又はオリーブ色がかった灰白色で全体的に薄い。残存部では内外面ともに全体に施釉される。器肉は全体に薄いつくり。口縁部は外反させ端部を水平にしている。体部外面には気泡が少し認められる。内面口縁部近くにロクロ痕かと思われるものがみられる。	Ⅴ-4類の可能性が高い。
530	SD15	土師器	坏	－	(1.3)	7.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
531	SD15	土師器	坏	－	(1.3)	8.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
532	SD17	土師器	坏	－	(1.7)	8.0	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
533	SD21	土師器	椀	－	(0.9)	(6.6)	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。断面台形状の貼り付け高台。	
534	包含層	土師器	小皿	7.4	－	5.0	内）淡橙 外）浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
535	包含層	土師器	坏	13.8	(3.3)	－	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
536	包含層	土師器	坏	13.0	(2.9)	－	内）褐灰 外）にぶい黄橙	精選された胎土。口縁部外方に屈曲。内外面ヨコナデ。	
537	包含層	土師器	坏	15.6	(3.0)	－	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
538	包含層	土師器	坏	16.2	(3.7)	－	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
539	包含層	土師器	椀	－	(1.1)	6.2	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。円盤状高台。底部糸切り。	
540	包含層	土師器	椀	－	(2.6)	6.1	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。僅かにチャートの粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
541	包含層	土師器	坏	－	(2.5)	6.2	内）褐灰 外）黒	精選された胎土。外面ナデ。内面ヘラミガキ。	外面激しく傷ける。
542	包含層	土師器	坏	－	(2.9)	5.6	内）浅黄橙 外）浅黄橙	粗い胎土。器表の荒れが激しい。	
543	包含層	土師器	坏	－	(1.9)	9.0	内）灰褐 外）灰褐	精選された胎土。内外面ヨコナデ。静止糸切り。	内外面傷ける。
544	包含層	土師器	坏	－	(1.6)	9.0	内）灰褐 外）灰褐	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	内外面傷ける。
545	包含層	土師器	坏	－	(1.8)	6.8	内）浅黄橙 外）浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
546	包含層	瓦器	椀	－	(4.2)	－	内）灰 外）灰白	細・粗粒砂を含む。口縁部内外面及び体部内面ヨコナデ。体部外面に指頭圧痕がみられる。	
547	包含層	瓦器	椀	15.4	(3.6)	－	内）灰白 外）黒	チャートの細・粗粒砂を含む。焼成は炭素吸着不良で瓦器椀の未製品か。内面沈線がみられる。在地産を示す資料。	
548	包含層	須恵器	鉢	21.2	(4.2)	－	内）灰 外）灰	細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。口縁端部摘み出し。	
549	包含層	須恵器	壺	11.4	(7.7)	－	内）灰 外）灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
550	包含層	青磁	椀	14.2	(3.6)	－	内）灰オリーブ 5Y5/2 外）灰オリーブ 5Y5/2 断）灰白 5Y7/1	胎土は粗く灰白色である。釉は黄色がかった灰オリーブ色で残存部では内外面全面に施釉されているが、口唇部や文様部分は剥がれており所々しか残っていない。内面に飛雲文と思われる文様がみられる。粗悪品か。	龍泉窯系青磁Ⅰ-4類か。

第Ⅳ章　考察

母代寺土居屋敷遺跡出土の貿易陶磁器

Ⅰ区

当遺跡において出土した貿易陶磁器片はおよそ180点を数え、多くは包含層からの出土である。Ⅰ区における基本層序から、古代末～中世前期の遺構検出面はⅦ層上面に相当し、遺物包含層はⅣ～Ⅵ層と考えられるが、包含層出土の貿易陶磁器に層位による時期差を看取できなかったため、当稿においては包含層一括資料として扱い、個々の遺物の特徴を概説していくこととする。

※貿易陶磁器の分類は『土佐神社西遺跡・土佐神社』(2006　高知市教委）所収の一覧を参照した。

1．遺構出土の貿易陶磁器

Ⅰ区において貿易陶磁器出土の主な遺構としては、SK7・16、SS1があげられ、他はP365から青磁片1点を出土している。

SK7はSS1の下面に位置する遺構で、検出高は33.08mを測る。多量の土師器（底部回転糸切り）・須恵器片などの他に、瓦器椀や瓦片も出土している。板材と多くの礫を検出したことから、水留め遺構の可能性も考えられた。貿易陶磁器は白磁片5点を出土している。図示し得たのは168・169である。168は白磁碗Ⅳ類で、玉縁は三角形に近く、口縁下に1条の沈線による段を有している。169は白磁碗Ⅴ類で、口縁部は外反し、端部を丸く収めている。他の2点もⅣ～Ⅴ類（12世紀代）の細片と考えられるが、下層（2面目）から出土した白磁皿（167）はC類（15世紀～16世紀前半代）と考えられ、時期差を伴う。共伴遺物として瓦質土器の脚付きの羽釜（13世紀後半代）を出土している。

SK16は不整楕円形状を呈した土坑で、検出高は33.10mを測る。多量の土師器（底部回転糸切り）・須恵器片などの他に、瓦器椀や少量の瓦片も出土している。板材と多くの礫を検出したことから、水留め遺構の可能性も考えられた。貿易陶磁器は白磁片3点を出土している。図示し得たのは249・250である。249・250の口縁部は玉縁状を呈し、口縁下に一条の沈線による段を有している。もう1点は底部であり、高台は幅広で畳付内面の削り出しは浅く、器肉は厚い。いずれも白磁碗Ⅳ類と考えられる。

SS1はSK7の上面に位置する集石遺構で、検出高は33.27mを測る。多量の土師器（底部回転糸切り）・須恵器片などの他に、瓦器椀や瓦片も出土している。遺構の検出範囲周辺も含めた貿易陶磁器の出土数は12点で、白磁・青磁片ともに6点ずつを数える。図示し得たのは49～52である。49は口縁部が僅かに外反し、端部を丸く収めている。体部内面中位に一条の沈線が認められる。白磁碗Ⅸ類の可能性を残しており、その場合は13世紀後半～14世紀前代と考えられる。50は白磁碗Ⅳ類の底部と考えられ、高台は幅広で畳付内面の削り出しは浅く、器肉は厚い。他の白磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ白磁碗Ⅳ～Ⅴ類の細片と考えられる。51は同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類で、外面に細

かい櫛描文、内面に櫛描きによるジグザグ文様とヘラによる片彫りが施されており、12世紀後半～13世紀前半代と考えられる。52は類型不明の青磁碗の底部である。見込みと体部境に段を有し、見込みに施文が認められる。他の青磁片はほぼ龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2・Ⅰ-4類の細片であり、12世紀後半～13世紀前葉頃と考えられる。周辺から13世紀後半～14世紀前半代と考えられる龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5b類の細片1点を出土している。

Ⅰ区における遺構出土の貿易陶磁器についての概要は以上であるが、中心となる時期は、共伴遺物等も含めた年代観として、およそ12世紀～13世紀後半代として捉えることができる。しかしながら遺構出土の貿易陶磁器は、SK7出土の白磁皿（C類）を例外として、いずれも細片であることを考慮しなければならない。

尚、当遺跡において注目すべき遺構の一つにSE1の存在がある。調査区（Ⅰ区）の中央東寄りに位置し、検出高は32.79mを測る。多量の土師器（底部回転糸切り）・須恵器片などの他に、瓦器椀や瓦片も出土しているが、遺構の掘形も含めて貿易陶磁器の出土は確認していない。遺物の出土状況などから井戸の廃絶儀礼等が行われた可能性が考えられるが、当遺跡において、廃絶儀礼等に貿易陶磁器が使用されなかった可能性が窺われる資料として注目したい。

2．包含層出土の貿易陶磁器

Ⅰ区における基本層序より、古代末～中世前期の遺構検出面はⅦ層上面と考えられ、Ⅳ～Ⅵ層は遺物包含層に相当する。Ⅳ（Ⅲ）層は灰黄色シルト、Ⅴ（Ⅳ）層は灰茶褐色シルト、Ⅵ（Ⅴ）層は濃茶褐色シルトである。以下、遺物の取り上げ順に出土した貿易陶磁器の概要について述べる。

Ⅲ層出土の貿易陶磁器は16点で、白磁・青磁片ともに8点ずつを数える。図示し得たのは455・461・480・489・493である。455は類型不明の白磁壺の口縁部と考えられる。461は白磁碗Ⅳ類で、玉縁は細長く、外面上位に一条の段を有している。他の白磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ白磁碗Ⅳ類の細片と考えられる。480は類型不明の青磁皿（坏）である。口縁部は外反し、端部は丸く収めている。体部外面に一段の屈曲部がみられ、腰折れの皿（坏）の可能性が考えられる。489は同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類である。口縁部は真っ直ぐに引き上げて、端部は丸く収めている。外面上位に細かい櫛描文がみられる。493は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4類の可能性が考えられる。口縁部は真っ直ぐに立ち上げ、端部は丸く収めている。口縁部内面に2条の沈線がみられる。他の青磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ同安窯系Ⅰ-1b類と龍泉窯系Ⅰ-2・Ⅰ-4類の青磁碗の細片と考えられる。

Ⅲ～Ⅳ層にかけて出土した貿易陶磁器は24点で、白磁片15点、青磁片9点を数える。図示し得たのは456・457・467・470・475・476・491である。456は類型不明の白磁壺と考えられる。残存部下位は外湾、中位は中湾、上位は外湾し、口縁部は玉縁状を呈していると考えられる。457はⅣ類またはⅥ-1類と考えられる白磁皿である。体部内面上位で内湾し、屈曲部に段を有しており、12世紀代と考えられる。467は白磁碗Ⅳ類で、口縁部は玉縁状を呈している。470は白磁碗Ⅴ類で、口縁部は外反し、端部は丸く収めている。体部内面下位に沈線を有している。475・476は白磁碗Ⅷ類（12世紀～13世紀初頭頃）で、見込みの釉を輪状に掻き取り、見込みと体部境に段を有している。他の白磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ白磁碗Ⅳ～Ⅴ類の細片と考えられる。491は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-

5b類である。口縁部は真っ直ぐに立ち上げ、端部は丸く収めている。体部外面に鎬蓮弁文を施しており、481と同一個体の可能性を含んでいる。他の青磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4・Ⅰ-5b類の細片と考えられる。

Ⅳ層出土の貿易陶磁器は11点で、白磁片5点、青磁片3点、青花片（染付）2点、他1点（天目茶碗）を数える。図示し得たのは473・503・509・510である。473は白磁碗Ⅴ類で、口縁部は外反し、端部は丸く収めている。体部はやや内湾気味で、体部上位で外反している。他の白磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ白磁碗Ⅴ類の細片と考えられる。503は同安窯系青磁碗Ⅰ-1類の底部で、他は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5b類と類型不明である。509は青花（染付）碗の細片で、15世紀～16世紀代と考えられる。510は青花（染付）皿のE群で、碁笥底である。16世紀後半代と考えられる。

Ⅳ～Ⅴ層にかけて出土した貿易陶磁器は9点で、白磁片6点、青磁片3点を数える。図示し得たのは463・466・469・471・479・487である。463・466・469・471・479は白磁碗Ⅳ類である。463の玉縁は細長く、口縁部に重ね焼き痕が1ヶ所みられる。469は口縁下に1条の沈線による段を有している。471は体部上位に一稜の段を有している。479は底部であり、高台は幅広で畳付内面の削り出しは浅く、器肉は厚い。見込みと体部境に沈線状の段を有している。他も白磁碗Ⅳ類と考えられる。487は龍泉窯系青磁碗（Ⅰ-5類）である。口縁部は真っ直ぐに立ち上げ、端部は丸く収めている。体部外面に鎬蓮弁文を施している。他は同安窯系青磁皿Ⅰ-2類と類型不明である。

Ⅴ層出土の貿易陶磁器は9点で、白磁片3点、青磁片6点を数える。図示し得たのは472・481・502・506・508である。472は白磁碗Ⅳ類で、玉縁状の口縁端部は比較的尖っている。他はⅣ～Ⅴ類と考えられる細片と類型不明である。481は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5b類である。口縁部は真っ直ぐに立ち上げ、端部は丸く収めている。体部外面に鎬蓮弁文を施しており、491と同一個体の可能性を含んでいる。502は類型不明の青磁碗の底部である。高台は断面四角形で畳付の先端は断面三角形となり、高台内側の釉の削り出し部分に砂目跡が残っている。506・508は同安窯系青磁皿Ⅰ-2類である。体部外面下位は内側に屈曲し、見込みには櫛描きによるジグザグ文様を施文している。508はヘラによる片彫りが施されており、12世紀後半～13世紀前半頃と考えられる。他は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2・Ⅰ-4類と類型不明である。

Ⅵ層出土の貿易陶磁器は白磁片5点を数える。図示し得たのは464である。464は白磁碗Ⅳ類で、体部外面にロクロ痕がみられる。他の白磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ白磁碗Ⅳ～Ⅴ類の細片と考えられる。

Ⅶ層出土の貿易陶磁器は白磁片2点を数える。白磁碗Ⅴ類と類型不明である。

Ⅶ～Ⅷ層にかけて出土した貿易陶磁器は38点で、白磁片9点、青磁片29点を数える。図示し得たのは458・460・474・477・482・486・490・492・494・495・496・498・499・500・501・505である。458は白磁皿Ⅳ類またはⅥ類と考えられる。体部上位で内湾し、屈曲部に段を有しており、口縁端部は丸く収めている。体部外面上位に2条の沈線がみられる。12世紀～13世紀初頭頃と考えられる。460は白磁皿Ⅸ類と考えられる。口縁部は外反し、体部は内湾している。口縁端部のみ露胎の「口禿げの白磁」であり、13世紀後半～14世紀前半頃と考えられる。474は類型不明の白磁碗の底部である。見込みは化粧土がかけられている可能性があり、また高台は比較的高く、付け高台と思われる。477

は白磁碗Ⅳ類の底部であり、高台は幅広で畳付内面の削り出しは浅く、器肉は厚い。見込みに融着物がみられる。他の白磁片はⅧ類の底部1点と数点の類型不明を含むが、ほぼ白磁碗Ⅳ類の細片と考えられる。501は同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類である。体部は若干内側に屈曲し、内面上位に2条の沈線と櫛描きによるジグザグ文様とヘラによる片彫りがみられる。外面上位に細かい櫛描文を施している。495・498は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-1類で、13世紀代と考えられる。495の体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収めている。内外面ともに無文である。498の体部は内湾して口縁部までなだらかに立ち上がり、端部は丸く収めている。底部の器肉は厚く、高台の断面は四角形状を呈している。内外面ともに無文であり、495と同一個体の可能性が考えられる。494・499・505は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類である。494の口縁部は真っ直ぐに引き出し、端部は丸く収めている。体部は内湾気味に立ち上がる。外面は無文で、口縁部内面上位に1条の沈線と、体部内面に蓮華文の片彫りを施している。499は底部で、高台は断面四角形で器肉は厚い。見込みと体部境に沈線状の段を有している。体部内面に蓮華文の片彫りを施しており、494と同一個体の可能性が考えられる。505は底部で、高台が厚く、体部との境に段を有している。高台内部に一部砂のようなものが付着する。見込みと体部境にも段を有し、体部はなだらかに立ち上がっている。482・486・492は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4類である。482の口縁端部は小さな玉縁状を呈しており、口縁部と体部内面にそれぞれ2条のヘラによる片彫りを施している。486の口縁部は真っ直ぐ立ち上がり、口唇部を薄くして、端部は丸く収めている。体部内面に2条の沈線と飛雲文を施している。492の口縁部は内面が僅かに外反し、端部は丸く収めている。口縁部内面に3~4条の沈線がみられ、体部内面に飛雲文を施している。他に同類と考えられる青磁片が1点出土している。490・496・500は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5b類である。490の口縁部は僅かに外反し、端部は薄く引き出している。体部外面に鎬蓮弁文を施している。500の口縁部は僅かに外反し、端部は薄く引き出している。体部は内湾しながら立ち上がり、体部外面に鎬蓮弁文を施している。同類の青磁片は他に6点を数え、接合部位は異なるが、同一個体の可能性を含んでいる。他の青磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2・Ⅰ-4類の細片と考えられる。

他に層位不明（試掘TRを含む）出土の貿易陶磁器が26点で、白磁片10点、青磁片16点を数える。図示し得たのは459・462・465・468・483・484・485・488・497・504・507である。459は白磁皿A群（Ⅸ類）と考えられる。口縁部は外反し、端部は施釉されておらず「口禿げの白磁」である。端部は断面の色とは異なり化粧土を施している可能性が考えられる。462・465・468は白磁碗Ⅳ類である。462の口縁部は細長い玉縁で、465の口縁部には内部断面に空洞がみられ、468の口縁下には段を有している。他の白磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ白磁碗Ⅳ～Ⅴ類の細片と考えられる。497は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-1類と考えられる。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収めている。484は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4類である。内面に口縁部と体部内面にそれぞれ2条のヘラによる片彫りを施している。483・485・488は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5b類である。483・485の口縁部は真っ直ぐに立ち上げ、端部は丸く収めている。体部外面に鎬蓮弁文を施している。488の口縁部は外面が直立に引き出され、体部外面に鎬蓮弁文を施している。504は類型不明の青磁碗の底部で、見込みと体部境に沈線状の段を有している。高台は外面を面取りし、畳付部分を斜めに削っている。507は同安窯系青磁皿Ⅰ-1b類である。体部下位が屈曲し、見込みに櫛描きによるジグザグ文様とヘラによる片彫

りを施している。他の青磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4・Ⅰ-5b類の細片と考えられる。

Ⅰ区における包含層出土の貿易陶磁器についての概要は以上である。共伴遺物として瓦質土器の煮炊具を例にあげると、Ⅲ～Ⅳ層にかけて出土した遺物のうち、図示し得たのは、鍔付きの羽釜（442）と脚付きの羽釜（443・451）であり、この形態は13世紀中葉から現れてくるとされている。Ⅴ・Ⅵ層出土の遺物のうち、図示し得たのは鍋（448・449・450）である。この形態は従来「土佐型」と呼ばれていたタイプであり、14世紀中葉～後半にかけて現れてくる。Ⅶ～Ⅷ層出土の遺物のうち、図示し得たのは、鍔付きの羽釜（445・446・447）と脚付きの羽釜（452・453）である。さらに下位の層より鍔付きの羽釜（444）を出土している。

ここで各層ごとの貿易陶磁器と瓦質土器の煮炊具の出土状況から、層序による差異を（主に図示した遺物を対象に）検討してみる。Ⅲ～Ⅳ層から出土した貿易陶磁器の類型は、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類（12世紀代）、Ⅷ類（12世紀～13世紀初頭）と、同安窯系青磁碗Ⅰ-1類（12世紀後半～13世紀前半）、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4類（12世紀後半～13世紀前葉）、同系青磁碗Ⅰ-5b類（13世紀後半～14世紀前半）であり、他に15世紀～16世紀後半の青花（染付）が含まれている。瓦質土器の煮炊具は、13世紀中葉～14世紀前半にかけての鍔付きの羽釜と脚付きの羽釜を中心に出土している。Ⅴ～Ⅵ層から出土した貿易陶磁器の類型は、白磁碗Ⅴ類（12世紀代）と、同安窯系青磁皿Ⅰ-2類（12世紀後半～13世紀前半）、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5b類（13世紀後半～14世紀前半）である。瓦質土器の煮炊具は、14世紀中葉～15世紀初頭にかけての鍋（「土佐型」）を中心に出土している。Ⅶ～Ⅷ層から出土した貿易陶磁器は、白磁碗Ⅳ類（12世紀代）、Ⅳ～Ⅵ類と考えられる白磁皿（12世紀～13世紀初頭）、Ⅸ類と考えられる「口禿げ」の白磁皿（13世紀後半～14世紀前半）と、同安窯系青磁碗Ⅰ-1類（12世紀後半～13世紀前半）、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-1類（13世紀）、同系青磁碗Ⅰ-2・Ⅰ-4類（12世紀後半～13世紀前葉）、同系青磁碗Ⅰ-5b類（13世紀後半～14世紀前半）である。瓦質土器の煮炊具は、13世紀中葉～14世紀前半にかけての鍔付きの羽釜と脚付きの羽釜を中心に出土している。

以上のことから、包含層出土の貿易陶磁器と瓦質土器の煮炊具を含めた年代観として、およそ12世紀～14世中葉頃として捉えることができるが、層位による時期差は看取できず、どの層位においても、12世紀～14世紀代の遺物が出土している。

Ⅱ区

Ⅱ区における貿易陶磁器の出土は、ほぼⅠ区と同様の様相をみせるが、細片を含めて16点を確認しているのみである。

1．遺構出土の貿易陶磁器

Ⅱ区において貿易陶磁器出土の遺構としては、SD15・18があげられるが、SD15は近代以降の暗渠と考えられる為、検討の対象から除外する。

SD18はほぼ直線状に検出している溝状遺構で、検出高は32.60mを測る。遺物は土師器片3点と白磁片（Ⅳ類）1点を出土している。

2．包含層出土の貿易陶磁器

Ⅱ区における基本層序より、古代末～中世前期の遺構検出面はⅤ層上面と考えられ、Ⅲ～Ⅳ層は遺物包含層に相当する。Ⅲ層は黄茶褐色シルト質土、Ⅳ層は灰色シルト～砂質土である。以下、遺物の取り上げ順に出土した貿易陶磁器の概要について述べる。

Ⅲ層出土の貿易陶磁器は9点で、白磁片1点、青磁片8点を数える。青磁碗は同安窯系Ⅰ-1b類と龍泉窯系Ⅰ-2・Ⅰ-4類を中心に出土し、類型不明の皿も含まれている。白磁碗は類型不明である。Ⅳ層出土の貿易陶磁器は青磁碗Ⅰ-2類が1点出土している。他にⅥ層から白磁碗Ⅳ類が1点出土している。表採・層位不明遺物は4点を数え、何れも青磁碗で、龍泉窯系Ⅰ-2類が1点出土している他は類型不明である。

Ⅰ区同様、層位による時期差は看取できなかったが、およそ12世紀後半～13世紀前葉頃の貿易陶磁器を出土しており、比較的纏まりをみせている。

母代寺土居屋敷遺跡出土の貿易陶磁器

当遺跡において、遺構出土の貿易陶磁器の年代観は12世紀～13世紀後半代を中心として捉えられることは前述した。当遺跡が機能していた年代は地域の歴史の中でどのような時期に相当し、どのような位置付けが可能であるのか検討してみたい。

12世紀～13世紀後半は、古代末期から中世初頭（鎌倉時代）にあたる時期である。この頃の当該地域について『野市町史』によれば、『香宗我部家伝証文』（東京国立博物館所蔵）所収の文書より、建久四年（1193）六月九日、中原秋家が香宗我部・深渕両郷の地頭に補任されているとある。香宗我部・深渕郷は物部川下流の東岸に位置する現在の香南市野市町・赤岡町および吉川町古川を中心とする地域であり、地名を氏として中原秋家・秋通が後に香宗我部氏を名乗るようになったという。

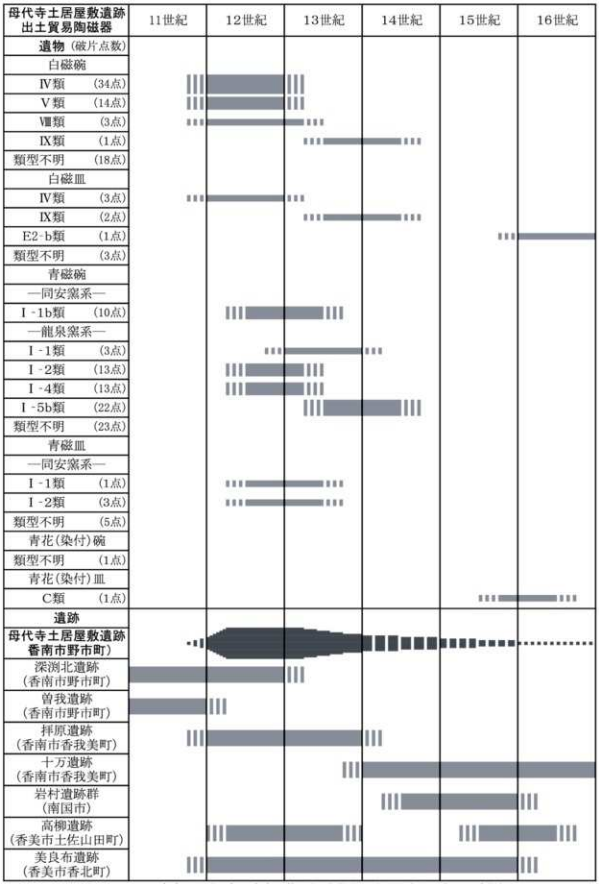
『倭名類聚鈔』（承平年間931～938）に土佐七郡の郷名が記され、当該地域は深渕郷に所在していたと考えられる。野市町の物部川東岸には大字深渕が現存し、弥生時代後期～古代にかけての深渕遺跡、その北方約500mに古代末～中世前期にかけての深渕北遺跡が確認されている。他に南北朝時代と考えられる深渕城跡が所在していたとされるが、城跡を示す遺構は確認できていない。当遺跡の北には亀山窯跡（古代）、さらに物部川西岸には岩村遺跡群（弥生～中世）が展開している。

香南市（野市・香我美町）および周辺の遺跡のなかで、貿易陶磁器の出土を確認している遺跡は、深渕北・曽我遺跡（野市町）、拝原・十万・稗地・徳王子広本・クノ丸遺跡（香我美町）、岩村遺跡群（南国市）、高柳遺跡（香美市土佐山田町）、やや離れて美良布遺跡（同香北町）などがある。

深渕北遺跡は当遺跡の南東、物部川の河口から約５km上流に遡った東岸の新期扇状地上に位置し、調査区近辺の標高は約22m前後を測る。貿易陶磁器は同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類が主体で出土している。川に面した立地から「郡津」の性格も想定され、中央官衙との交易の場として機能していたと考えられる。

曽我遺跡は野市町中ノ村に所在し、台地状を呈する古期扇状地上を流れる香宗川の西岸、同支流の山北川の東岸に位置しており、標高約７mを測る自然堤防上に立地している。宗我郷の「郷家」

母代寺土居屋敷遺跡出土の貿易陶磁器と周辺遺跡の消長表



※遺跡の消長は各報告書に基づき、古代末～中世を中心に大凡の時期幅で示している。

あるいは郡衙クラスの役所の存在が推定されている。貿易陶磁器は白磁碗Ⅱ類が土坑から出土している。

拝原遺跡は香我美町上分拝原に所在し、香宗川支流の山南川右岸の標高約19m前後を測る河岸段丘上に立地している。古代においては大忍郷（『倭名類聚鈔』）に属し、鎌倉時代に入ると大忍庄と呼ばれ、北条得宗家の支配下に置かれる。貿易陶磁器は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5類や同安窯系青磁碗Ⅰ類、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅸ類など60数点を出土している。

十万遺跡は香我美町十万に所在し、香宗川左岸の標高約13m前後を測る河岸段丘上に立地している。「重濠複郭式屋敷城」（松本豊寿『城下町の歴史地理的研究』1967年）と考えられる溝跡の検出など、大忍庄内において名主層などの在地勢力が、構造的変質を遂げる時期の遺構として注目されている。貿易陶磁器は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4・Ⅰ-5類、白磁碗Ⅳ類などが14世紀後半～15世紀代の遺構から出土している。

稗地遺跡は香我美町上分稗地に所在し、山南川左岸の氾濫原性の低地から低位段丘に続く標高約22m前後を測る平坦面上に立地している。中世における本遺跡の位置付けは不明であるが、ピットから龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類を出土している。

徳王子広本遺跡は香我美町徳王子広本に所在し、岸本川左岸の低湿地をⅠ区、その東に拡がる丘陵地をⅡ区として2007年度に調査を実施した（『高知県埋蔵文化財センター年報第17号』2008年）。貿易陶磁器の多くは包含層からの出土であるが、Ⅱ区の残丘緩斜面上に古代～中世の建物跡を数棟検出し、井戸跡の掘形から青磁片を出土している。

クノ丸遺跡は香我美町岸本に所在し、浜堤に立地する中世を中心とした遺跡で、月見山西麓から西に延びる浜堤の東端に位置し、南には太平洋、北には岸本川左岸の低地が拡がる。中世の土師質土器や瓦質土器を中心に、青磁や白磁といった貿易陶磁器の出土もみられる（『高知県埋蔵文化財センター年報第18号』2009年）。

岩村遺跡群は南国市福船に所在し、物部川の河口から約5km上流に遡った西岸の新期扇状地上に立地し、調査区近辺の標高は約20m前後を測る。岩村土居城跡を中心に、近世から弥生時代前期にかけての複合遺跡であり、貿易陶磁器は岩村土居城跡から約100点を出土している。青磁片は全て龍泉窯系で、14世紀後半から15世紀代と考えられる。岩村土居城跡は物部川の旧河道の自然堤防上に占地していたと考えられ、「川津」としての役割も果たしていた可能性が指摘されている。

高柳遺跡は香美市土佐山田町に所在し、物部川西岸の標高約29m前後を測る扇状地上に立地している。高柳土居城跡関連を中心とした遺構を検出しており、貿易陶磁器は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4・Ⅰ-5類他数点をTR調査で出土している。土坑から12世紀～13世紀頃の遺物を一括して出土しているが、周辺のピットからは15世紀後半～16世紀前半の遺物が出土し、時期差を伴う。高柳土居城跡も物部川の河川流通の要地に占地していたと考えられ、成立の背景には、土佐守護細川氏や地域権力として成長した山田氏の支配に関与した在地土豪の存在が指摘されている。

美良布遺跡は香美市香北町美良布に所在し、物部川によって形成された河岸段丘上の開けたところに立地している。鎌倉時代には大忍庄韮生郷に属し、後に香宗我部氏と祖を同じくする山田氏の支配領域となる（『香北町史』）。貿易陶磁器は青磁・白磁等を出土している。青磁は同安窯系青磁皿

Ⅰ-1b類や龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4b類が古く13世紀前半に位置付けられるが、最も出土例の多いのは雷文帯を有するものと、鎬蓮弁文を有するものであり、14世紀から15世紀前葉に位置付けられる。次いで細蓮弁文や無文の青磁碗があり、15世紀代に属する。白磁碗はⅣ・Ⅴ類（12世紀）、Ⅸ類（14世紀）に属するものがみられる。

以上、母代寺土居屋敷遺跡周辺の主な貿易陶磁器出土遺跡を概観してみた。いずれの遺跡も、物部川や香宗川またはその支流や小規模河川沿いの自然堤防や河岸段丘上に所在し、水運に適した地形に立地している傾向にあると考えられる。物部川は下流域と上流域を結ぶ流通の要路として存在し、物部川を中心とした地域経済圏を形成していたと考えられる。これらの遺跡から、遠隔地間水運（貿易・交易）に関わる湊津が近在し、物流の集散地または消費地の存在を示していると考えられる。それらは当時の地域権力や情勢と深く関わっていたと考えられ、12世紀前半頃にピークを迎える。遺跡の性格としては、地方官衙関連遺跡や豪族の拠点、それらと関連する津などの流通拠点と考えられるが、貿易陶磁器の出土量は他地域に比べ僅少である。12世紀末から13世紀初頭にかけて画期がみられ、流通ルートや拠点的遺跡の立地に関しては古代以来の伝統的な枠組みを継承しているが、流通量や分布状況に変化があり、物部川下流域での動きは乏しくなる。当遺跡はそのような情勢の中、生活空間としての機能を終える。その後13世紀前半から14世紀初頭頃に田村遺跡群への集中がはじまり、14世紀初頭から15世紀前半頃の画期を迎えると、広域品は減少傾向にある。南北朝期には鎌倉期に栄えた中心集落の衰退がみえ始めるが、山城を含む城館や一部の拠点的遺構に集中する動きがみられる。

当遺跡の歴史の中で果たした役割については不明な部分が多く、貿易陶磁器の出土状況から遺跡の概要は測りかね、再検討を要するものと考えられる。

【参考・引用文献】

浜田恵子　『土佐神社西遺跡・土佐神社』高知市教育委員会 2006
吉成承三　『深渕北遺跡』野市町教育委員会 1996
高橋啓明・吉原達生　『曽我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989
出原恵三　『拝原遺跡』香我美町教育委員会 1993
出原恵三　『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会 1988
松田知彦　『稗地遺跡』高知県埋蔵文化財センター 1993
三谷民雄　『岩村遺跡群Ⅲ』南国市教育委員会 1998
山本哲也　『高柳遺跡・高柳土居城跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会 1992
出原恵三　『美良布遺跡調査概報』香北町教育委員会 1991
吉成承三　「四国の土製煮炊具　―古代末から中世にかけての土製煮炊具の様相―」
『土製煮炊具の諸様相』第25回 中世土器研究会2006
池沢俊幸　「土佐における広域分布品の様相」『中世西日本の流通と交通』2004
松田直則　「土佐における中世遺跡出土の貿易陶磁器」
『海運・流通から見た土佐一条氏の学際的研究』2008

高知県埋蔵文化財センター年報 第17号 2008
高知県埋蔵文化財センター年報 第18号 2009
『野市町史 上巻』野市町史編纂委員会 1992
『香北町史』香北町史編さん委員会 2006

第Ⅴ章　まとめ

母代寺土居屋敷遺跡の性格

1．時期はいつ頃

母代寺土居屋敷遺跡の遺構から出土した遺物は12世紀後半が中心で、包含層出土資料をみれば、この周辺に12世紀から15～16世紀にかけて集落が形成されていたことがわかる。弥生土器や近世の遺物も確認はされてはいるものの、包含層中や自然流路から検出されたものであり、量的にも僅少である。今回の調査地点は12世紀後半が中心だが、12世紀前半や13世紀後半の遺構も検出されており、包含層出土資料にも瓦質土器や龍泉窯青磁Ⅰ-b類など13世紀代にも遺跡が継続していたことを示す遺物が散見される。

母代寺土居屋敷遺跡は、遺跡名となっている「母代寺」とも「土居屋敷」とも異なる来歴を持つ遺跡である。「母代寺」地名は、紀夏井に由来する地名である。紀夏井は、貞観8年（866年）応天門の変の際、首謀者の一人紀豊城と血縁関係（異母弟）があるという理由で連座、肥後守の任を解かれて土佐に流された。土佐に配流されるまでは、播磨介、讃岐守、肥後守などを歴任、それぞれの任地で領民に慕われた多くの逸話が残る。夏井はまた孝行心も篤かったようで、両親の死後、母代寺・父養寺とそれぞれ草堂を建て弔ったと伝えられている。その地名が残り、「母代寺村」「父養寺村」が中世から近世にかけての村名として資料に登場する。[1]

亀山の山頂付近は紀夏井旧邸として県の史跡に指定されている。指定された根拠は周辺から多くの古瓦が出土することのみであり、実際に夏井邸がどこに営まれたのか、はっきりしているわけではない。母代寺・父養寺の所在地についても諸説有り、現在も確定はしていない。紀夏井が土佐へ来たのは9世紀後半のことであり、母代寺土居屋敷遺跡とは直接関連する訳ではない。

また、遺跡名の由来である「土居屋敷」という小字名だが、土居屋敷地名は当遺跡のある東深淵郷に限っても3箇所残っている。土佐においては、「土居」には大きく分けて2種類の意味がある。中世以来の防御施設（濠）を持つ豪族屋敷を示す土居（旧土居）と新たに長宗我部時代以降に家臣団に組み込まれた有力給人層の居館としての土居屋敷（新土居）の2種類であり、旧土居は中世以降の豪族屋敷であり、土居屋敷と呼ばれるのは新土居のことを示している。[2]

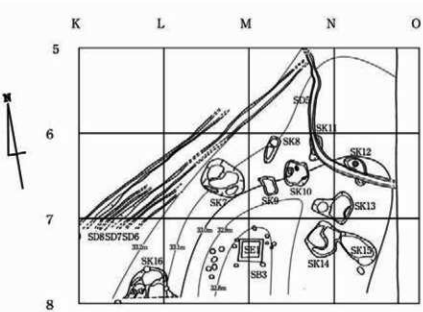
天正16年（1588年）の検地の段階で、母代寺村の地名に「土居屋敷」はなく、それに相当するヤシキの存在も確認できない。[3] 天正年間以前の土居の痕跡も認められない。検地段階以前の旧土居は、少なくとも（検地時点で現存しなくとも）地形あるいは地名に明らかな痕跡が確認できるはずである。遺跡が地検帳記載の母代寺村の範囲にあることは間違いない。今回の調査範囲からは、中世末から近世にかけての遺物は少量確認されているものの、当該期の屋敷に伴う遺構はない。小字「土居屋敷」の範囲は調査地点から南へ広がっていることから、新土居と推定される屋敷が調査地点より南に営まれていた可能性はある。地検帳の記載を手がかりにすれば、天正16年よりも新しい時期

に土居屋敷が成立、地名として残されたものと推定される。

2．遺構

①井戸

遺跡内には土坑や掘立柱建物、溝とともに遺物が集中する井戸があり、ピット群のまとまりから屋敷地を構成していたことがわかる。井戸以外にも遺物の集中する遺構が2ヶ所（SK7とSK16）有り、そのうちSK7は調査時点では井戸（SE2）として、調査を進められていた。遺構内から板状の木製品が検出された点と多量の礫が投棄されている様子が、この2つの遺構には共通している。さらに遺構形状も遺構内に段構造をもち深掘りされている点が似通っており、検出面標高、遺構検出面からの段部（30cmほど）や深掘り部分の深さ（55cm前後）もほぼ同じ点などから、同じ性格の遺構だと考えた方が良さそうである。SE1は30cmほど低い地点に立地、その北側と西側の一段高まった場所にこれら2つの遺構が形成されている。



SE1、SK7、SK16遺構配置と地形（10cm等高線）

井戸（SE1）との位置関係から、これら2つの遺構が「水」に関する遺構である可能性が想起され、「水溜め」用など、ある種の井戸としての機能を持っていたのではないかと考えられる。同時期の類似例として、香宗川流域の曽我遺跡SK5の例がある。[4] この遺構は、母代寺土居屋敷遺跡SE1と同時期だと考えられる高柳遺跡SK1に先行する時期（12世紀後半）[5] で、SK7とSK16 とを比較すると、段部を持ち、板状木製品が出土する点など共通点もある。曽我遺跡SK5については、報告書で井戸の可能性が指摘されている。

高知県内の発掘調査で確認された井戸は今まで40基知られている。（現在整理作業中の土佐市上ノ村など未報告資料をのぞく）井戸とは、河川や池沼など水を溜めて汲み上げることのできるところも含めた広義の「井」の一部で人工的に掘削されたものだという。南国市田村遺跡群の弥生時代前期の溝に接して深く掘られた土坑の例が、井戸の可能性を持つ県内最古の例である。[6] これらの弥生時代に遡る例は「井戸」と認識されていないケースも多く、今回は古代以降の井戸と認識されたケースについてのみ集成してみた。高知県以外の例では、都市に伴う井戸の発掘調査例が多く報告されている。平安京・平城京・太宰府・草戸千軒など、都市生活において井戸は重要な役割を担って

高知県で発掘調査された井戸（古代以降）

	遺跡名	遺構名	市町村	時期	時期詳細	形態	掘形平面形	掘形平面(m)	井戸平面形	規模(平面・m)	深さ(m)	廃絶儀礼	井筒	特徴
1	ひびのきサウジ遺跡	SE1	土佐山田町(香美市)	古代	10世紀後半	素掘り	円形		円形	1.50×1.75	3.45	土器溜として利用	なし	床面径68cm
2	曽我遺跡	SK5	野市町(香美市)	古代	12世紀	素掘り(板残)	楕円形						なし	板材出土
3	土佐国衙跡	SE01	南国市	中世	13世紀	石組推定	円形	4.50	円形	1.10	2.66		残存せず	現土中に人頭大の礫。掘形は2段掘り。
4	坪ノ内遺跡	DⅢSE1	中土佐町	中世	13世紀後半～14世紀	木組	不整楕円形	3.80×3.05	方形	1.20×1.20	2.73	なし		木組方形縦板組隅柱横桟壁井戸
5	具同中山遺跡群	SE1	中村市(四万十市)	中世	13世紀中葉～14世紀初頭	木組	不整方形	1.50×1.14	方形	1.00×0.90	1.50	なし	現土中から曲物出土	下層に円礫・礫を敷き詰めた様あり。木組方形縦板組隅柱横桟壁井戸
6	神田ムク入遺跡	SE1	高知市	中世	14世紀	石組			円形	1.20×1.20	1.10	なし	曲物	
7	田村遺跡群Ⅱ	C4SE401	南国市	中世	15～16世紀	石組	円形	1.98×1.80	円形	1.50×1.44	3.20	なし	○檜製(石組の下)	
8	田村遺跡群　L13	SE1	南国市	中世	15～16世紀	石組	不整長円形	5.50	円形	1.20	3.95		直径45cmの割り貫き材	
9	田村遺跡群　L22	SE1	南国市	中世	15～16世紀	石組	楕円形	2.33	不明	不明	2.50		検出できず	石はぬきとられている。
10	田村遺跡群　L33	SE1	南国市	中世	15～16世紀	石組	不整長円形	3.80	円形	0.90	4.52		直径46cmの割り貫き材	調査途中石組崩落
11	田村遺跡群　L39C	SE2	南国市	中世	15～16世紀前半	石組	不整楕円形	3.35		1.60	3.50		なし	底に径60cmのピットあり。平面のみ
12	田村遺跡群　L18	SE1	南国市	中世	15世紀	石組	円形	3.80	円形	1.20	3.80		直径60cmの割り貫き材	
13	田村遺跡群　L25	SE1	南国市	中世	15世紀	石組	記載なし	記載なし	方形に近い	0.80	2.5m以上			屋敷A の南東隅・崩落の危険調査個所・検掘下30cm確認する
14	田村遺跡群　L25	SE2	南国市	中世	15世紀	石組	楕円形	4.80	記載なし	記載なし	3.30		直径50cmの割り貫き材	屋敷B の南東隅
15	田村遺跡群　L31A	SE1	南国市	中世	15世紀	石組	円形	3.50		1.50	4.20		上部直径110cmの割り貫き材・下部直径60cmの檜(板石組)	井筒2段
16	田村遺跡群　L4	SE1	南国市	中世	15世紀	石組	楕円形	2.88	円形	1.24	3.48		直径45cmの割り貫き材	最下部に直径40～50cmの縦平樋
17	田村遺跡群　L16	SE1	南国市	中世	15世紀後半	石組	円形	2.84	円形	0.72	4.08		檜状	底に40～50cmの縦平樋円樋、西1m、南2mに各々樋列
18	田村遺跡群　L42	SE1	南国市	中世	15世紀後半～16世紀前半	石組	不整円形	3.50	円形	1.30	3.20		檜状	
19	田村遺跡群　L20	SE1	南国市	中世	16世紀	石組	円形	3.20	円形	1.20	3.20		直径48cmの割り貫き材	
20	田村遺跡群　L21	SE1	南国市	中世	16世紀	石組	不整円形	3.40		1.60	3.88		直径48cmの割り貫き材	掘形の深さ4.18m
21	田村遺跡群　L21	SE2	南国市	中世	16世紀	石組	不整円形	3.30	不明	不明	1.8m以上		不明	崩落のため
22	田村遺跡群　L21	SE3	南国市	中世	16世紀	石組	不整円形	3.00		1.52	3.80		直径53cmの割り貫き材	調査途中で崩落
23	田村遺跡群　L39B	SE1	南国市	中世	16世紀後半	石組		3.92		1.32	3.80		直径不明割り貫き材	
24	田村遺跡群　L10	SE1	南国市	中世	不明	石組	円形	2.88	円形	1.20	3.20		確認できず	一度破壊
25	土佐国衙跡	SE032	南国市	中世	室町時代	石組	円形	3.50	円形	1.50	3.80		確認できず	現土20cm前後の円礫集中
26	土佐国衙跡	SE033	南国市	中世	室町時代	不明	円形	3.50	円形	不明	0.9m以上		一部の調査のため不明	現土1層に20cm前後の円礫集中、一部のみ調査。
27	坪ノ内遺跡	DⅢSE2	中土佐町	中世		石組	円形	3.08×2.92		不明	不明	不明		
28	坪ノ内遺跡	DⅢSE3	中土佐町	中世		素掘り	不整楕円形	3.00×2.84			0.75			
29	坪ノ内遺跡	CⅣSE1	中土佐町	中世		素掘り	楕円形	3.40×3.16			0.84	なし		中世土器片
30	天神遺跡	SE201	土佐市	中世		木組	方形		方形	1.60×1.45	1.48	なし	直径70cm、木を割り抜いた井筒	木組方形縦板組井戸
31	林口遺跡	SE1	土佐市	中世		石組	円形	4.10×4.10	円形	2.10×2.10	3.96	なし	○檜製(石組の下)	
32	林口遺跡	SE2	土佐市	中世		石組		2.67×3.07	円形	0.55×0.55	3.28	なし	○檜製6段(上のみ石組)	
33	田村遺跡群　L39C	SE1	南国市	中近世	15～17世紀初頭	石組		4.68		1.00	4.30		直径60cmの割り貫き材	慶長16年(1607年)銘は小沢3枚の未搬・平面のみ
34	田村遺跡群　L39A	SE1	南国市	中近世	16～17世紀初頭	石組	不整円形	4.40		1.20	3.80		直径42cmの割り貫き材	手鉤不可能・平面のみ図示
35	上美都岐遺跡	SE1	佐川町	近世	18世紀	石組		東西2.45×南北2.61	円形	上端0.75～0.80底面1.02	1.72		なし	
36	帝屋町地下駐輪場	未報告	高知市	近世	幕末の料亭	木組								遺構内より多量に箸出土
37	高知城伝下屋敷跡	井戸1	高知市	近世		○地	円形	2.45×2.45	円形	0.81×0.83	1.90	なし		
38	高知城伝下屋敷跡	SE2	高知市	近世		○地	円形	1.35×1.45	円形	0.80	4m以上	なし	○地	下層に玉石・玉砂利
39	高知城伝下屋敷跡	SE3	高知市	近世		○地	円形	1.15×1.20	円形	0.85	0.90	なし	○地	下層に玉石・玉砂利
40	高知城伝下屋敷跡	SE1	高知市	近代	明治以降	打込	不整方形	－	不整方形	1.00×0.90	4.80	なし	左端竹筒状	針金・丸釘存在

いた。

高知県の調査例の中で、木組みの井戸枠を持つものは4例と少なく、SE1と同じ井戸枠の型式（組み立て式方形縦板組型のB１類－薄板横桟留型・隅柱あり－）に分類されるのは具同中山遺跡で確認された13世紀～14世紀の例、1例のみである。[7] SE1は廃絶儀礼がはっきりと確認できる点に特徴があるが、廃絶儀礼に使用された遺物は土師器坏・椀と小皿、須恵器甕、布目瓦である。県内には同時期の例がほとんどないため、単純な比較検討はできないが、井戸の廃絶儀礼としてこれだけの遺物を敷き詰めるように並べる事例はない。香美市土佐山田町ひびのきサウジ遺跡の例のみ大量の遺物投棄が認められ、出土遺物は高知平野の編年上10世紀後半の基準資料となっている。ただし、報告者によって「井戸としての機能を果たさなくなり、その後は廃棄し土器溜まりとして利用された」と報告されるように、祭祀的な意味合いは持たないようである。[8]

鐘方正樹氏は『井戸の考古学』第6章井戸の祭祀において、井戸の祭祀の段階として構築時・使用時・埋め戻し時の3段階を設定している。構築時と埋め戻し時の祭祀は中国思想との関連が大きく、使用時の祭祀は日本古来の思想に由来しているという。祭祀行為のまったく確認できない井戸も多いという。しかし、本書に集成され、紹介されているいずれの例を見ても、SE1と同形態あるいは類似した祭祀の形を見いだすことはできない。母代寺土居屋敷遺跡SE1の場合は、「廃棄土坑」や「土器溜まり」としての可能性はなく、「祭祀」としての意味合いを持った意図的な行為であり、井戸廃絶に伴う「廃絶儀礼」である。整然と並べられた布目瓦や須恵器甕、その間に配された土師器の坏・椀・小皿の在り方もそれを示しており、その中には底部に穿孔された土師器坏もある。並べられた瓦には2次的に被熱し、赤変したものも多い。

遺物からは、SK16→SK7→SE1の変遷が想定される。12世紀後半から12世紀末にかけての短い時間幅の中での廃絶時期の差だと考えられる。これらの遺構の機能していた時期は重なり合っている。SE1は何らかの上屋構造を持っていた可能性がある。遺構周辺に10基以上のピットが確認されており、いくつかのパターンの上屋を持つ建物が復元可能である。これに対して、SK7とSK16は周辺に建物を構成可能なピットがない。

②土取り跡～粘土採掘坑

調査時点において更谷氏は下層から検出された土坑の性格を、周辺で営まれた窯で消費する粘土の採掘坑であると捉え、「土取り跡」として調査を進めた。本報告においてもそれを踏襲し、これらの土坑を土取り跡１～４として報告する。残念ながら、これらの遺構から出土する遺物はほとんどない。唯一出土した須恵器鉢は胎土の特徴から、亀山窯の製品である可能性を指摘することができる。亀山窯の存続時期は、8世紀から12世紀にかけてとされており、これらの土坑が「粘土採掘坑」である可能性は高い。掘立柱建物や井戸など主な遺構検出面はⅦ層（調査時点でⅦ－１層とされた）上面であり、土取り跡遺構が検出されたのは、その下層、Ⅺ層上面である。埋土はⅩ層とした腐植土と周辺の粘土がブロック状に混在する土であり、Ⅺ層の黄褐色粘土層を掘り粘土採掘の直後に埋め戻したものだと考えられる。

このⅩ層より上面のⅨ層から出土した須恵器椀（400）は、その形態から12世紀中葉に位置づける

ことのできる資料であり、4基の「土取り跡」は、少なくとも12世紀中葉以前の遺構だといえる。この時期は、亀山窯の機能していた時期と重なる。

平成12年度の本発掘調査時に調査地点を訪れた武吉宏和氏（陶芸家・四万十町松葉川温泉近くの龍窯にて作陶）は、遺跡周辺にあるこの粘土を採取、実際に作陶を行った。使える粘土だという予想に反して、腰がない粘土で手びねりができないなど、グニャグニャの印象で耐火度は低かったようである。その反面、高温でなくても（1000℃ほど）水が漏れなくなるなど、「屋根瓦に向く土」という評価もあったらしい。土器製作のためにはタタキ締めてから使う必要があったようで、南国市大篠小学校では子どもたちと一緒にタタキ締めて円盤状にした粘土から土器の形を造り出したと語る。物部川以西の香長平野や香美市土佐山田町周辺で得られる良質なものとは異なる粘土であり、この粘土を使って須恵器の製作を行った集団の技術の高さに感心したと述懐されている。

遺跡調査の際に、瓦業者による粘土採掘坑に遭遇することがある。香南市赤岡町大東遺跡の場合は近代の粘土採掘自体を発掘対象とし、明治期の瓦粘土採掘の様相を明らかにしようとした。[9] また、弥生時代には香南市香我美町下分遠崎遺跡のように土器製作用粘土の貯蔵土坑の確認例[10]などいくつかの土器製作に関する「粘土」の調査例があるものの、粘土採掘坑と推定される遺構の例はほとんどない。当遺跡の例は12世紀中葉以前（古代・平安時代後半）の粘土採掘の例として注目される事例だといえる。

③その他の遺構

時期が確認可能な遺構の例として以下の例が挙げられる。

12世紀中葉以前の遺構	SK12　土取り跡４
12世紀中葉～後半	SK２・3
12世紀後半～末	SE1・SK7・SK16
13世紀後半～14世紀	P9・P379

３．出土遺物

白磁・青磁・染付など11世紀後半から15世紀までのまとまった量の貿易陶磁器が確認されている。ピークは12世紀代で、物部川流域の諸遺跡との比較により、当遺跡の特徴が浮かび上がっている（第Ⅳ章考察）。

SE１・SK７・SK16など12世紀後半段階の遺構一括資料が得られた。SE1は高柳遺跡SK1と同じ時期であり、SK16・SK7はそれに先行する時期の資料だと考えられる。これらの遺構からは土師器供膳具として小皿・椀・坏が出土し、SK7とSK16が椀形態中心であるのに対し、SE1には一定量の坏が含まれていること、底部形状の比較で、輪高台・柱状高台・平高台の比率がSK7とSK16の方が高いこと、より新しい時期ほど小皿の法量が小型化する傾向がある点[11]などからSE1に対してSK7 とSK16の方がより古い要素を持っている。

須恵器と布目瓦には、播磨の影響が色濃くみられる。直接、搬入された資料としての東播系のこね鉢や甕などもあるが、同時にその影響下に在地で生産された亀山窯の製品を確認することができ

る。須恵器の形態は、播磨の模倣だと考えられ、瓦も包み込み技法が確認されるなど、播磨の影響下にある。[12] 亀山窯で生産された瓦は平安京大極殿・法勝寺の瓦に使用されていたことがわかっている[13]が、亀山窯産の須恵器の甕は広域流通せず、現地周辺のみで使用されたのではないか、といわれている。県内の遺跡からの出土例もほとんどない。[14] 表面が海綿状になった窯壁も何点か出土しており、これらの存在も亀山窯との関連を示唆する。

布目瓦も重要な知見をもたらす。従来知られている亀山窯出土古瓦は、奈良時代末～平安時代初期の資料と平安時代後期の資料にわかれる。今回の調査では、平安時代後期の瓦が出土している。SK7からは、宝相花（華）文軒平瓦が、SE1からは平安時代後期に流行した剣頭文を持つ軒平瓦が、そしてSE1に近接する包含層中から左巻三巴文の軒丸瓦が出土している。この軒丸瓦は21個の珠文帯を持ち、尾は長く圏線に接するまで延びている。巴文の起源については諸説があるが、瓦頭文様としての巴文は、平安時代後期に中央官衙系瓦屋において出現、12世紀中葉（Ⅳ期）から後半～13世紀初頭（Ⅴ期）にかけて盛行、それが地方に波及するとされる。また、SK7の上面のSS1（集石遺構・SK7上面）からは連巴文軒平瓦が出土しており、先述のとおり、播磨の影響を強く感じる。生産のウェイトは地元より京都、すなわち「瓦生産の主目的は中央への納入」にあった。今里幾次氏は「播磨の窯がすべて瓦陶兼業である」ことから「瓦陶兼業窯の発足と進展とは、院政政権による造寺・造塔の盛行に伴う屋瓦の需給増加に起因し、それに対処するために地方窯を動員―従来の須恵器窯の転用強化によって生産増強を図ったことの現われであった。」と、この時期の瓦需要増加の一因を指摘している。[15]

12世紀代の遺物として特筆すべきは、合計6点出土した滑石製石鍋の存在である。日宗貿易に関連して移動した遺物だと考えられており、産地である長崎と北九州、畿内に分布の中心が限定されている。今回出土した石鍋は、鍔が水平に延びる段階であり、木戸編年Ⅲ-a期に相当し、12世紀の時間幅の中で捉え得る資料であり、Ⅲ-a期でも前半にあたる12世紀の中葉以前の資料だと考えられる。[16] 破損後穿孔が認められるもの、再加工して石鍋とは異なる面を作り出したものなど、「温石」に転用されたと確認される資料が2点ある。

点数は少ないものの瓦器椀も出土している。瓦器椀の中で1点楠葉型瓦器椀が確認された。楠葉の瓦器椀は幡多においては四万十市具同中山遺跡群、土佐清水市加久見遺跡など確認例が増えつつあるが、高知平野では出土例がほとんどない。確認されたのは11世紀後半（Ⅰ期）の資料が出土した南国市栄エ田遺跡に次いで2例目のことである。[17] 12世紀第3四半期の資料であり、当該期の瓦器椀の出土は注目される。

また、須恵器椀の中に内面に板ナデ（コテアテ）が残る平高台椀がある。従来は、仁淀川流域以西にのみ確認された個体であり、内面に板ナデ（コテアテ）が残る。ただ、当遺跡調査後10年近くの間に調査事例も増加しているが、その後1例も類例を確認できていないという。[18] 高知平野で内面に板ナデのある平高台椀が仁淀川流域に限定されない可能性を示す資料ではあるが、例外的な資料だと捉えた方がよいかもしれない。

4．まとめ～遺跡の性格について～

母代寺土居屋敷遺跡の今回の調査地点の性格について、調査担当者である更谷大介氏は調査時点において、「亀山窯」との関連を意識し、この遺跡が亀山窯の工人関連の集落(屋敷)である可能性が強いと考えていた。本報告書作成に際して、池澤俊幸氏と吉成承三氏（ともに高知県埋蔵文化財センター）からも同様のご指摘をいただいた。

この遺跡のピークは12世紀にある。それ以降も包含層出土の貿易陶磁器が少量確認されることから、近辺に集落はあっただろうが、その性格は特定できない。しかし古代末の遺構・遺物は多くのことを語りかける。12世紀段階の遺物からわかることは、遺跡で暮らす人々が、高知平野においては特別といってもいいほどの流通ルートを保持していたことだ。遺跡から500mほど西南の深淵北遺跡[19]がこの遺跡にとっての玄関口であり、深淵北にあったと考えられる「川津」を通じた交易が行われていた。深淵北遺跡の遺物とも共通する部分が多い。滑石製石鍋、石鍋転用温石、楠葉型瓦器椀、貿易陶磁器、これら日宋貿易とそれに関する流通過程でもたらされた品々、その対価として古代末院政期の寺院建造の需要にこたえるべく、瓦の生産・搬出が行われていた。瓦や須恵器の技術的なバックボーンは「播磨」であり、東播系須恵器に類似した須恵器の甕や鉢を周辺で消費するためだけに生産、中央の要求に応えて瓦の生産を行う。

「瓦」は「寺院」に結びついており、近在寺院の存在が想定されるかもしれない。その可能性も捨てきれない。しかし、ここで生産された瓦は周辺の寺院に使われたものではなく、主に中央の寺院建設の需要に応えて生産されたものであろう。井戸（SE1）の廃絶儀礼として使用された瓦類は摩滅が進んでおらず、遺構の廃絶時期と瓦の生産時期は近接している。瓦の詳細な時期の断定はできないが、古代末に属するということはできる。これらの瓦は、焼成後時期をおかずに埋められた。

母代寺土居屋敷遺跡は、亀山窯の工人集団が形成した屋敷であり、屋敷内からは瓦と須恵器の生産者が自らの生産物（瓦・須恵器甕）と祭祀的な意味を持つ土師器を井戸廃絶時に埋納した祭祀儀礼が確認された。その後、集落の担い手は交代する。12世紀の短い期間に集落が盛行した背景には、院政期の瓦需要の増大とそれに続く古代末の転換期の社会状況が色濃く反映している可能性がある。その背後には、播磨の強い影響と、技術を伝えた工人集団の存在が垣間見えるのである。

参考文献

『概説　中世の土器・陶磁器』1995年　真陽社

『野市町史　上巻』1992年　野市町史編纂委員会

鐘方正樹『井戸の考古学』2003年　同成社

引用文献

⑴　『野市町史　上巻』1992年　野市町史編纂委員会

⑵　松本豊寿「第二章　初期城下町成立の前提的集落　第一節　中世末期豪族屋敷　第二節　中

世末期地方市場集落」『城下町の歴史地理学的研究』1971年

(3)『長宗我部地検帳　香美郡　上』1962年 高知県立図書館

(4)『曽我遺跡発掘調査報告書』1989年　高知県香美郡野市町教育委員会

(5) 土器編年については、池澤俊幸「四国における古代後期から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』2004年　日本中世土器研究会を参考にした。

(6)『田村遺跡群Ⅱ』第2分冊　2004年　(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

(7)『具同中山遺跡群Ⅳ』2001年　(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

(8)『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』1990年 土佐山田町教育委員会

(9)『大東遺跡』2005年　赤岡町教育委員会

(10)『下分遠崎遺跡試掘調査概報』1987年　香我美町教育委員会
『高知県香美郡下分遠崎遺跡(1)』1989年　香我美町教育委員会

(11) 池澤俊幸氏のご教示による。古代後期から中世にかけて、小皿の口径が小さくなっていく傾向があることが四国内の11～13世紀頃の遺跡の比較によりわかる。前掲(5)同。

(12) 吉成承三氏のご教示による。

(13)『深渕遺跡発掘調査報告書』1989年　高知県香美郡野市町教育委員会
『平安宮推定大殿跡調査報告書』1983年

(14) 吉成承三氏のご教示による。亀山窯で生産された須恵器の出土例は、田村遺跡群に1例あるのみであり、それ以外には確認されていない。

(15) 今里幾次『播磨古瓦の研究』1995年　真陽社

(16) 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』1993年日本中世土器研究会

(17)『栄エ田遺跡』1995年　(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知平野の楠葉型瓦器椀については、近年の発掘調査によって高知市朝倉古墳、香南市クノ丸遺跡など出土例が増えてきた。

(18) 池澤俊幸氏のご教示による。
池澤俊幸「四国における古代後期から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』2004年
日本中世土器研究会の中で仁淀川流域の「平高台椀Ｂ」の内面に板ナデのある資料についてまとめられている。

(19)『深渕北遺跡』1996年　高知県香美郡野市町教育委員会

第Ⅵ章　付編　自然科学分析

香南市野市町母代寺土居屋敷出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

1．試料

試料は香南市野市町母代寺土居屋敷遺跡から出土した建築部材9点である。

2．観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3．結果

樹種同定結果（針葉樹2種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の解剖学的特徴を記す。

1）マツ科マツ属［二葉松類］（*Pinus* sp.）

（遺物№9）

（写真№9）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1～15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属［二葉松類］はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

2）ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis* sp.）

（遺物№1～8）

（写真№1～8）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地　謙・伊藤隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

島地　謙・伊藤隆夫「図説木材組織」地球社（1982）

伊藤隆夫　「日本広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田　源　「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）

深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所　史料第27冊　木器集成図録　近畿古代編」（1985）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所　史料第36冊　木器集成図録　近畿原始編」（1985）

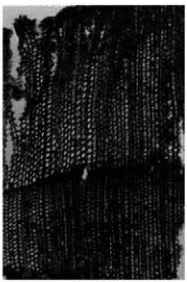
◆使用顕微鏡◆

Nikon

MICROFLEX UFX-DX Type 115

野市町母代寺土居屋敷遺跡出土木製品同定表

No.	出土地点	品名	樹種
1	Ⅰ区 SE1 杭 3	杭	ヒノキ科アスナロ属
2	Ⅰ区 SE1 杭 4	杭	ヒノキ科アスナロ属
3	Ⅰ区 SE1 杭 2	杭	ヒノキ科アスナロ属
4	Ⅰ区 SE1 杭 1	杭	ヒノキ科アスナロ属
5	Ⅰ区 SE1 北立板（横木北）	横木	ヒノキ科アスナロ属
6	Ⅰ区 SE1 横木東	横木	ヒノキ科アスナロ属
7	Ⅰ区 SE1 横木西	横木	ヒノキ科アスナロ属
8	Ⅰ区 SE1 横木南	横木	ヒノキ科アスナロ属
9	Ⅰ区 SE1 横側　杭	杭	マツ科マツ属〔二葉松類〕


木口×40

柾目×100

板目×40

No-1　ヒノキ科アスナロ属

木口×40

柾目×100

板目×40

No-2　ヒノキ科アスナロ属

木口×40

柾目×100

板目×40

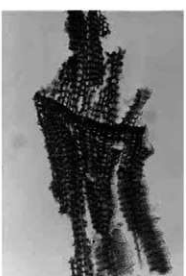
No-3　ヒノキ科アスナロ属

木口×40

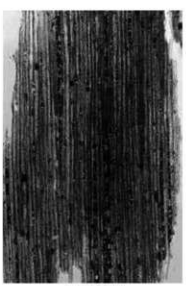
柾目×100

板目×40

No-4　ヒノキ科アスナロ属


木口×40

柾目×100


板目×40

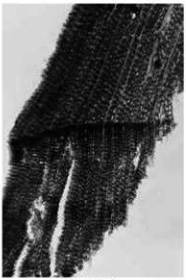
No-5　ヒノキ科アスナロ属

木口×40

柾目×100

板目×40

No-6　ヒノキ科アスナロ属


木口×40

柾目×100

板目×40

No-7　ヒノキ科アスナロ属

柾目×100

板目×40

No-8　ヒノキ科アスナロ属

木口×40

柾目×100

板目×40

No-9　マツ科マツ属［二葉松類］

写　真　図　版

図版1

南からのぞむ・後方は佐古小学校

北からのぞむ・左後方は三宝山

調査前の景観

図版2

調査前の景観　北東からのぞむ

母代寺遺跡周辺の地形（南上空より）

Ⅰ区下段　東壁セクション

Ⅰ区上段　北壁セクション西端

Ⅰ区下段東壁セクション

Ⅰ区上段　北壁セクション

図版4

Ⅰ区の遺構（南から）

Ⅰ区上段の遺構（北から）

Ⅰ区全景（完掘・北から）

Ⅰ区上段の遺構（完掘・南から）

図版6

Ｐ９

瓦器椀

Ｐ12

ＳＫ７

遺物出土状況

Ⅰ区ＳＫ７よりＳＥ１方向をのぞむ

包含層　軒丸瓦（521）出土状況

ＳＥ１と包含層出土遺物（軒丸瓦・521）

図版8

ＳＥ１　１面目遺物出土状況

ＳＥ１　２面目遺物出土状況

ＳＥ１　遺構底面に敷き詰められた礫

図版10

ＳＥ１　遺構底面出土礫と下層確認

ＳＥ１　完掘　井枠

ＳＥ１　完掘　堀形

ＳＥ１　完掘　堀形半裁　下層確認

図版12

ＳＥ１　周辺の旧地形

ＳＥ１とＳＫ７の位置関係

ＳＫ７上面（遺物集中１）軒平瓦出土状況

ＳＫ７　遺物出土状況

図版14

ＳＫ７　遺物出土状況

ＳＫ７　完掘状況

ＳＫ16　１面目　遺物出土状況

ＳＫ16　２面目　遺物出土状況

図版16

ＳＫ16　遺構完掘状況

ＳＫ12　遺物出土状況

Ⅰ区下段の土坑とセクション

Ⅰ区下段の土坑

図版18

ＳＫ５・６

ＳＫ６

ＳＫ５セクション

ＳＫ17

土取り跡２

土取り跡３

土取り跡１

土取跡 3

土取跡 4

図版20

Ⅰ区　下層の遺構　自然流路

自然流路（ＳＲ２）堆積状況

Ⅱ区全景　完掘状況

Ⅱ区堆積状況

Ⅱ区離壁セクション

ＳＤ15

図版22

現地説明会

佐古小学校見学会

佐古小学校　発掘体験

佐古小学校　遺跡見学会

調査風景

調査に参加した人々（後方は佐古小学校）

3
4
9
12
13
66
67
83
84
85
86
87
88
89
90
92
134
195
196
208
211
212
309
328

土師器・小皿（遺構出土）

327

326

332

333

336

337

338

339

340

341

343

344

350

356

360

363

土師器・小皿、坏、椀（包含層出土）

土師器・坏、椀

土師器（椀・坏）須恵器（椀）瓦器（小皿・椀）

弥生土器（317）・須恵器

ＳＥ１出土　須恵器　甕（亀山窯）105

ＳＥ１出土遺物　布目瓦（丸瓦）

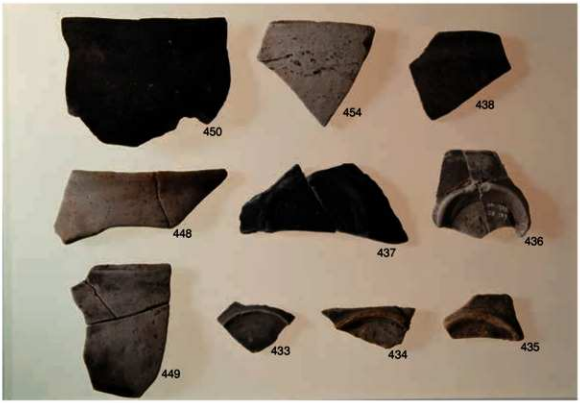
ＳＥ１出土遺物　布目瓦（軒平瓦・平瓦）

ＳＥ１出土遺物　布目瓦（平瓦・丸瓦）

SS1・包含層出土遺物　布目瓦（軒丸瓦・軒平瓦・平瓦）

ＳＳ１・ＳＫ７　出土遺物　布目瓦（軒平瓦・平瓦）

石鍋・石鍋転用温石

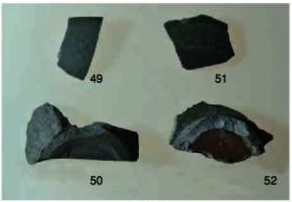


瓦質土器・瓦器

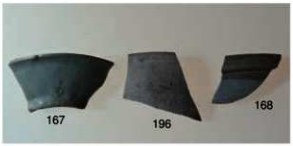
444
447
440
443
442
446
441
445

452
307
58
451
57
453
165
166
56
55

瓦質土器

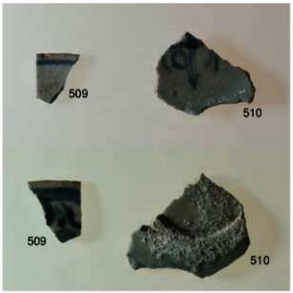


ＳＳ１



ＳＫ７

ＳＫ16



包含層出土染付

包含層出土青磁

貿易陶磁器１（遺構出土 白磁・青磁、包含層出土 染付・青磁）

外面

内面

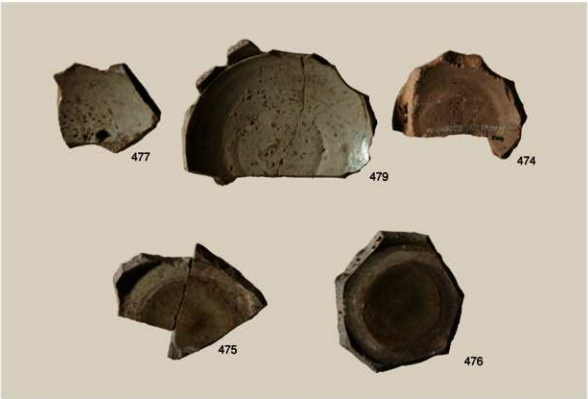
貿易陶磁器２（包含層出土 青磁１）

内面

外面

貿易陶磁器 3（包含層出土 青磁 2）

貿易陶磁器４（包含層出土 白磁１）



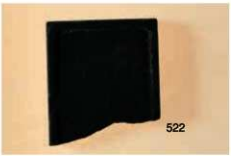
内面

外面

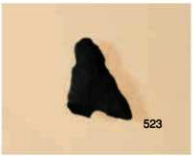
貿易陶磁器５（包含層出土 白磁２）

図版42

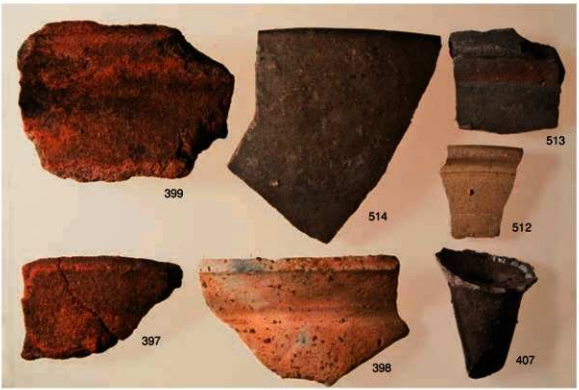
土取り跡4　出土須恵器



硯



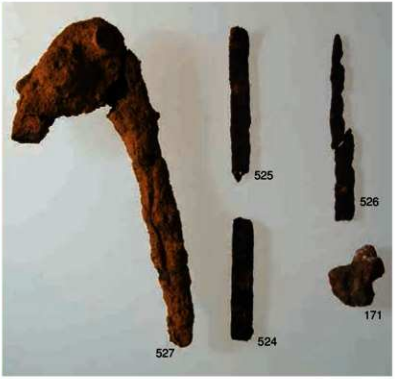
石鏃



包含層出土　土師器・須恵器・陶器

窯壁片・鋳型片

太型蛤刃石斧



鉄製品

120

122

123

121

木製品　1

SE1　井戸枠

124

125

126

127

井戸枠　横桟

128

木製品　2

図版46

母代寺遺跡周辺の地形（上空より）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほだいじどいやしき
書　　名	母代寺土居屋敷遺跡
副　書　名	野市町立佐古小学校グラウンド拡張整備事業に伴う発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	高知県香南市発掘調査報告書
シリーズ番号	第３集
著　者　名	松村信博・宮地啓介
編集機関	高知県香南市文化財センター
所　在　地	〒781-5453　高知県香南市香我美町山北1553-1　TEL.0887-54-2296
発行年月日	西暦　2010年3月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ほだいじどい 母代寺土居 やしきいせき 屋敷遺跡	こうちけんこうなんし 高知県香南市 のいちちょうほだいじ 野市町母代寺	39211	3047	33度 34分 56秒	133度 44分 12秒	平成12年 11月13日 ～ 平成13年 4月9日	3,000	グラウンド 拡張工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
母代寺土居 屋敷遺跡	集落跡	平安時代末 鎌倉時代	井戸 土坑 溝 掘立柱建物 ピット 粘土採取跡	土師器 須恵器 （亀山窯製品） 布目瓦・石鍋 瓦器・瓦質土器 青磁・白磁 鉄製品・窯壁片 井戸枠木製品	○12世紀～13世紀初めにかけての屋敷跡 ○井戸出土の12世紀後半の一括資料 ○古代末の粘土採取に伴う土坑(土取り跡)

高知県香南市発掘調査報告書第３集

母代寺土居屋敷遺跡

野市町立佐古小学校グラウンド拡張整備事業に伴う発掘調査報告書

2010年３月

発行　高知県香南市教育委員会
香南市文化財センター
〒781-5453　高知県香南市香我美町山北1553-1
電話　0887-54-2296
印刷　株式会社　飛　鳥